

2025 大阪・関西万博を契機とした地方公共団体による
地域活性化に資するアフリカ地域との国際交流調査

調査報告書

令和8年2月

内閣官房 国際博覧会推進本部事務局 委託事業

近畿日本ツーリスト株式会社

目次

第1章 事業概要.....	3
1-1 事業の背景.....	3
1-2 事業の目的.....	3
1-3 令和7年度事業の概要.....	4
1-4 事業対象団体一覧.....	4
第2章 自治体別プロジェクトの概要と成果一覧.....	6
第3章 個別プロジェクトの実施内容.....	32
3-1 北海道東神楽町 × ケニア.....	32
3-2 北海道大空町 × セーシェル.....	39
3-3 北海道浦幌町 × マリ.....	52
3-4 宮城県利府町 × ガーナ.....	68
3-5 秋田県にかほ市 × リベリア共和国.....	75
3-6 山形県遊佐町 × マダガスカル.....	86
3-7 群馬県みなかみ町 × コンゴ民主共和国.....	95
3-8 神奈川県横浜市 × ウガンダ・コートジボワール・セネガル・ブルキナファソ・マ ラウイ・マリ.....	107
3-9 神奈川県横浜市 × エチオピア.....	117
3-10 神奈川県横浜市 × ガーナ.....	130
3-11 神奈川県横浜市 × ケニア.....	135
3-12 神奈川県横浜市 × タンザニア.....	147
3-13 神奈川県大磯町 × ウガンダ.....	158
3-14 滋賀県近江八幡市 × モザンビーク.....	177
3-15 大阪府大阪市 × ガーナ.....	185
3-16 大阪府大阪市 × ケニア.....	206
3-17 大阪府大阪市 × ルワンダ.....	227
3-18 大阪府八尾市 × リベリア.....	237
3-19 大阪府河内長野市 × ブルキナファソ.....	242
3-20 大阪府松原市 × タンザニア.....	248
3-21 大阪府和泉市 × セネガル.....	251
3-22 大阪府羽曳野市・藤井寺市・富田林市・大阪狭山市 × エジプト.....	259
3-23 大阪府東大阪市 × ベナン・タンザニア・コートジボワール.....	268
3-24 大阪府高石市 × マダガスカル.....	277
3-25 大阪府交野市 × エチオピア.....	283
3-26 奈良県橿原市 × ブルキナファソ.....	288

3-27	広島県広島市 × カメルーン	293
3-28	徳島県上勝町 × ナイジェリア	309
3-29	徳島県松茂町 × ガーナ	321
3-30	愛媛県 × モザンビーク	339
3-31	高知県本山町・土佐町 × セーシェル	347
3-32	大分県杵築市 × ジンバブエ・ブルンジ	360
3-33	宮崎県えびの市 × マダガスカル	366
3-34	鹿児島県三島村 × ギニア	374
3-35	沖縄県宜野座村 × カメルーン	381
第4章	成果の分析	390
4-1	成果の5分類	390
4-1-1	愛着と誇りと形成	391
4-1-2	教育・人材育成	392
4-1-3	新たな広がり	393
4-1-4	認知向上・理解促進	394
4-1-5	国際交流の基盤構築	395
4-2	成功要因	396
4-3	今後に向けた課題	398
4-4	今後の展望	399
第5章	アンケート結果	401
5-1	回答から得られた主な傾向	401
5-2	アンケート結果一覧	402
第6章	成果発信・広報の取組	412
6-1	自治体通信を活用した成果発信	412
6-1-1	実施概要	412
6-1-2	目的（狙い）	412
6-1-3	掲載内容	413
6-2	万博国際交流プログラム「成果報告会」	414
6-2-1	実施概要	414
6-2-2	目的（狙い）	414
6-2-3	実施内容	415
第7章	まとめ（総括）	416

*第4章、第6、第7章の記述は、その他地域との交流（別事業）と同じ内容。

第1章 事業概要

1-1 事業の背景

2025年国際博覧会（以下、「大阪・関西万博」という。）は、20年ぶりに我が国で開催される国際博覧会である。諸外国の関心も高く、令和6年12月27日時点で158の国・地域の参加表明が得られている。

内閣官房国際博覧会推進本部事務局（以下「主管事務局」という。）では、万博国際交流プログラムを推進しており、令和5年度補正事業において、大阪・関西万博の契機とした地方公共団体による地域活性化に資する国際交流の取組みに係る調査を実施。同調査は、令和4年度補正予算による「モデル事業」において、欧米やアジア地域以外との交流に課題があることを受けて、万博会期前において、①アフリカ地域、②中東地域、③中南米地域、④大洋州島嶼国地域との交流を促進する仕組みを調査するものである。

今般、令和6年度補正事業においては、令和5年度補正事業の枠組みを継続し、万博会期中及び万博会期後という各国の日本への期待が高まる時期において、①アフリカ地域、②中東地域、③中南米地域、④大洋州島嶼国地域といった日本の自治体と姉妹都市提携数や交流実績の少ない地域との交流をどのように構築することが、万博のレガシーとして長期に継続し得る国際交流の取組の創出に寄与するかを調査するものである。

なお、万博において、全国のこどもが万博を訪れ、未来社会を体験して将来に希望を感じてもらうことが万博の最大の「成功」であり、こどもが能動的に万博に関わり、万博を感じられる方策として、万博参加国と日本の自治体との国際交流をこどもが体験することは最も効果的な方策の1つである。このため、大阪・関西万博のテーマやSDGs等に関連した交流に加え、交流対象地域とのこどもを中心とした交流についても、こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮という観点からどのような交流がより効果的であるか調査するものとする。

1-2 事業の目的

本事業では、大阪・関西万博で自治体を実施する国際交流事業（会期中の交流や会期後のレガシー形成等）に向けて、万博会場内や自治体において各国の万博関係者等を受け入れて国際交流事業を実施するために、自治体からの事業申請内容に関する情報収集とそれを踏まえた自治体の選定、事前の調査・交渉、相手国関係者を万博会場内や自治体に招へいしての実地調査を行う。なお、本事業は、アフリカ地域の万博参加国・地域を相手国とする調査を行うもの。

1 - 3 令和7年度事業の概要

本事業では、万博国際交流プログラムに登録する自治体の中から調査対象自治体を募集し、選定委員会による選定を行った上で、各自治体が策定する交流計画に基づく取組に対し、計画段階から実施、成果の取りまとめに至るまで一貫した伴走支援を行った。なお、事業費の申請を行わなかった自治体（大阪府泉佐野市）についても、適宜伴走支援を実施した。

具体的には、万博会期中の万博会場内外における交流事業および会期後の交流に関する進捗管理を行うとともに、自治体からの求めに応じて情報収集や各種調整の支援を実施した。

これらの取組を通じて得られた成果や課題、実施プロセスを体系的に整理し、他自治体への横展開が可能なモデルとしてとりまとめることで、万博を一過性のイベントにとどめることなく、地域に根付く国際交流のレガシー創出につなげることを目指した。

1 - 4 事業対象団体一覧

No	自治体名	交流相手国	採択
1	北海道東神楽町	ケニア	二次
2	北海道大空町	セーシェル	二次
3	北海道浦幌町	マリ	一次
4	宮城県利府町	ガーナ	一次
5	秋田県にかほ市	リベリア	一次
6	山形県遊佐町	マダガスカル	二次
7	群馬県みなかみ町	コンゴ民主共和国	三次
8	神奈川県横浜市	ウガンダ・コートジボワール・セネガル・ブルキナファソ・マラウイ・マリ	三次
9	神奈川県横浜市	エチオピア	二次
10	神奈川県横浜市	ガーナ	三次
11	神奈川県横浜市	ケニア	三次
12	神奈川県横浜市	タンザニア	二次
13	神奈川県大磯町	ウガンダ	一次
14	滋賀県近江八幡市	モザンビーク	四次
15	大阪府大阪市	ガーナ	一次
16	大阪府大阪市	ケニア	一次
17	大阪府大阪市	ルワンダ	一次
18	大阪府八尾市	リベリア	二次

19	大阪府泉佐野市	ウガンダ	—
20	大阪府河内長野市	ブルキナファソ	一次
21	大阪府松原市	タンザニア	一次
22	大阪府和泉市	セネガル	一次
23	大阪府富田林市・羽曳野市・藤井寺市・大阪狭山市	エジプト	一次
24	大阪府東大阪市	ベナン・タンザニア・コートジボワール	一次
25	大阪府高石市	マダガスカル	一次
26	大阪府交野市	エチオピア	一次
27	奈良県橿原市	ブルキナファソ	一次
28	広島県広島市	カメルーン	一次
29	徳島県上勝町	ナイジェリア	一次
30	徳島県松茂町	ガーナ	一次
31	愛媛県	モザンビーク	一次
32	高知県本山町・土佐町	セーシェル	二次
33	大分県杵築市	ジンバブエ・ブルンジ	一次
34	宮崎県えびの市	マダガスカル	二次
35	鹿児島県三島村	ギニア	一次
36	沖縄県宜野座村	カメルーン	一次

第2章 自治体別プロジェクトの概要と成果一覧

自治体	相手国	会場・場所	取組・イベント・交流事業概要
北海道東神楽町	ケニア	大阪の淀川河川敷 ケニアマラソン	6月22日：大阪の淀川河川敷「ケニアのチャンピオンと走ろう in 大阪」にケニア大使館から招聘をいただき、東神楽町の中学生2名が参加。東神楽町は自地域でマラソン大会も定着しており、マラソンという共通点で交流ができた。
		ケニアビジネスフ ォーラム 大阪国際コンベン ションセンター	6月23日：東神楽町のイチゴをはじめ特産品を持参し展示。ケニア政府代表、ケニア大使と交流。
		EXPO ナショナルデー	6月24日：大阪万博のケニア・ナショナルデーを訪問。山本進町長、森國孝芳議長他自治体職員が式典に参加した。
		東神楽町	6月28日：ケニア大使館と大阪・関西万博ケニア館の関係者5名が東神楽町を訪れ、町民イベントに参加したほか、藤本壮介氏が設計した複合施設「はなのわ」に記念のバラを植えた。 6月29日に開催されたフラワーフェスタにも参加、ケニアのPRを行った。
		東神楽町	7月14日：ケニアの特命全権大使モイ・レモシラ大使が東神楽町役場を訪問し、山本町長と意見交換を行う。また、記念植樹も行う。
		東神楽町	7月14日には、東神楽小学校と東神楽中学校で、モイ・レモシラ駐日特命全権大使から子どもたちにケニアの話をしていただいた。
		EXPO ケニアブースなど	8月6日：万博会場を町内の東神楽小中学生20名が訪問し、ブースを訪問すると共に、東神楽町出身の藤本プロデューサーの説明を受ける。
		ひがしかぐらパー ベキューマラソン	10月5日：町の継続イベントである「ひがしかぐらパーベキューマラソン」にケニア大使ご一行に参加いただき一緒に走った。開始の挨拶、号砲を鳴らすなど協力いただいた。

北海道大空町	セーシェル	大阪→高知→大空町	8月25日～9月3日：セーシェルからの生徒10名と教員4名を招請、大空高校生徒が全行程同行した 8月25日関空着/26日大阪視察/27日万博訪問/28日～31日高知県滞在/31日～9月3日網走滞在/9月3日東京大学にて報告会を行った
		EXPO セーシェルブース	8月27日：EXPO訪問 セーシェルブースでは来場者にインタビュー（クイズ）するなどの運営を通し交流を深める
		本山町・土佐町・大空町	8月28日～31日：高知県3泊4日 万博会場での交流終了後、高知県本山町に向かい、交流プログラム終了後、全員で大空町に来るという一連の流れ。 8月31日～9月3日：大空町3泊4日 モルック大会や家庭科実習、オホーツク地域の歴史を学び交流した。
		【成果】 本事業では、セーシェルの中高生と北海道大空町・大空高等学校を中心とした交流を実施し、教育・文化・地域資源を活用した国際理解の促進を図った。町長への表敬訪問や寮生を含む交流、モルック大会等の体験型プログラムにより、言語に依存しない相互交流が進展した。また、学校教育や地域の自然・歴史を体感する機会を通じ、参加者の国際的視野が拡大し、将来的な再交流や留学生受入れに向けた基盤形成につながる成果が得られた。	
北海道浦幌町	マリ	浦幌町内	6月29日：ディディエ・ダコ大使、ウスビ サコ氏、サリフ サコ氏を浦幌町に招待し、未来を担う子どもたちと、マリ共和国の文化・人々との出会いを通して、「未来へつなぐ活動や多様性を学ぶ特別な時間を一緒に過ごしませんか?」というテーマで交流。町民40名（内子供15名）が参加した。
		浦幌町内 コスミックホール	7月19日：マリの音楽パフォーマンスとジャンベ体験ワークショップ（小学生含む）約40名
		EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」 アフリカンレストラン 「PANAF」	8月2日：マリ・ナショナルデーの公式式典に参加。町長は晩餐会にも出席 8月3日：浦幌町内の小学生13名がアフリカンレストラン内でジャンベを演奏。町長も出席。 ＜ナショナルデー子ども国際交流における子どもの想いを受け止める交流＞浦幌町の子どもたちが描いた「マリ共和国との交流への想い」を、動画および字幕を用いて発表。うらほろ国際交流大使団代表児童・生徒2名によるスピーチ発表。 ＜ナショナルデー子ども国際交流における子ども音楽・文化交流＞アフリカ音楽演奏家とともに挙るジャンベ演奏、マリ出身者および万博参加者とのダンスを通じた交流、浦幌町内で集めたチャリティーグッズの贈呈
		浦幌町中央公民館	10月25日：毎年開催される町の文化祭「うらフェス」にて万博に派遣された「うらほろ国際交流大使団」によるジャンベ演奏でオープニングを行った。 子どもたちによるショートスピーチ、サリフ・サコ氏（マリ共和国）からのコメント、モニター映像を活用した活動報告、「未来の交流の絵」の展示

		<p>【成果】 浦幌町では、万博マリ・ナショナルデーにおけるジャンベ演奏を中核に、子ども達をうらほろ国際交流大使とし、現地音楽家と共演し、世界の来場者に向けて地域の学びと挑戦を発信。大舞台での演奏体験は子どもたちの自信と郷土への誇りを大きく高めた。さらに、本交流を契機に、マリ国関係者と地域の実践者が一般社団法人 SackOmi を創設し、浦幌町で培ってきた独自の人材育成の取組みである「うらほろスタイル」の価値を世界へ広げる基盤を構築した。</p>	
利府町	ガーナ	EXPO ガーナブース	7月27日：利府町自治体職員が万博のガーナブースを訪問。ガーナからの訪日団のお出迎え及び翌日からの利府町訪問について打合せを行った
		利府町	<p>7月28日～30日：ガーナからの訪問団22名が利府町を訪問し、歓迎セレモニー及び歓迎レセプションが開催された。歓迎レセプションは、町内の施設 リフノスにて開催された。町長を始め43名の町内の代表者、関係者が参加され盛大に開催された。アトラクションとして、津軽三味線や地元の利府太鼓が披露され、華やかに開催された。</p> <p>また、県立利府高等学校ではお互いの教育・文化について英語による意見交換を行うとともに、日本の部活動である剣道・弓道を体験するなど、高校生同志が触れ合いを通じて、国際交流を身近に体験した。さらに、本町の図書館の視察、小学校IT教育授業の体験などを実施した。</p> <p>7月29日：宮城県立利府高校を訪問し交流をおこなった。</p> <p>①剣道部員との交流・・・部活動の見学、剣道部員による素振り指導と体験 ②弓道部員との交流・・・部活動の見学、弓道部員による指導と体験 ③両国高校生による意見交換会（利府校教室）・・・ガーナ高校生によりガーナの紹介。利府高生徒による学校紹介。質疑応答。</p>
		利府町各所の集会場	<p>4月29日～11月17日に町内各所で開催した地域懇談会にて「万博国際交流プログラム」で実施した内容を住民と共有し、国際交流への理解を促進。配布資料作成にあたっては、ガーナ関係者とも共有し、会期後のネットワークの維持にも努めた。①リフノス（文化交流施設）春フェスタ ②ALL RIFU 産業祭 ③学校給食ガーナ料理提供 ④地域懇談会など町が主催するイベントに万博国際交流プログラム事業PRブースを設け、ガーナクイズや写真、衣装・太鼓などを展示。学校給食（小学校6校、中学校3校）においてガーナ料理を提供し、食文化を通じた国際理解教育を実施した。万博事後事業では町の施策を説明する地域懇談会（町内全地区対象）では、国際交流の取り組みについて紹介するなど、地域理解を深めた。</p>
			<p>【成果】 本事業では、ガーナの教育関係者及び高校生を利府町に招へいし、学校交流、文化・産業体験等を通じた国際交流を実施した。高校生同士の英語による意見交換や部活動体験により、若年層の国際理解及び多文化共生意識が向上した。また、地域団体と連携した文化・産業交流を通じ、町民の異文化理解の促進と地域資源の再認識につながった。加えて、子ども達が自ら地域の歴史や文化を学び発信する過程を通じ、シビックプライドの醸成が図られるなど、当初の目標に沿った成果が得られた。</p>

秋田県にかほ市	リベリア	EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」	8月26日：リベリア・ナショナルデーにサイドイベントとしてにかほ市の高校生とリベリアのダンサーによるダンスの共演とパレードを行った。リベリア共和国×にかほ市交流スピーチとリベリアブースでの調査とレポート作成。
		にかほ市内の学校	9月18日～20日 陸上選手及びコーチ（計3名下記）をにかほ市に招請、にかほ市の小学校と施設を巡回しスポーツを通じた交流を行った。 ①リオ五輪 / 東京五輪 / パリ五輪出場選手 Emmanuel Matadi ②コーチ、オリンピック（アトランタ五輪 / シドニー五輪 出場）Kouty Mawenh ③東京 2025 世界陸上リベリアコーチ、オリンピック（アトランタ五輪 / シドニー五輪 出場）Sayon Cooper
		オンライン交流	10月28日：オンライン柔道交流を実施した にかほ市立金浦中学校武道場⇄リベリア（オンライン） 17：00～17：20 リベリアを知る【万博交流に参加した仁賀保高校生の発表】 17：30～19：00 オンライン交流
		【成果】 本事業では、大阪・関西万博を契機に、リベリアとのスポーツ及び文化交流を実施し、国際理解の促進と人材育成を図った。万博会場内のナショナルデーでの交流発表やダンス交流、世界陸上関係者の招へい、オンライン柔道交流を通じ、児童生徒が国際社会と直接関わる機会を創出した。加えて、成果発表を市内行事等で共有することで、市民への波及効果も認められた。スポーツを媒介とした国際交流に焦点を絞り、地域の子供たちに貴重な学びの場を提供した。	
山形県遊佐町	マダガスカル	遊佐町	7月24日～26日：マダガスカルから日本語を学ぶ生徒を招待。町内中高生が体験プログラム3泊4日をアテンドした。＜内容＞ウェルカムパーティ、遊佐町ジオパーク体験、遊佐中学校・遊佐高校授業体験、制服体験、遊佐の特産品で蕎麦打ち体験、寮暮らし体験（お弁当作り体験等）、万博報告会用オリジナルTシャツづくり、浴衣着付け体験、町民花火大会参加、フェアウェルパーティ。地域教育魅力化プラットフォームの「地域みらい留学」の延長線上の取り組み。世界からの生徒誘致を見据える。県立遊佐高校ではすでに日本都市部からの越境留学は受け入れている。訪日団の引率者（24歳女性）を地域おこし協力隊として登用する計画が進行している。
		EXPO 会場フューチャーライブレジェ	7月27日：マダガスカルから来日した日本語を学ぶ生徒と自治体の学生が共に過ごした自治体での体験の発表とマダガスカル民族ダンスパフォーマンス。
		オンライン	9月19日：万博国際交流プログラムの参加者振り返り マダガスカル共和国、えびの市、遊佐町の参加者で振り返り会

		オンライン	<p>万博会期後：留学生およびマダガスカルからの地域おこし協力隊の招致に向け、本人およびカウンターパートとなる学校との協議（交流）を継続的に進めている。</p> <p>①地域おこし協力隊の誘致（令和8年度採用予定）</p> <p>②留学生の誘致 短期留学を令和8年度に予定している。短期留学（数週間～1年）の受け入れを実施予定。マダガスカルの私立中学校校長や、遊佐高校と調整中。留学生の滞在については民間寮での受け入れを予定。</p>
		【成果】	<p>本事業では、大阪・関西万博を契機に、マダガスカル共和国の生徒・教員を受け入れ、学校・地域・自然資源を活用した交流を実施した。留学体験や地域住民との協働活動を通じ、参加した中高生が主体的に交流を企画・運営し、国際理解の深化と郷土への再認識が図られた。また、次年度以降の計画も見据えた中で事業を運営し、R8年度に短期留学生を迎える計画が実現にむけ準備が進んでいる。また、夏に来訪したマダガスカル人通訳を「地域おこし協力隊」として迎える計画も具体化しており、次のステップへ着実な一歩を踏み出した。</p>
群馬県みなかみ町	コンゴ民主共和国	藤原小学校	<p>6月6日：藤原小学校学校訪問(出前授業)</p> <p>参加者：MINAKAMI TOWN.EXE 選手のスティーブ選手(コンゴ民主共和国出身)、ミロシュ・チョイバシッチ選手(セルビア出身)、大塚選手、日下選手、新保選手と山梨トレーナー。</p> <p>スティーブ選手によるコンゴ民主共和国の説明及び質疑応答を行い、その後3x3やバスケットボールを通じた交流を行った。</p>
		町内バスケット会場	<p>3x3 UNITED MINAKAMI ROUND によるブース出展</p> <p>実施日：7月6日(日)</p> <p>実施日：9月7日(日)</p> <p>○コンゴ民主共和国ブース出展</p> <p>○ゲーム開会前にコンゴ人選手紹介と挨拶</p>
		月夜野総合体育館	<p>7月12日：みなかみ町主催のプログラム「みなかみ町生涯スポーツフェスティバル」にコンゴブースを出展。各種スポーツ体験、モルック大会、ダイナソーレースへ参加。</p>
		町内スポーツ施設	<p>7月12日：イベント名：みなかみ町生涯スポーツフェスティバルに出展</p> <p>コンゴブースを設置。コンゴ民主共和国についての説明を実施した。</p> <p>スティーブ選手には、モルック大会に参加して頂き、町民と触れ合う機会を提供した。</p>
		EXPO コンゴ民主共和国ブース	<p>10月9日：コンゴ民主共和国出身選手を含むバスケットボールチーム関係者3名が万博会場を訪問し、コンゴ民主共和国ブースにおいてコンゴ民主共和国出身選手の活躍を紹介しつつ、交流。</p>
		矢瀬親水公園	<p>10月11日：スポ GOMI in みなかみを開催し、市民とコンゴ選手の触れ合いの機会を創出した。</p>

		新治小学校	12月4日：コンゴ出身のスティープ選手を含むプロバスケットチームの選手の出前授業と、コンゴ民主共和国大使館エグゼクティブディレクターのフレディーさんからコンゴ民主共和国との国際交流事業についての紹介。
		MINAKAMI TOWN.EXE 事務所内	12月4日：コンゴ出身選手を含むプロバスケットチームの選手の出前授業（利根商業高等学校インターン生向け）と、コンゴ民主共和国大使館エグゼクティブディレクターのフレディーさんからコンゴ民主共和国との国際交流事業についての紹介。
		利根商業高等学校	12月12日：コンゴ民主共和国大使館 PR 大使のバトリックさんからコンゴ民主共和国との国際交流事業についての紹介とバスケットボール交流。
		【成果】	本事業では、大阪・関西万博を契機に、3x3 プロバスケットボールチームを核としたスポーツ交流を通じ、コンゴ民主共和国との国際交流を多面的に実施した。学校訪問、出前授業、町主催イベント及び3x3公式大会等を通じ、子どもから大人まで幅広い世代から「推し」の対象として認知され、地域へのロイヤリティの強化という成果をもたらしている。また、来場者数の増加や継続的なイベント開催により、地域の賑わい創出や関係人口の拡大が確認された。加えて、スポーツ留学誘致に向けた土台形成や、万博会期後も継続可能な交流モデルの構築に寄与する成果が得られた。
神奈川県横浜市	エチオピア	オンライン	4月23日～12月19日：SNSを通じて、エチオピア情報を発信する。エチオピア出身留学生と横浜市内の小中高生と連動し、アフリカ情報や独自企画を発信。横浜市国際学生会館に居住するエチオピア留学生・家族を中心に、様々なエチオピア情報を SNS 等で届ける。
		EXPO エチオピアブース	7月13日：横浜サイエンスフロンティア高校3名及び在横浜市エチオピア人留学生と家族4組10名が万博を訪問。エチオピアブースでは、ヨディット・アレマエフ（外国市場促進担当シニアエキスパート）、エチオピア、アディスアベバ（貿易省）から説明を受けた
		鶴見区役所、横浜駅等	市内の各種催事で交流の情報発信を行った ①6月3日駐日エチオピア大使が横浜市国際学生会館を訪問し交流を実施 ②6月7日～8日エチオピア人留学生家族がお祭り（鶴見区潮田例大祭神輿）に参加し交流を実施。（神輿を担ぐ） ③6月29日サッカー横浜 YSCC 戦にてイベント実施 ④7月7日KANAFAN まつりにてブース展開 ⑤8月7日子どもアドベンチャーカレッジ出演 ⑥9月6日～7日高校文化祭でエチオピアを紹介
		【成果】	本事業では、大阪・関西万博及び TICAD9 を契機に、エチオピア大使館や留学生等と連携し、横浜市内において多様な国際交流事業を実施した。エチオピア大使と高校生・留学生との対話、地域行事やスポーツイベント、万博バビリオン訪問等を通じ、市民及び次世代層の異文化理解と国際意識の向上を図った。あわせて、エチオピアとの友好関係を強化し、万博後も継続可能な交流基盤の形成に寄与する成果が得られた。

神奈川県横浜市	タンザニア	横浜市内の高校や JICA 等	タンザニアより高校生を招待。市内の施設を巡回し交流を進めた 9/30 横浜商業高校・サイエンスフロンティア高校訪問 10/1 横浜ベイスターズ 10/3 慶応高校、在日本タンザニア連合共和国大使館、東京農業大学訪問 10/4 JICA 横浜 10/5 神奈川県立横浜商業高等学校
		EXPO タンザニアブース	10月2日：タンザニアから招請した高校生を万博にご案内。 タンザニアブースで自国の万博関係者と交流、また、万博を訪れていた大阪の中高生と万博会場内でコミュニケーションをとる場面もあり、タンザニアについて紹介した。
		インターネット	タンザニア球児来日活動記録をまとめ来日したタンザニア人と共有、Youtube でも配信し交流の様子を拡散した。
		【成果】 本事業では、大阪・関西万博及び TICAD9 を契機に、タンザニアから高校生を招へいし、学校交流、スポーツ交流、万博訪問、市民参加型イベント等を実施した。市内複数校や大学、JICA、大使館等と連携した多層的な交流により、延べ 450 名以上の横浜市内の学校の生徒が国際交流を体験し、異文化理解と多文化共生意識の向上が図られた。また、継続的な都市間・学校間交流の基盤が構築され、万博後の国際交流レガシー創出に寄与した。	
神奈川県横浜市	ウガンダ・コートジボワール・セネガル・ブルキナファソ・マラウイ・マリ	EXPO マラウイブース訪問	7月7日：星槎学園職員 6 名＋生徒 8 名が万博を訪問。 マラウイのブースにおいて、高校生がマラウイ共和国の課題と課題に対する対策（水問題を解決するための竹炭を使用した浄水ろ過器の提案）を大阪・関西万博マラウイ共和国ブースで発表。その後、10月30日にはマラウイ共和国大使館にて学習成果発表。
		マラウイ共和国大使館	マラウイ共和国大使館を訪問し、学習成果発表。
		星槎学園	11月15日：「SEISA Africa Asia Bridge 2025」（主催：SEISA Africa Asia Bridge 実行委員会・横浜市国際局実施。）（来場者 10,593 名） アフリカ各国の大使および関係者を招請し、交流。 イベントでは、上記マラウイブース訪問チームも発表。
		【成果】 本事業では、大阪・関西万博を契機に、アフリカ 6 か国を中心とした大使館・教育機関・国際機関等と連携し、児童生徒主体の国際交流事業を実施した。探究学習の成果を万博会場や大使館で発信するとともに、大規模国際交流フェスティバル「SEISA Africa Asia Bridge 2025」を開催し、延べ 1 万人超が参加した。多様な文化や SDGs 課題を扱う交流を通じ、国際理解の深化と共生社会の理念普及が図られたほか、自治体・学校・民間が連携する持続可能な国際協働モデルの構築に寄与した。	
神奈川県横浜市	ケニア	横浜商業高等学校	8月3日～6日：アライアンス高校（生徒 1 名と教員 1 名）を横浜市に招請。 8月4日：横浜商業高等学校にて相互文化交流を行う。4日の午前中はアライアンス高校の 3 名と 2 月に同校を訪問した 1,2 年生、11 月に派遣プログラムに参加する 2 年生が Y 校に集合、駐日ケニア共和国大使館よりアーサー・アンダンピ次席が来校し、校長室で歓迎式を行った。

		EXPO ケニアブースなど	8月5日：横浜商業高校の生徒5名と教員2名とケニアの高校生と一緒に万博に訪問。 ケニアブースに立ち寄り、責任者のピーター氏とスタッフによりセレモニーが開かれ、万博会場での交流が実施された。
		横浜市 本会議場	8月20日：TICAD9の横浜市会にて歓迎行事としてウィリアム・サモエイ・ルト大統領が演説を行った。2月に派遣された生徒と11月に派遣予定生徒が招待され、演説を聞いた後、代表生徒の天野さんから大統領に花束の贈呈という大役を任された。
		ケニア派遣（ナイロビ等）	11月22日～28日：横浜商業高校生徒をケニア国に派遣し、学校訪問（高校、小学校）、文化体験、村を訪問し、交流する。 (生徒8名、引率教員2名、国際局(アナクワさん)1名)
		【成果】 本事業では、大阪・関西万博及びTICAD9を契機に、ケニア共和国大使館及びアライアンス高校と連携し、相互訪問や万博派遣、現地研修を通じた多層的な国際交流を実施した。高校生同士の対話や共同体験により、多文化共生への理解と国際的視野の拡大が図られた。また、万博訪問や現地施設視察を通じ、地球規模課題を自分事として捉える力が育まれ、継続的な学校間・都市間交流につながる基盤形成に寄与した。	
神奈川県横浜市	ガーナ	EXPO ガーナブース	7月30日：11月にガーナへ渡航する生徒5名（横浜高校）と引率2名が万博を訪問。 ガーナブースにて、現地経済産業省の担当者レーチェル氏と交流。 ガーナブースの展示を見ながら説明を受け、質疑応答、民族衣装を着るなど渡航前の事前学習を実施。
		ガーナ国内アチモタ高校等	11月1日～6日：横浜南高校で選抜された生徒6名がガーナを訪問。 アチモタ高校での交流、カカオ農園見学、アクラ市内観光、日本大使館を訪問。
		【成果】 本事業では、大阪・関西万博を契機に、横浜市立南高等学校の生徒がガーナとの交流を実施し、国際理解と人材育成を図った。万博会場でのガーナ政府関係者との対話に加え、現地ではアチモタ高校での授業体験や農園見学、大使館訪問等を行い、異文化や途上国の現状への理解を深化させた。これらの取組により、生徒の国際的視野が拡大するとともに、学校間及び自治体間の継続的交流につながる基盤形成が図られた。	

神奈川県大磯町	ウガンダ	大磯町内	<p>ウガンダとの交流を軸にしたワークショップを通年（5月～11月）で開催、町の募集で集まった子供21名が参加した。</p> <p>5月31日（土曜日） 9：30～12：00 【事前学習】 ・オリエンテーション（事業説明・グループ分け）／・こどもまんなか講演会「こどもの権利を楽しく学ぶ」</p> <p>6月28日（土曜日） 午前中 【事前学習】 ワークショップ／ ・学ぶ、調べる内容の整理や万博の視察場所の設定 等</p> <p>7月21日（月曜日） 万博の訪問計画確認・一緒に万博に行くウガンダ人のディクソンさんとマーガレットさんを交えて大磯町とウガンダの関係やウガンダの現状、将来について話し合った。</p>
		大磯町	7月21日（火曜日） ～ 7月24日（木曜日） ・ウガンダからウガンダ人を招待し交流。
		EXPO ウガンダブースなど	<p>7月21日（火曜日） ～ 7月24日（木曜日） ・ウガンダからウガンダ人を招待し交流。</p> <p>7月23日に万博訪問。ウガンダ人招待者と一緒に事前学習参加者が万博会場を訪問（町長も同行）（町長：万博会場から大磯町ラジオ番組で万博の様子を生配信）。</p>
		大磯町内	<p>8月20日（水曜日） 午前中 【事後学習】 ワークショップ／知ったこと、学んだこと、感じたことなどのまとめ</p> <p>10月4日（土曜日） 午前中 【事後学習】 ワークショップ／報告会に向けた準備</p> <p>11月15日（土曜日） 報告会で各チームが発表、終了証授与</p>
		<p>【成果】</p> <p>本事業では、大阪・関西万博を契機に、ウガンダとの交流を軸とした体験型学習プログラムを実施し、町内の小学生から高校生まだが主体的に学び、発信する機会を創出した。事前・事後学習会や万博視察、報告会を通じ、国際課題やSDGs、子どもの権利に対する理解が深化するとともに、地域や世界を自分事として捉える力が育まれた。あわせて、町民参加型の報告会により地域への波及効果も生まれ、次世代育成と国際交流の継続に向けた基盤形成に寄与した。</p>	
滋賀県近江八幡市	モザンビーク	EXPO モザンビーク館	<p>9月13日：モザンビークバビリオンで安土中学校吹奏楽部生徒が音楽演奏を行い、オンラインにてモザンビークのアルバジーニ小学校児童と音楽交流を行った。</p> <p>アルバジーニ小学校がリズム音楽にあわせたダンスを、安土中学校が歌の演奏合唱を行い、互いに協働することでつながりのひと時を楽しんだ。</p>
		駐日モザンビーク大使館訪問 オンライン MTG	<p>0月31日：本市自治体担当者が大使館を訪問。</p> <p>9月13日実施の音楽交流会の報告、今後の文化交流・産業交流について、歓談と意見交換を行う。</p> <p>11月28日：オンラインでの3者会議を行った。</p> <p>3者＝東京 モザンビーク大使館 モザンビーク共和国ナカラ市役所（商工団体、自治体職員） 近江八幡市役所（民間交流団体、自治体職員）</p> <p>今後の文化交流・産業交流について、歓談と意見交換を行う。</p>

		<p>【成果】 音楽を通じた継続的な交流により、生徒同士が国境を越えて感情や思いを共有する体験が生まれ、異文化を自然に受け入れる姿勢が育まれた。オンラインと対面を組み合わせた交流は、距離を超えてつながれるという実感をもたらし、国際交流への心理的ハードルを下げた。地域としても、学校・市民・海外関係者が連携する枠組みが強化され、今後の文化・人的交流の持続性につながる成果が得られた。</p>
大阪府 大阪市	ケニア	<p>ケニアブース訪問</p> <p>6月12日には大阪市立湯里小学校の1年生から3年生までの児童59名が、6月18日には4年生から6年生までの児童91名が、大阪・関西万博のケニアブースを訪問し、ケニア輸出振興ブランド庁の職員と交流を行った。</p>
		<p>淀川河川敷</p> <p>6月22日：ケニア・ナショナルデーに合わせて大阪で開催された記念イベントの一環として、ケニア政府およびケニア大使館主催の「ケニアのチャンピオンと走ろう！マラソン大会」に湯里小学校の児童が3名参加し、マラソンに出場した。</p>
		<p>湯里小学校</p> <p>6月23日：ケニア 投資貿易産業省長官夫人 エリザベス・ワテトゥ氏、同省テクニカルアドバイザー マーティン・キマニ氏、駐日ケニア大使館国防武官 エスター・ワンジク陸軍大佐が湯里小学校を訪問し、学校施設の見学および児童との交流を実施した。1年生から6年生までの各教室を順に訪問し、児童はジャンボ・ブワナを歌い歓迎した。</p>
		<p>EXPO ナショナルデー</p> <p>6月24日：ケニア・ナショナルデーでは文化パフォーマンス等を観覧した後、児童がステージに登壇し、ケニアで有名なスワヒリ語の歓迎の歌「ジャンボ・ブワナ」を合唱した。</p>
		<p>ケニア訪問</p> <p>8月19日～27日：湯里小校長先生をはじめとする職員代表団が、ケニアを訪問し現地交流校等巡り日本文化を紹介する。日本の小学校と繋いでオンライン授業も実施。</p>
		<p>オンライン</p> <p>10月7日、17日：カルバリー・ラーニング・センターの5年生と湯里小学校の3年生が、歌交換、スワヒリ語・日本語の教え合い、自己紹介・質問交流をしてオンライン交流を行った。</p>
		<p>1970年大阪万博の跡地万博記念公園</p> <p>10月20日に湯里小学校の4年生が、21日に1～3年生が1970年大阪万博の跡地である万博記念公園を訪問した。万博記念公演では太陽の塔に上る等のアクティビティを行った。</p>
		<p>湯里小学校</p> <p>10月17日、21日、29日：アフリカンアートの学習と作品展 湯里小学校の5年生が、東アフリカのアート、「ティンガティンガ」アーティストの中島文子氏から直接指導を受け、作品を制作した。鮮やかな色使いや大胆な構図など、異文化の中で発展してきた美術に触れることで、児童の表現にも多様性を取り入れた。制作した作品は校内に展示した。</p>
		<p>大阪総合保育大学の坂上記念ホール</p> <p>11月26日：ケニア国より音楽家を招請し、湯里小学校の生徒のために演奏する</p>

		なく、継続的な学びとして積み重ね、命のつながりや多様性を体感的に理解する力を育んだ。さらに、現地校との信頼関係と学校間パートナーシップの合意により、教育を基盤とした持続的な国際交流の枠組みを構築した	
大阪府 大阪市	ル ワ ン ダ	EXPO ルワンダブース	7月4日：大江小6年生77名+引率教員6名(校長含む)計83名 ルワンダ・ナショナルデー参加 大江小の生徒代表が式典に参加し、相手国国歌を歌う。
		ルワンダ	9月28日～10月4日：校長先生をはじめとする大江小学校の代表団3名がルワンダ現地視察 ルワンダアートミュージアム、アフリカ布マーケット、JICA 海外青年協力隊、クラブ・イラコゼ氏、KISEKI、キガリ虐殺追悼館、コメラクリエイティブ、バツィンダ小学校、ウムチョ・ムイーザ学園、市場、コーヒー農園、在ルワンダ日本大使館を訪問。バツィンダ小学校からオンライン接続し、大江小学校と交流を行った。
		大江小学校	9月16日：日本ルワンダ学生会議の3名を招請し、大江小学校で5年生80名に対し、出前授業を実施した
		大江小学校	10月27日：永遠瑠まりルイズさんを招請し、大江小学校で5年生80名に対し、出前授業を実施した
		ルワンダ大使館	11月18日：大江小学校校長先生および教員3名がルワンダ大使館表敬訪問
		大江小学校	11月19日：紅茶店を営む堀江氏による出前授業（5年生）。ルワンダ紅茶を振舞うとともに、紅茶栽培に適した気候や土地について説明した。また、大江小学校とバツィンダ小学校とをつなぐ前のエピソードについても語った。
		オンライン	ルワンダのバティンダ小学校とオンライン交流を実施する 10月2日は学校・地域紹介と合唱交換を、11月25日は大縄飛びを双方の学校で実施する
		交換日記	10月1日～12月22日（大江小学校5年生91名がルワンダの小学校と交換日記を行う） 児童同士1対1ないしは2のペアを組み、交換日記を2往復半行う。双方の学校に、ファイリングした交換日記を保管し、レガシーとする。

		<p>【成果】 大阪府立大江小学校とルワンダ（バツィンダ小学校）との交流は、「平和や命についての理解を深める」と「将来の交流の懸け橋を育む」という目標に対し、大きな成果を上げた。ナショナルデーでの国歌斉唱や現地視察、ジェノサイド体験の講話、オンライン交流や交換日記を通じ、児童は命の尊さと平和の大切さを実感。約8割が平和について深く考えることができたと回答するなど意識の変容が確認された。また、継続的な交流により友情と相互理解が生まれ、交換日記という有形のレガシーも創出。学校間の信頼関係と人的ネットワークが強化され、教育を通じた草の根の国際交流の基盤を確立した</p>	
大阪府 大阪市	ガーナ	EXPO ガーナブース	6月3日：天満中学全校生徒が6月3日万博を訪問（本事業費は活用しない）し、班別行動でガーナブースを訪問し、ガーナに関する知見を深めた。「会場内の外国人観光客に英語でインタビューをしよう」というミッションの下、各班にてインタビューに取り組んだ。
		ガーナ派遣	11月8日～15日：生徒5名、校長含む教員3名、教育委員会1名ガーナを訪問し、現地の学校との交流を実施する 現地の学校との交流、市内視察、日本国大使館表敬訪問、現地で働く日本人、カカオ農家、JICA 海外協力隊員任地などを訪問。途中、天満中学校とのオンライン中継も実施した。
		天満中学校	12月22日：帰国報告会を前生徒の前で行う 各派遣生徒から担当分野における訪問・交流内容を共有した。ガーナ渡航でのプログラムを全員が追体験できるような場となった。
		【成果】 大阪府立天満中学校とガーナとの交流は、万博を契機に全校的な学びと生徒派遣を組み合わせた発展的な国際交流モデルを構築した点に大きな成果がある。万博での全校校外学習により関心を高めた上で、選抜生徒による事前学習・現地派遣・帰国報告までを一体的に実施。派遣生徒はガーナの歴史、社会課題、教育環境の多様性を体感し、異文化理解と主体的行動力を深化させた。帰国後は全校生徒へ学びを還元し、国際課題を「自分事」として捉える機運を醸成。万博後も交流継続を志向する学校全体の意識変容と人的ネットワークが形成された。	
大阪府 八尾市	リベリア	八尾市 （上之島小学校 取組3）	7月6日～8月31日：盲目のシンガー2名（男女各1）と付添2名計4名が来日 7月7日（月）と14日（月）に上之島小学校を訪問し児童にシンガーが国歌を教える。 給食を同食。クラゲバンドを交えた音楽交流を実施する。
		上之島小学校	8月3日 リベリアとの音楽交流を実施 地域で開催する「モノづくり体験イベント」でのリベリアとクラゲバンドとの音楽交流。

	EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」クラゲ館	8月26日：リベリア・ナショナルデーに市長らが公式式典に出席。クラゲバンドおよびリベリアの盲目の10代の歌手の兄弟と一緒に、上之島小学校児童（6年生）がリベリアの国歌を斉唱する。市長は午餐会、リベリアレセプション出席。上之島小学校児童らはリベリア出展エリアやクラゲ館などにて、交流を図る予定。	
	EXPO 会場内フェスティバルステーション	8月27日：フェスティバルステーションにおいて、近畿経済産業局と八尾市、リベリアとの国際交流プログラムの一環として、アフリカと関西の経済的魅力と投資機会を発信し、日本企業とのビジネス連携を促進することを目的とした万博国際経済フォーラムを実施。	
	EXPO 会場内大阪ヘルスケアパビリオンステージ	9月17日：小学3年生3名が大阪ヘルスケアパビリオンにおいてリベリア国との交流を発表。 (当日は、上之島小学校の全生徒が万博を訪問した)	
	八尾市（上之島小学校 および市役所）	10月19日：上之島小学校の運動会にリベリア万博関係者他計8名が訪問。日本の運動会を視察 10月20日：八尾市議会との国際交流として、議場で音楽イベントを催す。その後八尾市役所議場にてリベリア万博関係者によるトークセッション	
	八尾市内会議施設	10月27日：今後の人材交流をテーマに話し合いが行われた 在留リベリア人を市内の中小企業で雇用するための話し合いが行われた。	
	<p>【成果】 八尾市とリベリアの交流は、民間企業が主導し行政が支える官民連携体制のもと、国際交流を地域活性化戦略の中核に位置づけた点に大きな成果がある。教育委員会、学校、市役所各部局、近畿経済局やJICA等を含む“地域コンソーシアム”が形成され、交流は産業振興、人材育成、関係人口創出へと波及した。国際交流が異なる政策分野をつなぐ合意形成の場として機能し、再現性のある民間主導型モデルを構築した。</p>		
大阪府泉佐野市	ウガンダ	EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」	市長、及び職員2名、友好都市民に関与する民間事業者2名がナショナルデーの式典に参加。
		国際交流基金（JF）関西国際センター	11月23日：ふれあい交流祭りにてウガンダブースを設置 万博のパビリオン運営にも従事した方が、ウガンダの民族衣装を着て、ウガンダの文化を紹介し、イベントに参加する地域の人々や、関西国際センターの外国人研修生と交流した。
		<p>【成果】 泉佐野市とウガンダの交流は、人的交流を軸に実践的かつ継続的な関係構築を進めている。市はウガンダ出身人材を国際交流員として登用し、文化理解の深化や市民との日常的な交流を推進。万博期間中にはウガンダ関係者の宿泊施設を提供するなど、万博運営を実務面から支援し、信頼関係を強化。ナショナルデー式典には市長自らが出席し、トップレベルでの交流を実現した。こうした多層的な関与により、自治体と相手国が相互に支え合う持続的パートナーシップの基盤を強化した。</p>	

大阪府河内長野市	ブルキナファソ	河内長野市内ホール	<p>9月に万博会場で実施する演目の練習を通じブルキナファソの音楽家と交流を行った</p> <p>6月21日：市立文化会館ラブリーホール</p> <p>6月29日：市立会館ノバティホール</p> <p>7月13日：市立会館ノバティホール</p> <p>にて市民や子供達と一緒に音楽や芸術などを基軸とした交流事業の実施</p> <p>8月には舞台リハーサルを3回行った</p>
		EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」	<p>ブルキナファソ・ナショナルデーに副市長等が公式式典に出席。</p> <p>市の特別顧問とサキタ氏は晩餐会にも出席。</p>
		9/6-7 大阪・関西万博 EXPO ホール「シャインハット」	<p>9月6日、7日両日：万博会場で「奥河内音絵巻 2025 日月山水タイムマシン」公演した当市の 国宝「日月四季山水図」の世界を舞台として、アーティストや市民など 総勢 400 名以上が出演。本市の自然や歴史の魅力と、ブルキナファソやチェコの音楽をコラボレーションさせた没入型アートステージ。</p>
		河内長野市ラブリーホール	<p>12月6日：「奥河内音絵巻」の再現</p> <p>当日は、会場となる河内長野 - ラブリーホールに駅からつながる商店街を万博会場とみため、地域一帯で万博の余韻を楽しむ構成となっている。</p> <p>駐日ブルキナファソ大使、市長及びサキタハヂメ氏を交えたトークセッションを実施。宗教施設訪問や市民と交流</p>
		【成果】	<p>河内長野市とブルキナファソの交流は、文化芸術を媒介とした「共創型」国際交流を実現し、市民主体の大規模な参画モデルを構築した点に大きな成果がある。万博を契機に、市内ワークショップから本公演、beyond 万博へと一連のストーリーで展開し、約 600 名が出演・運営に関与。子どもから高齢者まで多世代が舞台づくりに参画する中で、シビックプライドと地域内の結束が高まった。さらに、beyond 万博を見据えた「つながる河内長野 EXPO メンバー」約 1,000 名の基盤を生み出し、万博を一過性で終わらせないレガシー創出型モデルを確立した</p>
大阪府松原市	タンザニア	EXPO 会場内 タンザニアブース	<p>5月25日：松原市内の広告性、大学生がタンザニアブースを訪問 参加者数のべ 28 名。3 グループに別れてタンザニアブースにおいてスタッフと交流した「自然や文化・観光紹介」「松原 PR」（5月9日～12日に事前訪問し25日の交流についての打ち合わせを行う）</p> <p>ティンガティンガのブースにて来日アーティストと情報共有・意見交換を行った</p>
		松原市内	<p>8月20日：カフェ meeting! in まつばらでのタンザニア料理体験 & 大阪欄間制作体験</p> <p>市内中学生、高校生、親子、阪南大学の教授とゼミの学生 計 13 名と在日タンザニア人 3 名（大阪・関西万博アフリカレストランのシェフ 1 名含む）が交流した。</p> <p>まつばらテラス（輝）2階 調理室ーバスにて市内移動ー柴垣神社ー大阪欄間の工房「高橋商店」※講師：伝統工芸士 高橋孔明氏</p>

		松原市内 松原中央公園	11月8日～9日： 本市の食のイベント「松原マルシェ」においてタンザニア料理のブースを展開	
		オンライン	11月29日：eスポーツでオンライン meeting! 参加者50名 (内、タンザニア現地20名) 阪南大学の花川ゼミ協力のもと、 タンザニア現地の学校とeスポーツ交流を行う 阪南大学と次年度以降の現地大学との2回目以降のeスポーツオンライン交流について協議、検討中	
		【成果】 松原市とタンザニアの交流は、「互いの地域のファンを増やす」という明確な目標のもと、万博会場、市内、オンラインと多様な場を活用して展開された点に特徴がある。ティンガティンガを軸としたアート交流を発展させ、料理・伝統工芸体験による食と文化の交流、さらに大学間のeスポーツオンライン交流へと広げることで、若者主体の関係構築を実現した。特にeスポーツ交流では、時差や環境の違いを乗り越えながら対話と協働を深め、万博後も継続可能な基盤を形成した。		
	大阪府和泉市	セネガル	和泉市	7月：セネガル共和国から万博での音楽共演のため、ローズファミリー（セネガルの人間国宝 故ドウドウ・ンジャイ・ローズの家族）を招請招聘した
			EXPO いのちのパーク 特設ステージ	7月24日：大阪・関西万博 いのちパーク特設ステージにてセネガル共和国から招聘したローズファミリーやKURAGE BAND KURAGE Band feat.SENEGAL、和泉市の太鼓団体いずみ太鼓 鼓鼓聖泉および和泉市の小学生が共演し、来場者に向けパフォーマンスを実施した。
和泉シティプラザ 弥生の風ホール			7月26日：和泉市民還元音楽祭にて、いずみ太鼓 鼓鼓聖泉とKURAGE BAND KURAGE Band feat.SENEGAL とセネガル音楽隊のコラボプログラムの特別合同演奏ステージを行い、両国の交流をおこなった。また、音楽祭後に交流会が開催され、和泉市よりKURAGE BAND による演奏が段階的に展開され、市民・子どもたちが主体的に参加する多世代・多文化共創のレセプションとなった。	
関西トランスウェイ スポーツスタジアム			11月24日：和泉市の小学生サッカーチームと在日セネガル人チームがサッカーを通して交流を図る	
【成果】 万博「いのちパーク」での共演では、セネガルの伝統打楽器奏者と和泉市 PR 大使・いずみ太鼓、そして市内小学生が世代・国籍を超えて協奏し、創造性の民主化を体現する共創型交流を実現。さらに市民還元音楽祭を通じて成果を地域へ循環させ、万博の感動を市民共有の資産へと昇華した。加えて、サッカー交流では実践的な交流を展開し、相互理解と友情を深化。音楽・文化・スポーツを横断する多層的取組により、国際交流のノウハウの蓄積と人脈構築を実現した。				

大阪府高石市	マダガスカル	高石市役所、夢想園、専称寺	<p>5月26日：高石市役所、夢想園、専称寺を訪問いただき、万博開催期間中の交流の深化とレガシーとしてのマダガスカルのパニラビーンズを活用したジェラートの開発をスタートさせた。またサディア氏よりマダガスカルに工場のある高砂香料株式会社の紹介を受けた。</p> <p>さらに昨年度の交流をまとめたバナーを制作し、マダガスカルパビリオンに展示いただいた。</p>
		高石市 アプラたかいし大ホール	<p>9月20日：万博開催特別企画！高石市×マダガスカル 世界を体感するプログラムの実施</p> <p>高石市：高石市長、高石市総合政策部まち未来戦略室地域創生課 桜田ミレイ（歌手・高石市出身）、Yuki☆DANCE（高石市のダンススクール） 吹奏楽部（清風南海中学校・高校、高石高校、羽衣学園高校）合唱部（高石中学校、取石中学校） NOMENA 氏（マダガスカルパビリオン館長）、ナリアンザチーム その他：JICA 海外協力隊 福井妙恵、human note（ウタのタネ） 会場内でワークショップやブース出展、ステージで演劇や歌、ダンスの披露 マダガスカルに関する展示、マダガスカル産パニラビーンズを使ったジェラートも紹介。</p>
		EXPO アリーナ	<p>9月30日：マダガスカルの内政混乱により当初予定されていたナショナルデー式典は中止。急遽、EXPO アリーナでの公演に切り替わった。合唱パフォーマンスをコモンス祭りにおいても披露し、また、万博を機にマダガスカル産のパニラビーンズを使ったジェラートの商品開発を進めてきた高石市の事業者である株式会社フォレストバンクがパニラジェラートを EXPO アリーナにて販売。今後、高石市のふるさと納税の返礼品にもなる。</p>
		EXPO レイガーデンホール	<p>10月7日：マダガスカル・ナショナルデー参加 中止になったナショナルデーが10月7日に急遽開催、副市長はじめ市の代表団が参加 公式行事、パビリオン訪問、懇親会に参加しマダガスカル関係者との交流を深める</p>
		高石市市役所 専称寺	<p>10月22日：マダガスカルパビリオン館長ノメナ氏の高石市役所表敬訪問 パビリオンに展示いただいた交流バナーとスタンプのご返却 高石市観光施設（専称寺）見学</p>
		<p>【成果】高石市とマダガスカル共和国の交流は、万博を契機に「世界を体感する機会」を市民、とりわけ子どもたちに創出するとともに、経済交流へと発展した点に大きな成果がある。政府代表やパビリオン館長の相互訪問、万博会場での合唱共演や市民参加型フェアを通じて、相互理解と友好関係を深化。特にマダガスカル産パニラビーンズを活用したジェラートの商品化とふるさと納税返礼品化は、文化交流を実体経済へと結びつけた象徴的成果となった。音楽・ワークショップ・ビジネスを横断する取組により、万博後も継続可能な交流基盤を構築した</p>	

大阪府羽曳野市・藤井寺市・富田林市・大阪狭山市	エジプト	EXPO 内「レイガーデン」 アフリカンレストラン「PANAF」	7月23日 ナショナルデー式典に参加 11:00～12:00 「ナショナルデーホール」にて4市の市長列席 14:00～16:00 「PANAF」にて、過去に南河内4市を訪れたことがあるエジプト人等が、来店者等のギャラリーに向けて南河内4市の魅力をプレゼンテーション
		藤井寺市 羽曳野市 大阪狭山市 富田林市	9月2日～9月4日 エジプト人インフルエンサー1名が南河内4市を訪問し、観光名所などで地域住民と交流した。 同インフルエンサーによる SNS を通じて、南河内4市の魅力を国内、海外に PR した
		藤井寺市：藤井寺西小学校 富田林市：高辺台小学校、葛城中学校 大阪狭山市：西小学校 羽曳野市：植生南小学校	各市の小・中学校でエジプト料理の給食提供や授業交流 6月26日：藤井寺市立藤井寺西小学校6年生40名と交流。藤井寺市の観光施設も訪問。 7月1日：富田林市立高辺台小学校5・6年生60名と交流。 7月3日：富田林市立葛城中学校3年生80名と交流。 富田林市の両日とも浴衣着付け体験・寺内町散策。 7月7日：大阪狭山市立西小学校6年生69名と交流。狭山神社と狭山池博物館にて地域住民と観光交流。 12月4日：羽曳野市立植生南小学校2年生3クラス、6年生3クラスと交流。
		【成果】 南河内四市（羽曳野市・藤井寺市・富田林市・大阪狭山市）は、大阪・関西万博を契機にエジプトと交流を実施。学校訪問では児童の90%が海外への関心を高め、異文化理解を促進した。万博ナショナルデー参加や会場内PR、インフルエンサー招聘により地域の歴史・観光資源を国内外へ発信。4市連携による広域モデルを構築し、観光振興と国際交流を実現した。	
大阪府東大阪市	ベナン・タンザニア・コートジボワール	EXPO 内 ギャラリー「EAST」	5月16日：カラフルコミュニケーションフェスティバルを開催 ・ベナン共和国訪問体験談の講話、アフリカ楽器をつかって音楽に触れる体験等の実施 ・東大阪市立の3つの小学校による多文化共生に関する発表・交流
		東大阪市文化創造館	大阪アフリカビジネスフォーラム2025 206名が参加+オンライン参加20名 2022年から年に一度、東大阪市にて開催している【本年度で4回目】 基調講演、特別講演、パネルディスカッション、展示、ネットワーキング、BtoB・BtoG交流 主催：一般社団法人在日アフリカ人ネットワークADNJ (Africa Diaspora Network Japan) 共催：東大阪市
		EXPO EXPO アリーナ内	9月5日 Higashiosaka is Dancing with Africa を開催 EXPO2025 秋の陣 アフリカンミュージックの演奏と樟蔭高等学校・中学校（東大阪市）ダンス部のコラボステージ（8月31日合同リハーサル） 「大阪ウィーク秋の陣」として万博の公式広報媒体にて取り上げられる他、万博を契機とした市の取組みとして報道提供を実施

		東大阪市	<p>8月28日：「クリエイション・コア東大阪」にてベナンビジネスフォーラム開催 基調講演、パネルディスカッション、ネットワーキング等を実施 大阪商工会議所はベナン商工会議所と相互協力に関する覚書を締結</p>
		EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」	<p>各国のナショナルデーに参加 6月13日 市長がコートジボワールのナショナルデーの公式式典及び午餐会に参加 8月19日 市長がガンビアのナショナルデーの公式式典及び午餐会に参加 8月29日 市長がベナンの公式式典・午餐会・夜のレセプションパーティーに参列した</p>
		ベナン・コートジボワール	<p>12月19日～12月31日（峯開美氏 他2名がベナンとコートジボワールを訪問） 現地外務省や商工会議所へ本市の取組みやビジネスフォーラムについて報告。 市内企業からの依頼を受けて現地の中古デバイス販売企業の訪問、市内モノづくり事業者とのコラボレーションを目的とした現地の布の調達など、企業や教育機関との連携に繋がる具体的な調整も実施。</p>
		【成果】 東大阪市は、「モノづくりのまち」という強みを基盤に交流を展開、大阪アフリカビジネスフォーラム2025では、政府関係者や企業、支援機関が参画し、BtoB・BtoG交流やMoU締結を実現。 一方、万博会場では小学生による「カラフルコミュニケーションフェスティバル」や高校生のダンスとアフリカンミュージックの共演を実施し、次世代の多文化理解と主体性を育成。渡航視察や来日企業受入れを通じた具体的マッチングも進み、経済連携の実効性を高めた。万博を契機に形成された官民・国内外ネットワークは、会期後も継続可能な経済・教育交流の基盤となっている。	
大阪府交野市	エチオピア	交野市 星の里いわふねに滞在	<p>7月18日～27日：エチオピア芸能集団(Fendika)10名を招請 日本滞在中、万博会場および市内施設にて交流イベントを開催した。</p>
		EXPO（クラゲ館及びいのちパーク）	<p>7月20日：万博会場でサエキ囃子の子供たちとFendikaが共演1「クラゲ館」にて交野市の子供たちのバビリオン体験と文化交流演奏交野市芸能団体のサエキ囃子の子どもたち(大人も含む)を中心に、クラゲ館の展示・体験を堪能した。2 ワールドライブバンドと名付けて「いのちパーク」にてコンサートを行うFendika、サエキ囃子、KURAGE Band、鼓童の4者コラボによる、音楽パフォーマンスを無事に実施。</p>
		①交野市 星の里いわふね ②交野市立交野みらい学園	<p>音楽家たちと交野市で交流 ①7月21日市民交流イベント 国際交流コンサート 予約サイト等で計523名が事前予約。当日の実際の来場者は370名（受付時のリストバンドの配布数でカウント）。 ②7/20と同じ出演者による演奏に加え、国立民族学博物館・総合研究大学院大学教授の川瀬慈氏を迎えトークセッションも実施 7月22日：学校イベント市内小学校の児童91名が参加。Fendika</p>

		による演奏を聴いた他、一緒にダンスや質問タイムを設け交流を図った。通訳は学校の先生3名に依頼。	
	EXPO クラゲ館	10月2日：Fendikaより3名+ KURAGE Band, サエキ囃子がミニパフォーマンス ※オンラインにてFendikaリーダーのメラクとは随時連絡をとり、今後について議論継続中	
	EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」	10月3日：中島プロデューサー、KURAGE Band, サエキ囃子メンバーがエチオピアナショナルデーに参加（中島Pは昼食迎賓会にも参加） Fendikaのパフォーマンスを観劇	
	EXPO クラゲ館	10月11日：エチオピアコーヒーセレモニーワークショップをエチオピア館とのコラボにて実施	
	<p>【成果】 交野市とエチオピア（Fendika Culture Center）との交流は、郷土芸能「サエキ囃子」を軸に、音楽を通じた持続的な文化共創モデルを構築した点に大きな成果がある。万博会場「いのちパーク」での共演や、市内でのlife beatコンサート（来場者370名）、学校訪問（児童91名参加）を通じて、市民と子どもたちがエチオピアの音楽・舞踊を体感。 郷土芸能団体であるサエキ囃子が主軸となり、100年後に受け継がれる郷土芸能を目指す国際文化交流の礎を築いた。</p>		
奈良県 橿原市	ブルキナファソ	オンライン 橿原公民館	7月11日、7月28日：ナショナルデーの公演に向けた事前練習を、ブルキナファソの講師のもと行った。橿原市立金橋小学校の児童(68名:4年生～6年生) 講師（音楽指導）6名（7月28日は来日対面参加）
		橿原市内	7月29日 ブルキナファソ大使を招いての交流（BFA大使と市長の面談）
		EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」	8月4日：金橋小学校の約70名の子ども達が、ナショナルデーに、ブルキナファソ風アレンジしたオペラ合唱とダンスを会場内で披露する。 楽曲は世界的な音楽家、ブルキナファソ在住の藤家溪子氏が監修し事前練習を経て本番に望む。 現地の歌や踊りを収めた映像の上映や、ブルキナファソ出演者の橿原市の観光も行われた
		金橋小学校	9月5日：ゲストティーチャーによる万博と地元とのつながりについての講演 西垣靴下の商品と思いやりの心についての講演（奈良の地場産業、万博のユニフォームに採用と万博への参加について）
		橿原市立金橋小学校 金橋公民館	第38回 橿原・高市子ども音楽会にむけたワークショップを5回行った （11月5日、6日、7日、10日、11日、12日） ブルキナファソの伝統音楽家2名（ブルキナファソ在住の音楽家、

		藤家氏、Maboudou Sanou 氏) が金橋小学校に訪問し行う。11月12日には校内演奏回を行った
	檀原市檀原文化会館、金橋小学校	11月14日：第38回 檀原・高市子ども音楽会金橋小学校5年生がこれまで練習してきたブルキナファソの音楽(太鼓シャンベ)をステージで披露、奈良の童歌(編曲：藤家氏)、他にも様々な楽器と組み合わせて合奏を行う校内でも演奏を行う
	【成果】 檀原市とブルキナファソとの交流は、万博ナショナルデー公演への小学生参加を核に、子どもたちの内面的成長と異文化理解を深めた点に大きな成果がある。オペラ公演に向けた継続的な練習や公開リハーサルを通じて、児童はブルキナファソの音楽・踊りに主体的に関わり、万博という大舞台で成果を発表した。さらに、太鼓ワークショップや公演を重ねることで学びを多角化。体験を通じて自己肯定感や協働性、やり抜く力といった非認知能力が育まれ、国際感覚と地元への誇りを併せ持つ次世代育成の基盤を築いた	
広島県広島市	カメルーン	駐日カメルーン大使館 万博イベントに向けたカメルーン関係者と似島中生徒との交流会準備 4月17日と5月30日にカメルーン大使館を訪問。 ※7月3日のイベント開催に先立ち、広島市及び広島baumクーヘン振興協議会のスタッフが相手国と打ち合わせ
		似島中学校 7月3日：バビリオン関係者を招請(エブンデ・ベンダ・アドルフ氏、ネピバンガ・エビナ氏) ・ナショナルデーイベントに参加する似島中学校2年生12名と万博カメルーン関係者との意見交換会 ・カメルーンの国民食「ンドレ」を使った特製baumクーヘンづくりを実施した
		無印良品アルパーク店 イベントスペース 8月17日：「ンドレ」を使ったbaumクーヘンづくり&カメルーンフレンドフォトコンテストを開催 ・カメルーン出身者を招いて市民向けに文化や歴史を紹介してもらう ・子供対象に特製baumクーヘンづくり ・カメルーンのこどもたちに向けたフォトメッセージ発出
		EXPO 会場内 「デジタルウォレットパーク ミャクポ!テラス」 9月16日：中学生のバビリオン訪問と、baumクーヘンを通じた交流活動を行う。 ・カメルーンゲスト(星野ルネ氏、武内剛氏、在日カメルーン協会会員)を招聘 ・星野氏、武内氏、児童作家・巢山ひろみ氏のトークショー ・「ンドレ」を使った特製baumクーヘンの披露・baumクーヘン作り体験 ・カメルーンのこどもたちに向けたフォトメッセージ発出 ・カメルーンとの交流の経緯を記録した動画の放映 ・カメルーンフレンド・フォトコンテストシール投票、万博大屋根リングジオラマ制作ワークショップの開催

		<p>【成果】 広島市とカメルーンの交流は、「平和文化の振興」を軸に、バウムクーヘンを媒介とした市民参加型の国際交流を実施した点に大きな成果がある。似島中学校の生徒が修学旅行で万博ナショナルデーに参加し、カメルーンの国民食「ンドレ」を活用したバウムクーヘンづくりやトークイベントを主体的に運営。郷土・似島が日本におけるバウムクーヘン発祥の地であることへの誇りと、異文化協働の経験を両立させた。さらに、民間団体・大学・企業が連携する体制を形成し、平和首長会議の理念とも紐づけ展開された。</p>	
徳島県上勝町	ナイジェリア	上勝町	7月15日～16日：万博パビリオン関係者3名を招待 15日 上勝中交流+和菓子作り体験+KINOF説明 懇親 16日 いろどり・ゼロウェイストセンター視察
		EXPOレイガーデンホール	6月25日：ナイジェリアNDに副町長、教育長、町担当課長、上勝中学校長、担当教諭が万博に訪問。 ナショナルデーの公式式典に参加（午餐会及びレセプションの参加予定なし）。
		EXPOナイジェリアパビリオン	9月17日：上勝中学校の全生徒がEXPOナイジェリアパビリオンを表敬訪問し、パビリオン見学やナイジェリア国歌の斉唱を通じて親交を深めた上勝町出身者がパビリオン運営に携わる「いのちの遊び場 クラゲ館」を訪問し、中島さち子プロデューサーの講話やパビリオン見学を通じて、万博に対する理解を深めた
		EXPO関西パビリオン	10月13日：EXPO徳島DAYに参加 万博会場で町内中学生と上勝町を紹介 徳島パビリオンにて生徒が自治体ブースで相手国との交流を紹介する。 相手国関係者との交流も行う。
		駐日ナイジェリア大使館	11月18日：ナイジェリア大使館訪問 市長及び株式会社いろどり（葉っぱビジネス）の社員および自治体職員で大使館を訪問。 今後の交流について意見交換を行った
		<p>【成果】 上勝町とナイジェリアの交流は、「ゼロ・ウェイスト」を軸とする小規模自治体とアフリカ大国が対等に連携し、環境・産業・教育を横断する実践的パートナーシップを構築した点に特徴がある。万博ナショナルデーへの参列を皮切りに、代表団の上勝町訪問、万博での出展、そして大使館との協力合意へと発展。中学生が国歌斉唱やステージ発表を通じて主体的に世界へ発信し、ナイジェリアを「課題を共に解決するパートナー」として再認識した。さらに、大使館との継続協力事項を確認し、姉妹都市や子ども同士の交流も視野に入れた体制を整備。万博を一過性に終わらせない、関係性を構築した。</p>	
徳島県松茂町	ガーナ	松茂町	4月27日～29日 ガーナ関係者を松茂町に招請。松茂町のSDGs取り組みを紹介した。
		EXPO ガーナパビリオン くらげ館	10月13日：チームガーナの町民約40名（町内小学生・中学生20名含む）が万博訪問し、徳島DAYに参加（ガーナパビリオンへ訪問）した他、ガーナとの交流をアピール。

	関西パビリオン 多目的エリア	徳島パビリオン外のステージで太鼓及び人形浄瑠璃を披露。 ワークショップ、パネル展示実施	
	マツシゲート	11月2日：マツシゲート学園祭でガーナを紹介 SDGs 取り組みの基地マツシゲートにて市民向けに開催マツシゲート学園祭とは、町内の幼・小・中学生が中心となり、ワークショップや体験型のコーナーなどを楽しむイベント イベントの中で、徳島在住のガーナの方を招き、トークセッションやガーナの生地を使ったワークショップも実施	
	ガーナ訪問	11月29日～12月4日 四国大学鈴鹿先生他2名がガーナを訪問 次年度の交流実現に向け現地訪問。教育大臣への面会や、大統領出席の式典に出席などガーナとの持続的な交流を実現するためのテーマとカウンターパートを固めた。	
	【成果】 松茂町とガーナの交流は、「ごみ」「SDGs」「STEAM教育」を軸に、地域教育と国際協力を融合させた持続可能な国際交流モデルを構築した点に大きな成果がある。Woman in Tech Ghanaの来訪や万博クラゲ館でのワークショップを通じ、子どもや大学生、地域住民が企画・運営に主体的に参画。さらに現地渡航では、ガーナ教育省・GES・日本大使館等と協議し、STEAM教育連携について国家レベルでの「Full Support」を獲得するなど、政策的連携へと発展した。万博を契機に、地域発の教育モデルが国際協力へと昇華し、万博後も継続可能な制度的・人的レガシーが創出された。		
愛媛県	モザンビーク	EXPO 会場モザンビークパビリオン	7月27日：万博会場における中高生等18名とパビリオン関係者との交流 会場：モザンビークパビリオン交流内容： ・モザンビーク人スタッフと共同での同国PR業務 ・愛媛とモザンビークの交流パネル ・武器アートの展示及び交流活動発表 ・ティンビラ（モザンビーク伝統民族楽器）によるミニコンサート ・モザンビーク現地テレビ局による報道・取り組み紹介
			10月4日：万博会場での中高生等14名とパビリオン関係者との交流 7月27日に行ったティンビラ演奏を含む交流事業の評判が良く、相手国より再度の交流要請があったので、追加事業として実施する ・モザンビーク人ティンビラ演奏者であるマチュメ・ザンゴ氏及び「いのちの遊ぶ場 クラゲ館」を象徴する音楽バンドと共演 ・モザンビーク『平和の日』を題材に、来館者と参加型で共に学ぶ ・ジンバブエ副大統領とモザンビーク通信・デジタル変革大臣等を迎えた特別演奏（ティンビラによるパフォーマンス） ・モザンビークパビリオン内での多様な人々との交流
	愛媛県内	11月1日～10日：県内各地での出前ワークショップを実施（本国からの芸術家を招請）・・・① 音楽家'マチュメ・ザンゴ氏） 1名招請 ■交流内容：県内学校、祭典、大学学園祭など全14か所で行われた（音楽演奏・モザンビーク文化体験含む）が行われた 11月13日～23日：県内各地での出前ワークショップを実施（本国からの芸術家を招請）・・・② 武器アートのアーティストや画家'ケスター氏、ネリー氏） 2名招請	

		<p>■交流内容：県内学校、祭典など全10か所で交流（アルミホイルアート、画用紙に平和についての絵を描くなど）が行われた 11月24日、29日、30日：松山市で料理教室及び交流会を実施</p> <p>■交流内容：ヴェロニカ氏（県内在住）の指導のもと、モザンビークの代表的な家庭料理を調理。</p> <p>交流会： アルベルト・パウロ大使等を迎え、スピーチや質疑応答、ティンビラ演奏、ダンス、モザンビーク産のお茶の試飲等が行われた。</p>	
		<p>【成果】 愛媛県とモザンビークの交流は、万博を契機に若い世代が主体となり、音楽・アート・料理を通じた多層的な住民交流を展開した点に大きな成果がある。万博モザンビークパビリオンでは中高生等が現地スタッフと協働してPR活動を行い、交流の歴史や平和への取組を世界に発信。万博後も県内23か所・約2,200名が参加する学校・地域訪問や料理教室等を実施し、国際理解と多文化共生意識を深化させた。行政と民間、次世代が連携する持続的交流基盤を構築した。</p>	
高知県 本山町・土佐町	セーシェル	<p>セーシェル～関西空港～万博～高知～ ～北海道～羽田～セーシェル</p>	<p>8月25日～9月3日：セーシェルからの生徒10名と教員4名を招請、嶺北高校生徒が全行程同行した 8月25日関西着／26日大阪視察／27日万博訪問／28日～31日高知県滞在／31日～9月3日網走滞在／9月3日東京大学にて報告会を行った</p>
		<p>EXPO会場 セーシェルブース</p>	<p>8月27日：万博訪問 セーシェルから来日した日本語を学ぶ生徒たちと共に万博会場を訪問し、セーシェルブースの来場者にインタビュー（クイズ）するなどの運営を通じ交流を深める</p>
		<p>本山町・土佐町</p>	<p>8月28日～31日：一行を高知県に招致。観光名所への訪問や、紙漉き体験、嶺北地域本山町で町長表敬訪問、嶺北高校で歓迎イベント、汗見川で遊泳などの共同体験で交流を深める</p>
		<p>【成果】 セーシェルの中高生と県立嶺北高等学校を中心とした交流を実施し、地域の持続可能性をテーマに国際理解の促進を図った。EXPOでの協業、本山町での町長表敬訪問や、棚田や滝など嶺北の自然・暮らしに触れる体験、嶺北高校での歓迎交流、汗見川での自然体験を一体的に設計し、言語に依存しない相互交流が進展した。さらに、住民も参加する公開型交流としたことで、学校・自治体・地域が一体となった受入体制が強化され、関係人口の「見える化」や将来的な再交流、短期留学生受入れに向けた基盤形成につながる成果が得られた。</p>	
大分県 杵築市	ジンバブエ・ブルンジ	<p>EXPO ジンバブエパビリオン</p>	<p>5月8日：ジンバブエパビリオンにて坪井氏によるネリカ米の種まきを実演。</p>
		<p>EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」 ブルンジブース</p>	<p>6月15日：ブルンジ・ナショナルデーに万博会場を訪問。 杵築市内の小中学生を募集。杵築市長がナショナルデーの公式式典に参加。市長・坪井氏を午餐会に招へい。 農業研究者・坪井達史氏（杵築市出身）は、アフリカでの稲作振興（ネリカ米の普及）に多大な功績を挙げた人物。</p>
		<p>EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」 ジンバブエブース</p>	<p>7月16日：ジンバブエ・ナショナルデーへの訪問 ジンバブエ・ナショナルデーの公式式典及び相手国主催のレセプションに杵築市長など関係者が参加。 杵築市長及び坪井氏は午餐会にも招待された。</p>

		JICA の事業でつくば市に在住するジンバブエの農業研修員を万博会場に招待、杵築市の坪井氏との交流を実施。
	EXPO 会場内 コモンズ C アフリカレストラン PANAF	9月26日：ネリカ米の万博ブースでの栽培と収穫祭の実施。 収穫体験を実施。（来賓として、ジンバブエ大使、JICA、大阪府や万博関係者など約10名が参加した） 収穫したお米を万博会場内のレストランのメニュー「ネリカレー」として提供。 収穫祭では、杵築市の事業者が開発したネリカ米の加工食品商品（おかゆなど）が配布された。
	【成果】 ネリカ米の種まきから万博会場での栽培・収穫祭までを一連の取組として展開し、農業と国際協力を結び付けた実践的な交流を実現。両国のナショナルデーには市内小中学生や事業者が参加し、首脳級や大使館関係者との交流を通じて国際理解を深化させた。さらに、JICA とのつながりを深掘し、万博後の継続的な国際協力へと発展させる基盤を整備するとともに、企業版ふるさと納税を活用した財源確保を視野に入れた持続可能な推進体制を構築。子どもたちの視野拡大にとどまらず、市民・事業者を巻き込んだ人的・経済的レガシー創出につながる成果が得られた。	
宮崎県えびの市	マダガスカル	えびの市内 7月24日～7月26日：マダガスカルから学生を招待 マダガスカルから日本語を学ぶ生徒を招待。飯野高校の生徒が体験プログラム3泊4日をアテンドした。 地域教育魅力化プラットフォームの「地域みらい留学」の延長線上の取組。世界からの生徒誘致を見据える。県立飯野高校では既に日本都市部からの越境留学は受け入れている。 7月24日 市内観光および歓迎交流会 7月25日 市長表敬、市内観光、異文化交流 7月26日 市内産業見学、自然アクティビティ体験、文化交流
		EXPOEFL ステージ 7月27日 万博会場での発表会：マダガスカルから遊佐町に來訪した遊佐高校チームと万博で合流。互いの交流を発表した。
		えびの市 8月4日：西諸県地域が集まる教育委員会の会議にて報告会 西諸県郡教育委員会にて本プログラムに参加した中高生がその成果を発表した。
		えびの市 オンライン 9月19日：万博国際交流プログラムの参加者振り返り マダガスカル共和国、えびの市、遊佐町の参加者で振り返り会
		メール 万博会期後の交流 アンタナナリボ大学のラク先生と次年度に向けて最初の研修や短期留学の実現をするために、下記について意見交換をしている。 ①研修や留学が参加者の自費になった場合にマダガスカルの相場で費用感はどうか。 ②短期の場合、期間はどのくらいが理想か。 ③日本語レベルでN4～N3が理想であるので、学習意欲が高い生徒を中心に選ばれることになる。 ④えびの市で就労を希望しているハルさんの来日実現に向けた意向調査。

		<p>【成果】 えびの市とマダガスカルとの交流は、日本語教育を軸に、留学・就労を見据えた実践的な国際交流モデルを構築した点に大きな成果がある。市内中高生が主体となり歓迎交流や文化体験、事業所見学を実施し、地域資源と産業の魅力を直接発信。万博会場での発表を通じて2年間の取組を世界に示すとともに、将来的な年間オンライン交流の定例化や短期留学受入れに向けた基盤を整えた。さらに、行政・学校・地域企業が連携した受入体制を構築したことで、えびの市を「日本語を活かせる学びと就労の場」として位置づける第一歩となる成果が得られた。</p>	
鹿児島県三島村	ギニア	<p>三島村 硫黄島学園</p>	<p>5月20日～22日：万博関係者を招いての事前学習 自治体からの要請により事務局の蛭間部長が渡航。万博の意義についてプレゼンテーションを行った。 三島村硫黄島に講師にお越しいただき硫黄島学園にて事前学習公演実施。村内の他の3校もオンラインで参加。万博全般に関する基本情報について説明を受け、ギニア展示ブースの準備状況なども紹介された。</p>
		<p>EXPO ナショナルデー (レイガーデン)</p>	<p>6月10日：ナショナルデーの式典でジャンベの演奏等による相互交流を実施。 三島村村長がナショナルデーの公式式典及び午餐会に参加予定（レセプションの参加予定なし）。</p>
		<p>【成果】 三島村とギニアとの交流は、30年以上継続してきたジャンベ教育の集大成を万博会場内のギニア・ナショナルデーという国の公式舞台で披露し、「ジャンベの島」としての存在感を国内外に確立した点に大きな成果がある。児童生徒51名がギニア人奏者と共演し、首相や両国大使らの前で演奏を行ったことで、これまでの取組が相手国に正当に評価されたことを実感する機会となった。また、リハーサルや本番を通じた直接交流により、ジャンベにとどまらないギニア文化への関心が高まり、来年度の国際ジャンベフェスティバルへの参加打診にもつながるなど、万博後も継続する国際的ネットワークというレガシーを創出した。</p>	
沖縄県宜野座村	カメルーン	<p>宜野座村</p>	<p>7月25日～8月10日：バカ族の招聘 ①バカ族を招聘する。（バカ族3名、カメルーン人2名） ②カメルーン～宜野座村～万博会場～カメルーンの日程を予定。 7/25～8/10で招聘した 万博会場へ派遣するメンバー10名の生徒を選定し7月28日に対面式を行った</p>
		<p>沖縄県宜野座村ふれあい交流センター</p>	<p>体験型ワークショップ「地球たんけんたい」を実施7月27日 「アフリカの森で歌おう！」7月28日 「とどけよう！宜野座のものがたり」宜野座村の子どもたちを募集し実施した</p>
		<p>宜野座村 がらまんホール</p>	<p>8月3日：宜野座村での音楽交流 「カメルーン×宜野座村 国際音楽交流コンサート Oka Go-Ni À BELÉ—みんなで森へ行こう—」と題して、宜野座村が主催した。 会場はほぼ満席250名程度の観客が村内外から集まった</p>
		<p>EXPO内 テーマウィークスタジオ</p>	<p>8月4日：テーマウィークスタジオ「いのちを考える会 Dialogue on Life」に参画 第1部 日本社会における性別・世代・障害・文化的背景の違いに起因する課題について、参加者を交えた対話が行われた。 第2部 世界の先住民族文化に根ざした知見を共有する英語セッション</p>

		<p>ョンが展開され、メッセ氏は、バカ族における音楽・身体表現・教育の役割、文化継承や言語保存の危機について語った。</p>
	<p>万博会場(クラゲ館他)</p>	<p>8月5日：クラゲ館での共演いのちパークでの共演 万博会場(クラゲ館他)における、宜野座村の青少年(20名)と「バカ族」との共演およびワークショップを行った。 「いのちパーク」で、沖縄県宜野座村×カメルーン・バカ族×ニュージーランドのマオリとのコラボレーション公演を行った。</p>
	<p>【成果】</p>	<p>宜野座村とカメルーンの先住民族であるバカ族との交流は、音楽・身体表現を媒介に、「共創型」の国際文化交流モデルを構築した点に大きな成果がある。宜野座村でのワークショップと国際交流コンサート、万博会場内のクラゲ館での参加型公演を通じ、子どもたちは言語に依存しない身体的な対話を体験し、多様性尊重と自己肯定感を育んだ。さらに、テーマウィークでの国際対話やメディア発信により、先住民族の文化を対等な主体として位置づける新たな交流倫理を提示した。万博を契機とした一過性の交流で終わらせず、学校間交流や地域ワークショップへ展開可能な「宜野座モデル」として継承していく。</p>

第3章 個別プロジェクトの実施内容

3-1 北海道東神楽町 × ケニア

(1)背景と目標等

1)背景と目的

東神楽町は、雄大な大雪山連峰の麓に広がる上川盆地にあり、豊かな自然環境に恵まれたまちである。農業を基幹産業とし、その肥沃な大地で米、野菜などの農産物を生産している。

また、「花のまち」として環境美化、景観づくりを子どもたちや町民と進めており、ボランティアの育成支援やオープンガーデンの取り組み強化、花を活かしたイベントの開催、花のまちの新たなシンボルとして複合施設敷地内に整備したフラワーガーデンを発展させていくことなど、新しい時代の「花のまち」に向けて取り組みを進め、発信している。

人口構成は年少人口（15歳未満）の割合が約13%と全国平均と比べて高く、花と緑に囲まれたのどかな田園風景と旭川市に隣接した快適な住環境及び空港が所在することによる道内外へのアクセスに優れた立地を特色とし、安心して子どもを産み、子育てしやすいまち、そして住民の総合的な幸福度が高いまちとして知られている。

一方、生産年齢人口比率（56.7%）は全国平均（59.6%）を下回っており、将来に向けた労働の担い手不足が危惧されることから、本町の地域資源・交流資源を生かした国内における地域間交流や移住・定住、雇用対策を継続するとともに、国際化の一層の進展に対応した人づくり、地域づくりを進めるため、国際交流の推進が必要となっている。

本町では、教育の根幹として子どもたちが自分のよさや可能性を認識し、他者と協働しながら様々な困難を乗り越え自らの人生を切り拓くとともに、持続可能な社会の担い手となる「生きる力」を高める教育の推進に努めている。

万博の大屋根リングを設計した建築家の藤本壮介プロデューサーが、小・中・高校時代を過ごした東神楽町のこどもたちに、大屋根リングが東神楽町の円形の複合庁舎と同じ発想で作られたということ、そして国際交流の素晴らしさを感じてもらい、自らの可能性、そして万博や国際交流をより身近に感じてもらう機会の創出ができればと考えた。

さらには、花卉産業が発展しているケニア共和国との交流を通じ、自分たちのこれまでの取り組みをあらためて見つめなおし、今後の活動のあり方や方向性に対する視点を得るために貴重な機会として活かしていきたいことや、万博そのものに対し実際の体験を通してより深い理解を得、身近に感じていただけるような事業を実施したいと考えた。

2)目標

- ・次世代のグローバル人材育成：藤本壮介氏の活躍やケニアとの交流を通じ、子どもたちが広い視野と「生きる力」を養い、自らの可能性を世界へ広げる意欲を醸成すること。
- ・花のまちづくりの高度化と活性化：世界有数の花卉生産国であるケニアとの交流を通じ、町独自の資源（花のまちづくり・環境美化）を見つめ直し、活動の質を向上させること。
- ・国際交流による地域活性化と担い手確保：国際的な繋がりを深めることで、多様性を受け入れる地域土壌を醸成し、将来的な労働力不足や人口減少に対応できる持続可能なまちづくりを推進すること。

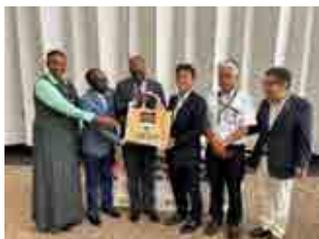
(2) 事業内容

1) ナショナルデー事業

- ① 6月22日に大阪の淀川河川敷で開催されたケニアマラソンにケニア大使館から招へいのお話をいただいた。東神楽町の中学生2名が参加し、見事第2位と第3位でゴールした。東神楽町はファンベースのマラソン大会も定着しておりマラソンという共通点で交流ができた。



- ② 6月23日ケニアビジネスフォーラムに参加した。東神楽町の特産のイチゴをはじめ特産品を持参し展示した。ケニア政府代表はじめ、ケニア大使とも交流ができた。



- ③ 6月24日ケニア・ナショナルデーに参加した。

23日24日と山本町長に参加いただき、ケニアの要人の皆さんとの交流ができた。



A：自治体内への波及効果 町の代表が国際的な舞台でケニア公式側と交流したことが報道等を通じて伝わり、町民の間に「自分たちのまちは世界とつながっている」という郷土愛と郷土への誇りが醸成された。

B：実施により達成できた成果 ケニア政府高官や万博関係者との直接的なパイプを構築し、単なる自治体独自の活動を超えた大きな枠組みにおける信頼関係を確立することができた。

C：相手国への波及効果 ケニア側に対し、日本の地方自治体が自国の文化・産業に深い敬意と関心を持っていることを示し、本町に対する親近感と、今後の協力関係に対する強い期待感を抱かせた。

2) 東神楽町招聘事業

- ① 6月29日（日）に東神楽町にて開催されましたフラワーフェスタにナショナルデーの為に来日していたケニアのフラワー産業関係者3名と大使館の方に参加いただいた。ケニアブースを出展くださり、ケニアの文化やMeru郡の紹介をしていただいた。東神楽町とMeru郡の共通点「花」が、今回の素敵な出会いのきっかけになった。



- ② 7月14日にケニアの特命全権大使モイ レモシラ大使が東神楽町を訪問いただいた。役場を訪問いただき、山本町長と意見交換を実施。また、記念植樹も行った。



- ③7月14日にモイ レモシラ大使及び大使館の書記官が東神楽小学校と東神楽中学校を訪問して下さり、こどもたちに講演していただくとともに、学校給食の時間には、給食を食べながらこどもたちとの交流をした。
- また、東神楽中学校では6月22日のケニアマラソンに参加したこどもたちと再会いただき、交流した。



A：自治体内への波及効果 学校教育現場において、国際理解教育が「教科書の中の知識」から「生きた体験」へと変質した。また、受入準備を通じて本町関係者や教職員の国際受容性が向上した。

B：実施により達成できた成果 こどもたちが大使という存在を身近に感じ、異文化に対する心理的障壁を打破できた。直接の対話を通じて、こどもたちが自分の意見を伝える発信力や、多様性を尊重する姿勢を養う機会となった。

C：相手国への波及効果 大使館関係者が地方のリアルな生活や教育現場、美しい景観（フラワーガーデン等）に触れることで、東神楽町の魅力を深く理解し、単なる外交を超えた「地域ファン」としての強固な支持を得ることができた。

3) 万博会場内交流事業

- ①夏休みを活用して東神楽町の小学生20名の万博訪問を実現し、ケニアパビリオンを訪問した。ケニアパビリオンのみなさんから歓迎を受け、ケニアについての説明を聞かせていただいた。

そこに東神楽町出身で大屋根リングを設計した藤本壮介プロデューサーが来て下さり、こどもたちに貴重な話を聞かせていただいた。



- ②その後、「多様性への思いを円に込めた」大阪・関西万博の大屋根リングを設計した藤本壮介さんが故郷・東神楽町の小学生を大屋根リングに案内してくださり、参加した小学生からは「世界が集まっていて神秘的だった」という話があった。



(3)事業の目標に対する成果

・次世代の視座の拡大と自己肯定感の向上：藤本氏との対話や大使の講演を通じ、子どもたちが「郷土との繋がり」と「世界への広がり」を同時に実感したことで、国際社会への関心が高まり、自らの可能性を信じて未来を切り拓く意欲が醸成された。

・「花のまち」としてのアイデンティティの再認識：花卉産業を共通項とするケニアとの交流を通じ、町が推進してきた「花のまちづくり」の価値をグローバルな視点から再確認し、今後の活動の方向性に対する新たな気づきと誇りを得る機会となった。

・国際交流の自分事化と地域文化の醸成：万博会場での実体験や要人との直接交流により、遠い存在であった国際交流や万博を「身近な体験」として受容し、多様性を尊重する持続可能な地域づくりに向けた土壌が築かれた。

A：自治体内への波及効果 参加した子どもたちが「町のアンバサダー」として、体験した感動を家族や友人に伝播させることで、万博の意義や国際交流の重要性が町全体へ草の根的に広がった。

B：実施により達成できた成果 藤本壮介氏の「設計思想」とケニアの「文化」を同時に体験したことで、郷土の価値と世界の広がり結びつけて理解し、将来の夢や可能性を大きく広げる「生きる力」を育むことができた。

C：相手国への波及効果 ケニアブースを日本の次世代が訪れ、熱心に学ぶ姿を現地スタッフや関係者に示すことで、ケニアの次世代教育や日本との将来的な人材交流に対するポジティブなメッセージを伝えた。

(4)大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

ケニアは世界有数のバラの産地であり、東神楽町はまちの環境美化や景観の整備を町民

が一体となつてつくりあげる「花のまち」である。

ケニアの効率的な花卉生産流通システムと、東神楽町の住民参画型（景観づくり）のノウハウを共有し続けるオンラインワークショップの開催や、町のイベントや複合施設でケニア産の花を活用したり、ケニアの野生動物や文化をイメージしたフラワーガーデンを町内に維持したりすることで、交流を継続することや万博の大屋根リングの思想（円形、多様性、繋がり）を、町の複合庁舎や学校教育の教材として定着させ、次世代のクリエイティビティを刺激し続けるといったことの契機になったものとする。

（5）子どもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本物との出会いを通じて、子どもたちは『世界は意外と近くにあり、自分たちの手で未来を形作ることができる』という確信を得ることができた。これは、彼らが将来困難に直面した際、自らの人生を切り拓くための強力な心のレガシーとなっている。

また、「自分たちが住む町の庁舎」と「世界の万博のリング」がつながっていることを知り、地方にいても世界と地続きであるという感覚を得たことで、子どもたちの郷土への誇りと自分自身の可能性を信じる力が強まったという効果もあった。

世界を代表するトップランナー（藤本氏や大使）の志に触れたことで、将来への不安が「自分も何かを成し遂げたい」「より良い社会を創る一員になりたい」という具体的な希望へと変化したと思う。

（6）特に良かった点、苦労した点

1) 良かった点

ケニア大使館及び藤本壮介プロデューサーの協力を得ることができ、また今後も交流を継続していくことを確認できたこと。

2) 苦労した点

ナショナルデーやビジネスフォーラムの内容が直近まで決まらなかったことや、フラワーフェスタへ来訪いただける方や日程が直前まで決定しなかったことなどロジスティクスの面で苦労した。

（7）今後の展開

今回の万博交流事業を通じて築かれたケニア共和国大使館との強固な信頼関係は、本町にとってかけがえのない財産となった。今後はこの絆を基盤として、教育分野のみならず、文化や産業といった幅広い領域において、持続可能な相互交流を推進して参りたい。多様な価値観に触れる機会を継続的に創出することで、国際的な広い視野を持つ人づくりと、地域の活性化を両立させた、新たな東神楽町の未来を切り拓いていきたいと考える。

(8) 今後の展開における課題

万博という大きな契機がなくなった後、いかにして交流を「特別なイベント」から「日常的な事業」へと定着させるかは課題である。担当者の異動や予算の変動に左右されず、大使館や現地機関と連絡を取り合える体制や、民間団体・学校現場主導の持続可能な推進組織の構築が求められるものとするライントールを最大限に活用したデジタル交流と直接の対面を組み合わせた、費用対効果の高い交流モデルを確立する必要がある。派遣された子どもたちや一部の関係者だけでなく、町民全体が国際交流に主体的に関わる機運を醸成し続けることが重要と考える。

万博で得た経験を一過性のものとせず、行政・教育機関・民間事業者が一体となり、中長期的に着実に歩みを進めていくことが不可欠と考える。

3-2 北海道大空町 × セーシェル

(1) 背景と目標

高知県本山町と北海道大空町は、いずれも豊かな自然環境と農林業・観光業などを基盤とする小規模自治体である。美しい山河や湖といった地勢は地域の強みである一方、少子化に伴う若年層の流出、地域産業の担い手不足、国際的な接点の不足といった課題を抱える。

またいずれの地域も多くの子どもが保育園から高校まで同じメンバー・同じクラスで過ごし、関係性の硬直化が課題であった。一度築かれた関係性は子どもにとって変え難く、多様性にも乏しいため、新たな刺激を受ける機会が著しく少なかったと言える。そのような状況を打破するために、高知県立嶺北高等学校および北海道大空高等学校は生徒の全国募集を行い、多様な生徒が集い協働性を育む教育環境を構築してきた。今回のセーシェル共和国の中高生との交流は、その延長線上にあり、越境を通して新たな関係創出の機会といえる。

本事業は、大阪・関西万博を契機に、セーシェル共和国の生徒・教育関係者と大空町/大空高校、土佐町・本山町/嶺北高校の関係者を中心とする交流を通じ、両国の生徒にとっても、国際理解の促進はもとより、地域の持続可能性にフォーカスし、相互に学び合う機会を創出することを目的に実施した。また同時に、この交流を契機として、将来の交流人口化や教育環境の多様性創出を念頭に、短期での留学生受入につなげることを目指している。



高知県嶺北地域の棚田



北海道大空町のじゃがいも畑

(2) 事業内容

1) 事業名：万博国際交流プログラム

①スケジュール

8月25日(1日目)

伊丹空港 → 関西国際空港 → 大阪市内ホテル

8月26日(2日目)

大阪市内ホテル → 住吉大社 → あべのハルクス → 心齋橋 → 大阪城 → 大阪市内ホテル

8月27日(3日目)

大阪市内ホテル → 大阪万博見学およびセーシェルパビリオンお手伝い → 大阪市内ホテル

8月28日(4日目)

大阪市内ホテル → 高知市内ホテル → 高知城 → 高知市内ホテル

8月29日(5日目)

高知市内ホテル → 龍河洞(鍾乳洞) → 桂浜 → 紙漉き体験 → 沈下橋 → 高知市内ホテル

8月30日(6日目)

高知市内ホテル → 嶺北地域本山町で町長表敬訪問 → 嶺北高校で歓迎イベント → 汗見川で遊泳 → 嶺北地域宿泊施設

8月31日(7日目)

嶺北地域宿泊施設 → 高知空港 → 羽田空港 → 女満別空港 → 大空高校交流拠点施設にて町長表敬訪問およびモルック大会 → 網走市内ホテル

9月1日(8日目)

網走市内ホテル → 大空高校で歓迎イベント → 調理実習体験 → オホーツク流水館 → 網走監獄博物館 → 網走市内ホテル

9月2日(9日目)

網走市内ホテル → 知床半島(知床五湖高架木道・自然センター・ウトロ道の駅) → 大空高校(ここで大空高校生とはお別れ) → 網走市内ホテル

9月3日(10日目)

網走市内ホテル → 女満別空港 → 羽田空港 → 東京大学にて成果発表 → 羽田空港 → 嶺北メンバーは高知へ、セーシェルメンバーは(ドバイ経由で)セーシェル共和国へ

②体制

【受入側体制】

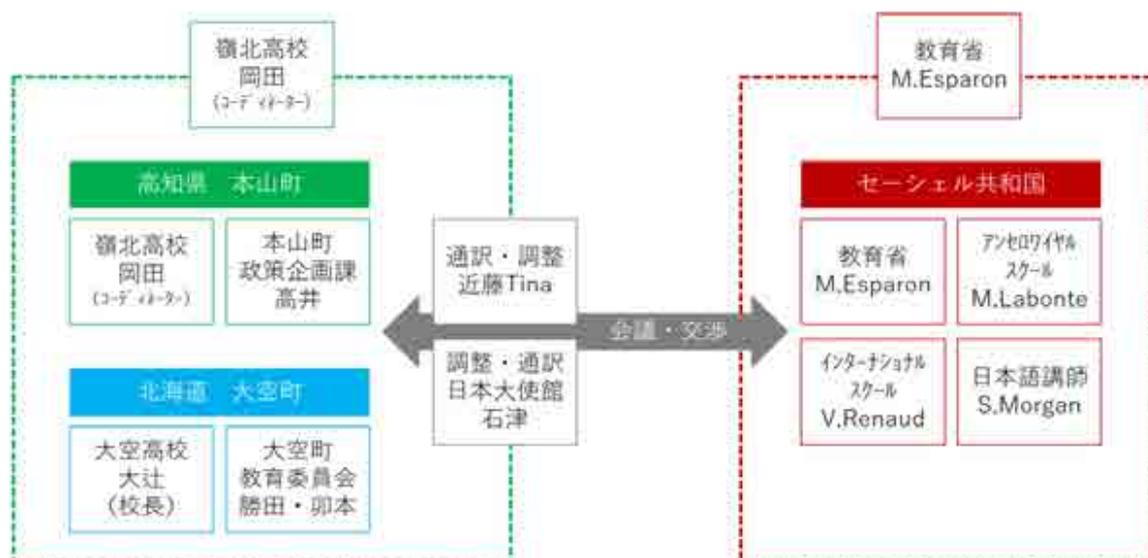
- ・大空町(教育委員会)/北海道大空高校
- ・本山町(政策企画課)/土佐町(企画推進課)/高知県立嶺北高校
- ・在セーシェル日本大使館(会議等調整および通訳)
- ・近藤多津子氏(通訳/旅程コーディネーター/相手国調整)
(・アフリカ開発協会 事務局長 長谷川 仰子 氏)

【相手国体制】

- ・セーシェル共和国 教育省(生徒派遣)/観光庁(万博会場での交流プログラム)
- ・Anse Loyal Secondary School(生徒/引率派遣)
- ・English River Secondary School(生徒派遣)
- ・International School(生徒/引率派遣)

・ Sophie Morgan 氏（現地日本語講師/生徒引率他）

・ プログラム実施前コミュニケーション体制



・ プロジェクト実施体制



③内容

大阪（都市部）視察

日時：2025年8月26日

場所：住吉大社／あべのハルカス／心齋橋／大阪城

内容：日本の都市部において歴史・文化・技術を学ぶことを主目的においている。セーシェル共和国の人たちだけでなく、高知嶺北地域の子どもにとっては「都市部文化・高層ビル」

は目新しく、北海道の子どもたちにとっては「歴史的建造物・都市部文化・高層ビル」が学びとなった。



万博パビリオン交流 (8/27)

日時：2025年8月27日 13:00-17:00

場所：大阪関西万博・夢洲会場内 Seychelles Pavilion (Commons A)

内容：入口での3問ミニクイズでセーシェルの自然・文化・言語・持続可能性に触れ、館内鑑賞を経て、出口付近での短い対話とメッセージ記入（デジタル／カード）につなぐ

「Know-Connect-Leave a Trace」の導線で実施。

通常のパビリオン運営では展示物への個別解説は想定されていなかったが、1月にセーシェルを訪問した日本側メンバーを中心に、来場者へ同国の魅力や展示物の意図を端的に紹介した。これにより来場者の理解度と満足度が向上。生徒も積極的に声をかけ、短い質疑や感想交換が随所で生まれた。



高知市内 (8/28-29)

日時：2025年8月28日

場所：高知城

内容：28日に大阪市内を出発し、高知市内に移動。歴史的建造物である高知城を見学した。高知城は日本国内に僅かに残る「現存天守」の城郭であり、8月26日に訪れた大阪城よりも歴史的文化的価値が高いと考えられる。セーシェル共和国には城という概念すらない国であることから、日本の歴史に興味を寄せる場面が多く見られた（城壁の狭間・石落としなどセーシェル共和国の歴史では生まれない建築上の構造などに興味を持っていた）。同じく北海道にも同様の建造物は少なく、大空町の子どもにとっても貴重な体験となった。



日時：2025年8月29日

場所：龍河洞／桂浜／いの町くらうど（紙漉き体験）／沈下橋

内容：セーシェル共和国には素晴らしい自然環境があるが、鍾乳洞はなくセーシェル・高知・北海道いずれの子どもたちにとっても初めての体験となった。桂浜では龍馬像を見るにあたり日本の歴史を学習し、いの町くらうどでは紙漉き体験を行った。高知県において日本の自然環境や歴史を学ぶ機会となった。



嶺北地域交流（8/30）

内容：本山町内で町長表敬、棚田・権現の滝の見学、嶺北高校での交流、汗見川での自然体験を一体的に設計。地域住民も含む公開型の交流とし、地域資源の価値を国際的視野から再発見する機会となった。宿泊は汗見川ふれあいの郷・清流館。

効果：一般住民を含む多数が高校での交流に参加し、学校・自治体・住民が一堂に会することで、関係人口の見える化と、地域において国際的な交流を継続していく布石となった。



大空町交流：町長表敬訪問・レクリエーション

日時：2025年8月31日 15:00-17:00

場所：北海道大空高等学校 交流拠点施設「ソラポート」

内容：大空高校の交流拠点施設「ソラポート」において大空町町長を表敬訪問。そののち大空高校生（交流団以外）の生徒と交流を深めるため、大空高校寮生たちとモルック大会を開催。ルールが簡単のためノンバーバルな交流が進んだ。

オホーツク地域交流①「歴史・文化」

日時：2025年9月1日 9:00-17:00

場所：北海道大空高等学校／オホーツク流水館／網走監獄博物館

内容：セーシェル共和国の方々・嶺北高校生が大空高校を訪れ、書道パフォーマンスやよさこいソーランでおもてなし。日本文化の理解が進んだ（嶺北高校生にとっては高知発祥のよさこい踊りが北海道においてどのような独自文化として発展していることを知る機会となった）。またセーシルのダンスも披露して頂き、日本の高校生も入り混じってともに踊ることで、相互の文化理解を深めた。

その後、家庭科実習室で調理実習を行い日本料理である「おにぎり・天ぷら」をつくり、皆で一緒に会食した。

高校をあとにし、オホーツク流水館では厳しい北海道の冬、網走監獄博物館では「収容されていた人々が道作りのため多くの犠牲になった」という負の歴史を学んだ。





オホーツク地域交流②「自然」

日時：2025年9月2日 10:00-17:00

場所：知床半島・大空高校

内容：セーシェル共和国の方々・嶺北高校生・大空高校で世界自然遺産である知床半島の大自然を体感した。当初、フェリーで知床半島を見て回る想定であったが、強風のため船が欠航。知床五湖の高架木道および自然センターさらに鮭の遡上を見学する行程へと変更した。セーシェルは自然あふれる島であるが、蝦夷鹿などの大型動物は少なく自国とは異なる自然に感動をしていた。日本の高校生にとっても知床半島を訪れる機会はそう多くはなく、いずれの国の中学生にとっても稀有な経験となった。その後、大空高校に戻り、翌9月3日の報告発表会のプレゼンテーションづくりに勤しんだ。

効果：北海道の雄大な自然と学校の特色ある教育を直接体験することで、再訪・再交流への意欲が高まり、翌日の都内報告会（9/3）に向けた共同制作の素材・語りの厚みが増した。



成果報告発表会

日時：2025年9月3日 14:30-15:30

場所：東京大学情報学環・福武ホール地下2階ラーニングスタジオ

内容：今までの行程で体験したこと・学んだことをプレゼンテーション形式にまとめ、東京大学情報学環にて発表を行った。テーマは

- ・セーシェル共和国の魅力
- ・大阪万博の魅力
- ・高知県（嶺北地域）の魅力

・北海道（オホーツク地域）の魅力

の4つで、それぞれセーシェル・日本の中高生混合チームで編成し資料作成および発表を行った。それにより相互理解が深まった。また聴衆者としてアフリカとの交流を行っている団体（MJP）や東京大学職員、保護者なども参加し盛況であり、緊張感をもって発表を行うことが出来た。



（3）事業の目標に対する成果

1. 相互理解の深化

- 都市文化・歴史理解

各地域の子どもたちが都市部の歴史・文化・技術を学ぶ機会となり、セーシェル参加者にとっても日本の都市の多様性を知る入口となった。

→ 異文化・異地域の背景理解を広げる効果あり。

- 万博パビリオン交流

通常展示に加え、日本側メンバーによる補足解説や質疑応答が加わり、単なる鑑賞以上に理解が深まった。

→ 「セーシェルを知る」「日本人に伝える」という双方向性が生まれ、相互理解が強化された。

- 嶺北地域交流

棚田や自然資源を通じて地域の価値を再発見し、セーシェル・日本の双方が「自国／他地域の良さ」を語り合う場となった。

→ 地域資源を国際的な視点でとらえるきっかけとなり、相互理解が生活文化・自然領域に拡張。

北海道交流

- ノンバーバルなレクリエーション（モルック）が、言語を超えた交流の効果を生んだ。

- 書道・よさこい・セーシェルダンス・調理実習といった「体験型」の文化共有は、単なる見学以上に共感的理解を形成。

- 知床での自然体験は、互いの環境的特徴を比較する中で理解が深化。
成果発表会
混合チームでの発表準備・実施を通じ、学んだことを言語化・再共有する過程が、理解をさらに定着させた。
聴衆の前で発表することで緊張感と達成感があり、互いの文化を「自分の言葉で説明できる」状態に至った。

2. 今後の交流機会の拡大

- 公開型交流（B 嶺北地域）
住民・自治体・学校を巻き込んだ設計により、関係人口の可視化や「地域ぐるみの国際交流」という継続性の基盤が形成された。
- 大空町での寮生交流
寮生など交流団以外の層とつながる機会をつくったことが、「点」ではなく「面」として交流を広げるきっかけとなった。
- 東京での発表会
MJP や大学関係者など、今後の交流支援に関わり得る第三者が聴衆として参加し、新たなネットワーク形成の可能性を高めた。

3. 総合評価

- 相互理解の深化：
各行程で「見る・聴く」だけでなく「体験・対話・共同作業」を組み込んだことで、文化・歴史・自然・生活習慣といった多層的理解が進んだ。今後の交流機会の増加：公開型設計（地域住民参加）、多様な接点（学校・自治体・大学・NPO）を通じて、継続的交流につながる土台を築いた。

→ よって、本事業は当初の目標である「相互理解を深めること」「今後の交流機会を増やすこと」に対し、高い効果を上げたと総括できる。

4. アンケート結果及びその考察

- 国際理解の促進と多様な価値観の獲得本事業の核である国際理解促進に関して、参加者全員（100%）が「国際交流の取組は価値のあるものだと思うようになった」と回答した。特に自由記述からは、「日本との文化的な違いを受け入れる力が身についた」「多様な価値観や固定概念に気付けた」といった具体的な変化が確認される。これは、異文化理解が抽象的な知識に留まらず、参加者自身の柔軟な思考力として定着したことを示している。

- 地域の持続可能性へのフォーカスと相互学習事業目標の一つであった「地域の持続可能性」に関する学びと交流についても、高い成果が得られた。参加者の自由記述には、「セーシェルの文化を教えてもらったり、SDGs やセーシェル、日本の環境問題なども考えるヒントをもらえた」という言及があり、相互学習の機会が創出されたことを裏付けている。また、セーシェル交流団との交流に対する「とても満足」(80%)という高い評価は、深い交流を通じてテーマ学習が進んだことを示している。
- 将来の交流人口化と教育環境の多様性創出への契機
本事業は、短期留学生受入や将来的な交流人口化への布石となることも目指していた。アンケート結果は、参加者の国際的な活動への意欲が大幅に向上したことを示している。
- 継続的な交流意欲：参加者全員(100%)が「今後もセーシェルの方と交流を持ちたい」と回答している。また、本事業を経ての国際交流に対するイメージや価値について身近なものに変容したことが自由記述欄よりうかがえる。よってこの交流が単発で終わらず、長期的な国際交流関係の構築(交流人口化)の契機となったことを示している。
- 進路意識への影響：国際的な仕事・取り組みに対する関心が全員(100%)で「高まった」と回答しており、「進路について『海外に行ってみたい』と思うようになった」という記述も得られた。本アンケートは、国内生徒のみの回答ではあるが、これは、事業が教育環境の多様性創出(留学への意識変化)に貢献し、次なるステップ(短期留学生受入)への布石として有効であったことを示唆している。

(4) レガシー創造への寄与

本事業については、当初より相手国の教育に対する考え方や経済状況を踏まえ交流相手国を選定し、またアフリカ開発協会事務局長の長谷川氏をはじめ、従来より相手国との関係構築に尽力されてこられた関係者並びに諸機関の協力が得られたことで、本事業を契機として持続的な交流のスキームを構築していくことが可能になったと考える。

また、今万博における相手国のテーマである「持続可能なツーリズム」は、我が国にとっても極めて重要なテーマであることは言うまでもない。バビリオンでのプログラムやその後の嶺北地域、並びに大空町での観光探究を通じては、両国の生徒が相互にツーリズムのあり方や、地域の持続可能性について考える契機となったものとする。今後両校における探究学習等を通じて、今回の経験を活かした活動や取組へとつながっていくようにしていきたい。

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

当初、両国の生徒は言語面の不安や距離感を抱えていたが、移動・学習・生活を共にする中で、言語・非言語の双方を駆使した関わりが自然と育まれた。最終日には互いに抱き合っただけを惜しむ姿が見られ、固い絆で結ばれたことが分かった。バスの中ではセーシエルの生徒が日本語で感謝を伝える挑戦もあった。

現在でも生徒間では SNS を利用して相互のやり取りが続いており、恒常的な関係性づくりに寄与したと考えられる。

万博会場での多数の来場者との対話、地域での自然体験と学校交流、そして都内での最終報告会は、生徒に英語での発話・傾聴・要約の成功体験をもたらし、観光・環境・コミュニティデザイン等への興味を広げ、「海外と地域の双方に関わる進路」への想像力を具体化した。



(6) 特に良かった点・苦労した点

1) 良かった点

1. 体験型・参加型の交流が多かった

- 見学や鑑賞だけでなく、クイズ・パフォーマンス・調理実習・ダンス・モルック大会など「一緒にやる」活動が多く、自然に会話や笑顔が生まれた。
- 言語の壁を超えた交流が実現した点は大きな成果。

2. 地域住民や多様な関係者を巻き込めた

- 嶺北地域での公開交流や、大空町での寮生との交流、さらに東京での発表会で大学を巻き込むなど、限定的な交流団だけでなく“地域ぐるみ”で国際交流が広がった。
- これにより「関係人口の見える化」や、継続的なつながりを意識できた。

3. 多様な文化・歴史・自然に触れられた

- 都市（大阪）、地域（嶺北）、自然（知床）、歴史（網走監獄）と、異なる文脈での日本を多面的に体験できた。
 - それぞれの場面でセーシェルと比較が自然に行われ、相互理解が広がった。
4. 共創型の成果発表で理解が定着
- 東京大学での報告会では、セーシェルと日本の生徒が混合チームを組み、発表を共同で作り上げた。
 - 学びを「整理・言語化・共有」する過程で、相互理解が一過性でなく持続的な記憶と経験として定着した。
5. 柔軟な対応ができた
- 知床での船が欠航した際、すぐに陸上ツアーに切り替え、結果的にサケの遡上やシカなど貴重な自然に触れる機会となった。
 - トラブルを逆に「共有体験」として価値化できたのは、交流の一体感を強めた。

2) 苦労した点

1. 教育背景や文化背景が異なった

- 事前のオンラインミーティングなどセーシェル側のドタキャンなどがあり、調整に苦労した。
- プログラムを進めるにあたって「整列する」「時間を守る」などの概念がセーシェルの中高生になく（ときにはセーシェル引率団も）集団行動をするにあたって苦労がともなった。

2. 多地点から集い、多地点を巡る

- 2 拠点の交流ではなく、セーシェル・本山町（嶺北）・大空町の 3 拠点交流であり、連携事業であったため関係者が複数の組織を横断することとなり、調整や行程の編成について苦労があった。
- 多くの参加者を伴う行程であったため、途中で体調不良者なども現れ、臨機応変に対応する必要があった。

(7) 今後の展開

当面は、数か月から半期程度の留学生受入から初めて行く方向で先方教育省関係者らと確認をした。(8)に記載の課題等、検討すべき事項は多いものの、今回の渡航を契機として、相手国生徒の日本に対する興味関心、留学に対する意欲は高まったものと考えており、早期の制度検討に努めたい。

自治体単独で事業を検討していくにはハードルが高いことは否めないが、相手国政府、在セーシェル日本大使館をはじめとする国内外関係機関との協力体制を構築し、財源確保等含めて検討していきたい。

(8) 今後の展開における課題

1. 渡航コスト

留学生の受入にあたっては、両国間の物理的距離とそれに伴う渡航費の捻出が課題となることは言うまでもない。比較的経済的にも豊かな同国を相手国として選定した背景もこの点にあるが、依然として大きな課題として捉えている。

今後関係諸機関や民間等との連携を通じて、渡航費の一部を補助する等の仕組みについても検討していく。

2. 言語の壁

今回のプログラムを通じては、全体を通してノンバーバルなコミュニケーションも含め、日常的なコミュニケーションの部分に関しては十分に対応可能なことが分かった。

一方で、留学での長期滞在、かつ学校での学習を受けるとなると、日本語能力の有無が与える影響は大きく、今後の課題である。

今回帯同いただいた Sophie Morgan 氏を中心に、先方教育省の協力のもと、渡航前に一定の日本語教育が受けられる体制も同時に整備していく必要があるものと考ええる。

3. 学校間のカリキュラム調整等

留学プログラムの実施にあたっては、相手国の教育過程や留学生に対する何らかの資格付与(Certification)の可否についても調整していく必要があるものと考ええる。

3-3 北海道浦幌町 × マリ

(1) 背景と目標等

1) 背景と目的

浦幌町は、北海道十勝総合振興局管内の東部に位置し、太平洋に面した沿岸部と内陸の丘陵・森林地帯を併せ持つ、自然環境に恵まれた自治体である。町の面積は広大で、その多くを森林が占めており、浦幌川流域を中心に農地や集落が形成されている。この地理的特性を背景に、酪農や畑作を中心とした農業、森林資源を活用した林業、沿岸部での漁業など、第一次産業が地域経済の基盤となっている。

人口構成を見ると、浦幌町では少子高齢化と人口減少が顕著に進行している。高齢者人口の割合が高まる一方で、子どもや若年層の人口は年々減少している。特に大きな要因として、町内に高校が存在しないことが挙げられる。中学校卒業後、多くの子どもたちが町外へ進学し、その後も進学や就職を機に町外で生活基盤を築くケースが多く、若年層の定着が難しい構造となっている。現在、町内の学校は小学校2校、中学校2校のみであり、子どもたちが地域との関わりを保ちながら成長していくための教育環境づくりは、自治体にとって重要な課題となっている。

こうした状況の中で、浦幌町では「うらほろスタイル」という独自の教育・まちづくりの取り組みを進めてきた。うらほろスタイルは、学校教育に加え、地域全体を学びの場と捉え、子どもたちが地域の人や自然、仕事と関わりながら、自ら考え行動する力を育むことを理念としている。高校が町内になくなった状況においても、子どもたちが地域に誇りを持ち、将来どこにいても浦幌とのつながりを持ち続けられる人材の育成を目指している。

うらほろスタイルの理念から派生した特徴的な事業の一つが、「子どもの想い実現ワークショップ」である。このワークショップは、子どもたちが自分たちの将来やまちの未来について考え、そこで生まれた想いやアイデアを、大人や行政が真剣に受け止める場として実施されている。子どもたちは、地域での学びや体験を通じて得た気づきをもとに、「こんなまちにしたい」「こんなことをやってみたい」といった想いを言葉にし、それを地域の大人と共有する。大人側はそれを一過性の意見として扱うのではなく、実現に向けて一緒に考え、支援する姿勢を大切にしてきた。

本事業では、こうした「子どもの想いを受け止める」という、うらほろスタイルの考え方を、万博という国際的な舞台で実践することで、浦幌の子どもたちが自らの将来への想いや、まちの未来に対する希望を表現する機会を創出した。

さらに、この取り組みを日本国内にとどまらず、西アフリカ・マリ共和国においても展開し、マリの子どもたちに対して、将来への想いや地域の未来について考える機会を創出し、その考えを大人へ共有することを目的とした。浦幌で培われてきた「子どもの声を中心に据えた対話の場づくり」を、文化や社会背景の異なる地域において、子どもたちが主体的に未来を考える力を育む共通の基盤とすることを目標とした。

以上を踏まえて、万博を契機とした国際交流事業を実施した目的は、単なる文化交流にとどまらず、浦幌町が抱える人口減少や子どもの町外流出といった課題に対し、教育と人材育成の観点から新たな可能性を見出すことにある。子どもたちが地域や世界とつながりながら視野を広げ、自分の将来を主体的に描く力を育むことで、将来的に地域と関わり続ける人材の育成につなげることを目指している。そして、うらほろスタイルの理念から派生した事業を国際的な文脈で実施することで、子どもの想いを尊重するまちづくりの価値をおよび地域の未来を担う人材育成に資する取り組みを国内外へ発信することを狙いとしている。

2)目標

本交流計画を実施することにより、浦幌町とマリ共和国の双方において、次世代を担う子どもたちが自らの将来や地域の未来について主体的に考え、想いを絵を通じて発信し、大人や社会と共有する機会を創出することを目標とする。これにより、子どもたちが多様な文化や価値観に触れながら視野を広げ、自身の可能性や選択肢を拡げていくことが期待される。

また、浦幌町においては、国際交流を通じて、子どもたちが地域と世界のつながりを実感し、地域への誇りや当事者意識を高めるとともに、諸外国の文化や芸術に触れることで、国際性および多様性を学び、グローバルな表現力を身につけることを目標としている。同時に、浦幌町の魅力を世界の視点から捉えて自らアクションを起こす人材になることを目指している。また、地域としては、官民協働による教育・まちづくりの取り組みである「うらほろスタイル」および「子どもの想い実現事業」の価値を国内外に発信し、広く浦幌町の価値発信に繋げることで、そして持続可能な地域づくりのモデルとして認知を高めることを目指す。

(2) 業務内容

1) マリナショナルデー子ども国際交流事業（浦幌町）

① < 1 > マリナショナルデー子ども国際交流に向けた募集

計画策定：4月（マリナショナルデー子ども国際交流事業に向けた計画策定）

募集告知：2025年5月8日(木)～13日(火)

募集説明会：2025年5月27日(火)～28日(水)

< 2 > マリナショナルデー子ども国際交流に向けた事前研修

事前研修：2025年6月23日（月）～7月28日（月）

< 3 > マリナショナルデー子ども国際交流の事後町内交流

事後研修：2025年9月8日（月）

町内演奏発表会：2025年10月25日（土）

② 体制

・ 主催：浦幌町

・ 共催：浦幌町教育委員会、うらほろスタイル推進連携会議

- ・ 主管（事務局）：一般社団法人十勝うらほろ楽舎
- ・ 協力：独立行政法人国際協力機構北海道センター（帯広）、一般社団法人 SackOmi
- ・ その他関係団体：町内小学校・中学校（浦幌小学校、浦幌中学校、上浦幌中央小学校、上浦幌中学校）

③ 内容

< 1 > マリナショナルデー子ども国際交流に向けた募集

日時

- ・ 2025年5月8日（木）～13日（火）
- ・ 2025年5月27日（月）～28日（火）

場所

- ・ 浦幌小学校、浦幌中学校、上浦幌中央小学校、上浦幌中学校
- ・ 中央公民館、上浦幌公民館

参加者

- ・ 町内小・中学校 全校児童生徒（約 250 名）
- ・ 保護者および子ども 約 35 名

取組内容

- 生徒向け説明会
 - ・ 万博会場と学校（4校）で中継をつなぎ、マリナショナルデーおよび国際交流事業の概要説明
 - ・ 「うらほろ国際交流大使」の募集趣旨の簡単な説明
- 保護者向け説明会
 - ・ 事業目的、内容、万博との連携について説明
 - ・ 子ども向けにマリ共和国の伝統打楽器「ジャンベ」の体験を実施し、文化への関心を促進

< 2 > マリナショナルデー子ども国際交流に向けた事前研修

日時

- ・ 2025年6月19日（水）
- ・ 2025年6月23日（月）、7月7日（月）、7月14日（月）、7月19日（土）、7月21日（月）、7月28日（月）
- ・ 2025年7月31日（木）

場所

- ・ 中央公民館1階 町民集会室および研修室

参加者

- ・ うらほろ国際交流大使（小学生8名、中学生5名 計13名）
- ・ サリフ・サコ氏、JICA講師1名、楽器講師1名、マリ共和国出身講師2名

取組内容

- ・ 楽器練習教室（ジャンベの練習；マリ共和国の伝統打楽器であるジャンベの基

礎練習を行い、リズムやアンサンブルを通じた表現力の向上を図った。)

- ・ 勉強会（想いの絵を描くワーク、マリ共和国について学ぶ講座；「想いの絵」を描くワークショップを実施し、自身の将来やまち、世界への想いを可視化・マリ共和国の文化・歴史・社会背景について学ぶ講座を実施）
- ・ うらほろ国際交流大使の発足式および事前研修（渡航に向け）の実施（マリナショナルデーでの発表や交流に向け、浦幌町および日本を代表する立場としての役割や心構えについて共有）



< 3 > マリナショナルデー子ども国際交流の事後町内交流 日時

- ・ 2025年9月8日（月）
- ・ 2025年10月25日（土）

場所

- ・ 中央公民館 2階研修室
- ・ 中央公民館 集会室

参加者

- ・ うらほろ国際交流大使（小学生8名、中学生5名 計13名）、引率者9名、井上町長、保護者
- ・ うらほろ国際交流大使（小学生8名、中学生5名 計13名）、町内住民約70名

取組内容

- ・ 振り返り会
マリナショナルデーを含む国際交流活動全体の振り返り、子どもたちによる活動感想文の発表および共有

- ・ 町内演奏発表会・活動報告会
- ・ ジャンベによる楽器演奏の発表、子どもたちによるショートスピーチ、サリフ・サコ氏（マリ共和国）からのコメント、モニター映像を活用した活動報告、「未来の交流の絵」の展示

④ 効果

< 1 > マリナショナルデー子ども国際交流に向けた募集

A：マリ共和国との交流活動について町内で広く周知することができ、国際交流事業への理解と関心が高まった。

万博と連動した国際交流の具体的なイメージを、子ども・保護者・教育関係者と共有する機会となった。

B：子どもたちが異文化に触れ、マリ共和国や海外への関心を持つきっかけを創出できた。

国際交流や世界との関わりについて考える第一歩となった。

保護者の理解を得ながら、継続的な国際交流事業への参加基盤を構築することができた。

C：マリ共和国との交流を前提とした事業内容を共有することで、今後の双方向交流に向けた土台づくりとなった。

< 2 > マリナショナルデー子ども国際交流に向けた事前研修

A：子どもを主体とした国際交流人材育成の取り組みとして、町内における本事業の認知と関心が高まった。

音楽や対話を通じた学びの場づくりにより、「うらほろスタイル」の実践的な教育のあり方を町内に示すことができた。

B：子どもたちが異文化に触れ、マリ共和国や海外への関心を持つきっかけを創出できた。

ジャンベの基本的な演奏技術を身につけ、子どもたちが自信をもって演奏できるようになった。

音楽を通じて仲間と気持ちを合わせる楽しさを体感し、参加した子どもたちの協調性や表現力が育まれた。

マリ共和国の文化や背景への理解が深まり、国際交流への興味・関心が高まった。万博での発表に向け、自らが浦幌町および日本を代表する存在であるという自覚を持つことができた。

C：マリ共和国との交流を前提とした事業内容を共有することで、今後の双方向交流に向けた土台づくりとなった。

マリ共和国出身の講師が実際に浦幌町を訪れ、ジャンベ指導を行うことで、相手国関係者が一方的な受け手ではなく、文化の担い手・教える立場として交流に参画する機会を創出した。

マリ共和国の伝統音楽や文化を、現地出身者自身の言葉や演奏を通して伝えるこ

とで、文化理解の質が高まり、相互尊重に基づく双方向の国際交流を実現した。

< 3 > マリナショナルデー子ども国際交流の事後町内交流

A：国際交流事業の成果を町内住民と共有することで、浦幌町内における国際交流の取り組みへの理解と関心が一層高まった。

子どもを中心とした国際交流の実践事例として、「うらほろスタイル」の価値を町内に広く発信する機会となった。

B：子どもたちが主体的に国際交流活動の成果を発表し、自らの言葉で想いを伝えることで、異文化理解と自己表現力を高める機会となった。

演奏やスピーチを通じて、これまでの学びや成長を振り返り、達成感や自信につながることができた。

C：マリ共和国出身者からのコメントやメッセージを通じ、相手国の視点を交えた形で交流の成果を共有することができた。

活動報告や展示を通じて、マリ共和国との継続的な交流の意義が地域に伝わり、今後の双方向交流の継続・発展に向けた理解促進につながった。

2) 浦幌町子ども国際交流事業

① スケジュール

- ・ 計画策定：4月
- ・ 2025年6月29日（日）
＜1＞子どもの想いを受け止める交流
- ・ 2025年7月19日（土）
＜2＞子ども音楽・文化交流

② 体制

- ・ 主催：浦幌町
- ・ 事務局：一般社団法人 SackOmi、一般社団法人十勝うらほろ楽舎
コーディネーター：うらほろスタイル推進連携会議、子どもの想い実現ワークショップ
その他関係団体：京都精華大学全学研究機構

③ 内容

< 1 > 子どもの想いを受け止める交流

日時

- ・ 2025年6月29日（日）

場所

- ・ 中央公民館

参加者

- ・ 浦幌町民（小中学生を含む）約40名
- ・ ウスビ・サコ氏、サリフ・サコ氏、（駐日マリ共和国大使館）ダコ大使

取組内容

- ・ 講演会（マリ共和国の文化や歴史、国際交流の意義、子どもの想いを受け止める活動について）
- ・ 絵のワークショップ（マリ共和国と浦幌町の未来の交流への想いを絵で表現）
- ・ ジャンベの体験

< 2 > 子ども音楽・文化交流

日時

- ・ 2025年7月19日（土）

場所

- ・ コスミックホール2階

参加者

- ・ 演奏会来場者：約50名
- ・ ワorkshop参加者（小中学生を含む）約40名取組内容

取り組み内容

- ・ 演奏会（マリ共和国の音楽パフォーマンス）
- ・ ジャンベ体験ワークショップ（参加者が実際にジャンベに触れ、基本のリズムを体験（チャリティーグッズ集め）

④効果

< 1 > 子どもの想いを受け止める交流

A：マリ共和国の文化や歴史を直接学ぶ機会を通じ、町民の異文化理解や国際交流への関心が高まった。

子どもから大人までが同じ場で参加することで、地域全体で国際交流や教育のあり方について考える機会となった。

B：講演や体験を通じて、参加者が世界とのつながりを身近に感じ、国際交流への理解を深めることができた。

絵を用いた表現活動により、子どもから大人までが将来や地域への想いを共有し、相互理解を深めることができた。

子どもたちが自らの想いを表現し、それを大人が受け止める場を創出することができた。

C：マリ共和国関係者が講師として参画し、自国の文化や価値観を直接伝えることで、相互理解に基づく対等な交流を実現した。

子どもの想いを尊重する浦幌町の取り組みを相手国関係者と共有することで、今後のマリ共和国での展開や継続的な交流に向けた共通認識の形成につながった。

< 2 > 子ども音楽・文化交流

A：音楽を通じた国際交流の場を地域に開くことで、町民の国際交流への関心と参加意欲が高まった。

子どもから高齢者までが同じ空間で音楽を楽しみ、世代を超えた交流の輪が広が

った。

B：生の演奏を間近で体験することで、マリ共和国の音楽文化の迫力や魅力を実感することができた。

ジャンベ体験を通じ、子どもから大人までが音楽を媒介とした国際交流の楽しさを体感した。

チャリティー活動を通じ、地域と世界のつながりについて主体的に考えるきっかけを創出できた。

C：マリ共和国出身の音楽家が演奏および指導を担うことで、自国文化を主体的に発信する機会となった。

音楽を通じた交流の実践により、相手国文化への理解と尊重に基づく継続的な国際交流の基盤が強化された。

3)マリナショナルデー子ども国際交流事業（大阪・関西万博）

①スケジュール

- ・ 4月：計画策定
- ・ 2025年4月～7月
 - <1>ナショナルデー子ども国際交流
- ・ 2025年8月1日（金）～4日（月）
 - <2> ナショナルデー子ども国際交流における子どもの想いを受け止める交流
- ・ 2025年8月1日（金）～4日（月）
 - <3> ナショナルデー子ども国際交流における子ども音楽・文化交流

②体制

主催：浦幌町

事務局：一般社団法人 SackOmi、一般社団法人十勝うらほろ楽舎

コーディネーター：うらほろスタイル推進連携会議、子どもの想い実現ワークショップ

その他関係団体：一般社団法人在日アフリカ人ネットワーク、浦幌町教育委員会

③内容

<1> ナショナルデー子ども国際交流

日時

- ・ 4月～7月

場所

- ・ 大阪・関西万博会場内（アフリカンダイニング PANAF' 応接室等）

参加者

- ・ 一般社団法人 SackOmi 社員および大阪・関西万博関係者

取組内容

- ・ 2025年8月2日に実施予定のマリナショナルデーの全体構成および実施方針について協議

- ・マリナショナルデーにおける浦幌町の国際交流コンテンツの導入可能性について意見交換
- ・準備スケジュールおよび役割分担の確認

< 2 > ナショナルデー子ども国際交流における子どもの想いを受け止める交流

日時

- ・2025年8月1日（金）～4日（月）

場所

- ・大阪・関西万博会場 ナショナルデーホールレイガーデン

参加者

- ・うらほろ国際交流大使（小学生8名、中学生5名 計13名）
- ・マリ共和国出身者および万博参加者
- ・うらほろ国際交流大使団引率者

取組内容

- ・浦幌町の子どもたちが描いた「マリ共和国との交流への想い」を、動画および字幕を用いて発表
- ・うらほろ国際交流大使団代表児童・生徒2名によるスピーチ発表

< 3 > ナショナルデー子ども国際交流における子ども音楽・文化交流

日時

- ・2025年8月1日（金）～4日（月）
- ・8月2日16時30分～ナショナルデーホール演奏
- ・8月3日16時～アフリカンレストラン PANAF'演奏

場所

- ・大阪・関西万博会場 ナショナルデーホールレイガーデン
- ・アフリカンレストラン PANAF'

参加者

- ・うらほろ国際交流大使（小学生8名、中学生5名 計13名）
- ・マリ共和国出身者（ナショナルデーホールマリ招待客500名）および万博参加者
- ・うらほろ国際交流大使団引率者（9名）

取組内容

- ・アフリカ音楽演奏家とともに行うジャンベ演奏
- ・マリ共和国出身者および万博参加者とのダンスを通じた交流
- ・浦幌町内で集めたチャリティーグッズの贈呈



④効果

< 1 > マリナショナルデー子ども国際交流に向けた募集

A：万博という国際的な舞台において、浦幌町の国際交流事業を実施する方向性が明確となり、子どもを軸とした交流コンテンツを万博で発信する具体像が見え、今後の事業展開への期待感が高まった。

B：2025年8月2日のマリナショナルデーを正式に実施することが確定した。
浦幌町の交流コンテンツをマリナショナルデーのプログラムに盛り込むことについて、合意形成をすることができた。

C：マリ共和国側にとっても、自治体レベルの交流をナショナルデーに組み込む新たな試みとなり、国と地域が連携した国際交流モデルの構築につながった。

< 2 > ナショナルデー子ども国際交流における子どもの想いを受け止める交流

A：万博という国際的な舞台で浦幌町の子どもたちが主体的に発信する姿を通じて、浦幌町が取り組む「子どもを中心とした国際交流」および「うらほろスタイル」の価値を対外的に示すことができた。

B：マリ共和国来賓者約500名および万博一般来場客に対し、浦幌町の子どもたちが描いた「想いの絵」を動画および字幕を用いて発信することができた。
うらほろ国際交流大使団代表児童・生徒によるスピーチや映像発表を通じて、マリ共和国との継続的な交流の歩みや、子ども主体の国際交流の取組を広く紹介する機会となった。

浦幌町の国際交流活動に対する認知度と関心を高めることができた。

C：マリ共和国来賓者に対し、浦幌町の子どもたちの想いや交流の取組を直接発信す

ることで、自治体レベルにおける教育・文化交流の具体的な実践例として共有することができた。

子どもの想いを尊重し、絵や音楽を通じて表現する浦幌町の取組は、相手国関係者からも高い関心を集め、今後の継続的かつ双方向的な国際交流の発展に向けた理解促進と関係強化につながった。

< 3 > ナショナルデー子ども国際交流における子ども音楽・文化交流

A：地域で集めたチャリティーグッズを万博の場で贈呈する取組を通じて、浦幌町全体として国際交流に関わっているという意識の共有につながり、町ぐるみでの国際交流の価値を再認識する機会となった。

B：音楽や身体表現を通じた交流により、言語や文化の違いを超えた自然なコミュニケーションが生まれ、子どもたちは国際交流の楽しさや達成感を実感することができた。

また、浦幌町で集めたチャリティーグッズを贈呈することで、子どもたち自身が地域の想いを代表して行動する経験を積むことができた。

C：マリ共和国関係者との心理的距離を縮め、今後の継続的な交流に向けた信頼関係の構築につながった。

(3) 事業の目標に対する成果

本事業では、「子どもが主体となり、自らの将来や地域の未来について考え、表現し、社会や大人と共有する国際交流の実現」を目標に掲げ、浦幌町とマリ共和国をつなぐ交流を、事前学習から万博での発表、事後の地域還元まで一貫して実施した。その結果、当初設定した目標に対して、以下のような成果が得られた。

まず、浦幌町およびマリ共和国双方において、子どもたちが自らの想いや将来像を主体的に考え、絵や音楽、言葉を通じて表現し、大人や社会と共有する機会を創出するという目標は、概ね達成されたと評価できる。浦幌町の子どもたちは、「想いの絵」やジャンベ演奏、スピーチといった多様な表現手法を通じて、自分自身の考えを可視化し、万博という国際的な舞台で発信する経験を積んだ。これにより、「自分の声が世界に届く」という実感を得るとともに、自己肯定感や表現力の向上が見られた。

また、異文化理解および国際性の涵養という観点においても、顕著な成果が得られた。事前研修から本番、事後交流に至るまで、マリ共和国の文化・歴史・社会背景を継続的に学び、マリ共和国出身者と直接交流する機会を設けたことで、子どもたちは異なる文化や価値観を「知識」としてではなく、「人との関わり」として理解することができた。音楽やダンスといった非言語的な手法を用いた交流は、言語の壁を越えた相互理解を促進し、国際交流に対する心理的なハードルを大きく下げる効果をもたらした。

浦幌町においては、国際交流を通じて子どもたちが地域と世界とのつながりを実感し、地域への誇りや当事者意識を高めるといった目標についても成果が確認された。子どもたちは、自らが「うらほろ国際交流大使」として町を代表する立場で活動することを

通じて、浦幌町の魅力や価値を改めて認識し、「地域の一員として何ができるか」を考える姿勢を育んだ。事後の町内発表会や活動報告会では、その学びや成長が地域住民と共有され、子どもを中心とした国際交流の意義が町内に広く伝わる結果となった。

さらに、地域全体への波及効果として、「うらほろスタイル」および「子どもの想い実現事業」の価値を、国内外に発信するという目標についても一定の成果を上げることができた。万博マリナショナルデーにおいて、浦幌町の子ども主体の国際交流の取組が紹介されたことで、マリ共和国関係者や万博来場者から高い評価を受け、自治体レベルの国際交流モデルとしての可能性を示すことができた。特に、マリ共和国側からは、子どもの想いを尊重する浦幌町の取組を自国でも展開したいという評価が寄せられ、双方向かつ対等な国際交流の関係性構築につながった。

以上のことから、本事業は、子どもたちの国際的な視野を広げ、将来への可能性を拡げると同時に、地域としての教育・人材育成の価値を再確認し、国内外へ発信するという当初の目標に対し、具体的かつ実践的な成果を得ることができたと総括する。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

本事業は、大阪・関西万博を単なる発表の場とするのではなく、その後を見据えた継続的な国際交流の基盤づくりを重視して実施した。

万博期間中のマリナショナルデーや関連交流を通じて、浦幌町とマリ共和国との関係性は、表敬的・象徴的な交流にとどまらず、教育・文化分野における実践的な交流へと深化した。マリ共和国からは、文化関係者や音楽家が浦幌町を訪れ、直接子どもたちにジャンベ指導を行うなど、双方向の交流が実現した。

さらに、マリナショナルデーに登壇したマリ共和国ダフェ文化大臣からは、浦幌町の「うらほろスタイル」による子ども主体の交流活動について、本国においても展開したいとの高い評価が示された。これは、浦幌町の取組が一自治体の事例を超え、国際的にも価値あるモデルとして認識されたことを示すものである。

万博後も、町内では〈JICA 基金〉を活用した多文化共生事業等の実施を予定しており、引き続き民間団体 SackOmi 等との連携を通じて、「子どもの想いを受け止める活動」を軸とした国際交流の機会創出および多文化共生への理解醸成に向けた取組を推進していく。

(5) こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本事業では、大阪・関西万博への渡航およびマリナショナルデーへの参加を軸に、約5か月にわたる継続的な事前学習・交流・発表の機会を設けた。万博という国際的な舞台を活用し、子どもたちが地域と世界のつながりを実感することで、将来への希望や可能性を広げる人材育成を目標としてきた。子どもたちは、マリ共和国の文化や歴史を学ぶとともに、ジャンベ演奏や「未来の国際交流への想いの絵」の制作を通じて、自らの考えや将来への想いを言葉や表現として形にする活動に継続的に取り組んだ。

特に、万博という世界各国の来場者が集まる国際的な場において、自分たちの表現を発信し、直接交流する経験は、「自分の声や行動が社会や世界とつながっている」という実感を子どもたちにもたらした。これは、将来に対する視野を広げると同時に、自ら考え、挑戦することへの自信を育む重要な機会となった。

人材育成の観点から見ると、本事業を通じて子どもたちは、

- 異なる文化や価値観を尊重しながら他者と関わる力
- 自分の想いを整理し、表現する力
- 仲間と協力して一つの成果を創り上げる力
- 失敗や緊張を乗り越えて挑戦する姿勢

といった、将来社会で必要とされる基礎的な資質・能力を実体験として身につけることができた。

また、事業終了後保護者からは、

「約 5 か月にわたり、子どもたちの貴重な体験を丁寧にサポートしてもらい感謝している」

「様々な経験を通して、子どもが大きく成長したことを実感した」

「万博だけでなく、地域での発表の場まで含め、多くの学びの機会があった」

「子どもたちが立派に発表する姿を見て、将来への可能性を感じた」

「この活動を通して、世界や社会に目を向けるきっかけになった」

といった声が多く寄せられた。

これらの声から、本事業が単なる国際交流体験にとどまらず、子どもたち一人ひとりが自らの成長を実感し、将来に対して前向きな希望を抱くきっかけとなったことがうかがえる。本事業は、地域と世界を結ぶ実践的な学びの場として、浦幌町が目指す次世代人材育成に寄与した。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

1) 良かった点

本事業において特に良かった点は、当初掲げた「子どもを中心とした国際交流」「地域と世界をつなぐ学びの創出」「次世代人材の育成」という目標に対し、地域全体で取り組みを進めながら、具体的な成果を得られた点である。

子どもたちは、音楽や絵といった非言語的な表現を通じて主体的に交流に関わり、言語や文化の違いを超えて相手国とつながる経験を積むことができた。これにより、自ら考え、表現し、他者と協働する力が生まれ、表現力やコミュニケーション力の向上が顕著に見られました。これは、人材育成の観点からも大きな成果であったと考えられる。

また、行政・学校・保護者・民間団体・相手国関係者が連携し、町全体で子どもたちの挑戦を支える体制を構築できたことにより、国際交流が一過性のイベントではなく、地域の日常的な学びとして共有され始めた。

このことは、地域として国際交流を受け止め、育てていく土壌が形成されたことを意味しており、自治体として目指してきた「次世代につなぐまちづくり」の方向性とも合

致する成果であったと評価している。

さらに、万博という国際的な舞台での発信を通じて、浦幌町の取り組みが相手国関係者から高い評価を受け、国際交流のモデルとしての可能性を示すことができた点も、国際交流の観点から意義深い成果である。

2)苦勞した点

一方で、万博という大規模な国際イベントと、町内での継続的な交流事業を両立させるための調整には、多くの時間と労力を要した。特に、マリ共和国ナショナルデーに関しては直前での変更や調整事項も多く、イレギュラーへの対応、子どもたちの安全管理、スケジュール調整、関係機関との連絡・調整について、慎重かつ柔軟な対応が求められた。

また、人材育成や国際交流の意義を十分に発揮するためには、国際交流に不慣れな子どもや保護者に対し、事業の目的や狙いを丁寧に説明し、安心して参加してもらうことが不可欠であった。そのため、継続的な情報共有や対話の場を設けながら、理解と信頼を積み重ねていく必要があった。

さらに、地域として国際交流を担う人材やノウハウが限られている中で、事業を安定的に運営する体制づくりも課題として浮き彫りになった。今後は、こうした経験を踏まえ、より持続可能な国際交流の仕組みを構築していく必要があると考えている。

(7) 今後の展開

○まちとしての取り組み

浦幌町では、若者・教育者をはじめ、地域住民が協働し、「次世代につなぐまちづくり」を推進している。本事業での3年間での一番の成果は、浦幌町が長年実施してきた「子どもの想いを受け止める交流活動」が海外からも称賛され、確かな価値があると確信できたこと、さらに大阪・関西万博でのリアルな体験を通じて、浦幌町の子どもたちが地域への誇りを再認識し、異文化理解を深め、コミュニケーション能力を高めるなど、一人ひとりの成長に大きく寄与したことである。今後もこの活動が国内外問わず高い評価を受け、海外展開の要望を受けるほど価値があるものとして継続・深化させていきたいと考えており、万博以降もその価値を広く発信し続ける取り組みを検討していく。

1. 地域・住民との連携の深化

本事業をきっかけにスタートした国際交流や多文化共生を地域に根付かせるため、令和7年11月より浦幌町公民館での多国籍交流事業を始めた。浦幌町在住の外国籍の方と地域住民が交流を深めるきっかけづくりとしてゲームやワークショップを実施したほか、12月には合同での料理教室も実施した。こうした交流を通して子どものみならず住民同士が学び合い、様々なワークショップを通じて理解と支援を広げ、多文化共生および異文化理解を推進する土壌を育てていく。

2. 町内での成果発信とモデル事例の共有

万博での展示・発表を基に浦幌町内でも子どもたちの活躍や異文化交流の様子を共有

する。大阪・関西万博マリナショナルデーでの発表の様子やその前後の交流の様子をまとめた動画を作成し、町内の文化祭での発表や小学校での動画の放映などを実施している。今後は公民館など住民の方がよく訪れる場所での動画の放映も予定している。これにより、住民の方にも国際交流の取り組みの重要性を認知してもらい、浦幌町が今後国際社会とどのように関わっていくのか考えてもらう契機として活用していく。

○民間と連携した取り組み

浦幌町としての取り組みの他、本事業から新たに立ち上がった民間団体 SackOmi 等との連携を通じて、以下の実施を検討していく。

1. 「子どもの想いを受け止める交流活動」の継続した価値発信

本事業から新たに立ち上がった民間団体 SackOmi 及び国連・JICA 等が連携して「一億人の子ども未来絵プロジェクト」が立ち上がった。この活動は「子どもの想いを受け止める活動」を前提としており、プロジェクトの発展は、浦幌町の価値向上にも寄与することから、期待を寄せているところである。今後はうらほろスタイル事業に起因する様々な活動との連携を図り、浦幌町の発信を行っていく。

2. 「子どもの想いを受け止める交流活動」の他地域/海外からの視察等の受入

浦幌町が官民とで連携協働しながら進めている「子どもの想いを受け止める交流活動」には、年間を通じて国内の他地域の視察等を多く受けている。また、マリ共和国からの JICA「地方行政能力向上プロジェクト」などの海外からの訪問も現在は受け入れている中で、浦幌の価値向上につながることを踏まえ、今後も他地域・海外からの受け入れを関係する民間団体とも協議しながら検討していく。

(8) 今後の展開における課題

長期的な国際交流事業を継続するためには、人的・財政的な体制の安定が不可欠である。特に、子どもたちの安全管理や学習支援、保護者との丁寧な連携を維持するためには、自治体・学校・民間団体それぞれの役割分担をより明確にし、無理のない運営体制を構築する必要がある。

また、国際交流に参加できる子どもと、そうでない子どもとの間で経験の差が生じないよう、町内全体へ成果を還元する仕組みづくりも課題である。発表会や動画共有等への展開を通じて、より多くの子どもたちが国際交流の学びに触れられる環境整備が求められる。

さらに、相手国との交流を一過性に終わらせず、継続的な関係性として発展させていくためには、交流内容の深化や、次の世代へとつなぐ仕組みづくりが重要である。官民連携を強化しながら、浦幌町ならではの交流モデルを磨き上げていくことが今後の課題であると考えられる。

加えて、今後、国際交流の機会が増え、多文化共生社会が進展し、町の中で海外にルーツを持つ人々が増えていくことが想定される中においては、大人の視点だけでなく、子どもたちの想いや声を丁寧に受け止める姿勢が、これまで以上に重要になる。本事業で得られた、子どもの表現や意見を尊重し、対話を通じて共有する手法は、今後の

国際交流施策のみならず、まちづくり全体を進めていく上での有効な示唆となるものであり、こうした視点を活かしながら、誰もが安心して関われる地域づくりを進めていきたいと考える。

【参考資料】

<https://38.gigafile.nu/0405-f91343d1fc7db14f87d373048f50659d>

3-4 宮城県利府町 × ガーナ

(1) 背景と目標等

1) 背景と目的

利府町は宮城県のほぼ中央に位置し、人口約3.6万人の小規模自治体である。仙台市に隣接し、3つの駅と高速道路のインターチェンジが4ヵ所あり交通網が充実している。また、仙台市のベッドタウンとして町中心部は住宅地や大型商業施設、医療機関、県総合運動公園など住環境が充実している。さらに、町の東部は日本三景の海が広がっており緑豊かな自然と調和した住みやすい街として「住みやすい街ランキング東北地方第2位(2025年大東建託調査)」と高く評価されている。しかしながら、仙台市との近接性は利便性をもたらす一方、商業・文化面での仙台依存を生み、独自の地域アイデンティティ確立が困難という側面があり、人口減少社会における地域活力の維持、若者の流出防止、地域資源の活用が喫緊の課題となっている。このような中、大阪・関西万博を契機とした国際交流を本町が推進する背景には、複合的な次の三つの戦略がある。

第一に、グローバル人材の育成です。若年層に国際理解を醸成し、多様性を受容する土壌を作ることで、将来的な地域イノベーションの担い手を育てる。

第二に、地域ブランドの確立です。持続可能なまちづくりの経験を発信し、「国際的視野を持つ先進自治体」としての地域ブランディングを図る。

第三に、住民のシビックプライドの醸成です。国際交流活動への参加を通じて、子ども達自らが地域を見つめ直し、誇りと愛着を深める機会を創出する。

万博という世界的イベントは、小規模自治体が国際社会との接点を持つ絶好の機会であり、利府町にとって持続可能な地域社会を構築するための重要な転換点となる取組みと捉えている。

2) 目標

I 国際交流への意識向上

異文化交流を通じて、国際交流に対する地域理解や異文化に対する理解を深める

II シビックプライドの醸成

相手国の歴史・文化・産業・教育を学ぶことで異文化に対する視野を広げるとともに自分の町の歴史・文化・産業・教育を調べ、改めて自分が暮らす町を知り、また、誇りを持つことでシビックプライドを醸成する

III 子ども達への国際理解教育

若年層の国際感覚を醸成し、多様性を受容する土壌を作る

(2) 事業内容

1) ガーナ共和国受入れ交流事業

①スケジュール

・交流事業の計画策定及び経過

当初令和7年度のプログラムは①万博開催期間中に交流国であるガーナ共和国パビリオンにおいて子ども達とともに、相互交流を行う予定であった。また、②万博開催期間中に万博関係者を招き交流イベントの開催及び10月には③現地学校（高校）と本町学校とのオンライン交流を実施することとしていた。このことから、3月には駐日ガーナ大使館へ直接訪問し協議を行いながら、ガーナ本国のEXPO担当者とも度重なる協議を重ねてきたが、①万博会場での交流は日程調整やガーナ側の受入れ体制が整わないこと及び交流場所の確保が困難なことから交流が不可能となった。しかしながら、その後も交渉を継続し調整を進めてきたところ、新たに7月28日～30日に利府町での交流実施で合意した。交流には、ガーナ共和国の要職者12名と高校生10名の計22名の交流団が来町することとなった。なお、高校生も来町することから、オンライン交流ではなく、直接交流に変更したものである。

②実施体制

利府町側の体制

団体名	
利府町企画部・教育部	利府町議会
宮城県立利府高等学校	利府町国際交流協会
伊達印西派弓術研究会	利府町行政区長会
利府町産業振興協議会	利府町観光協会
宮城県スポーツ協会	利府太鼓
宮城アフリカ協会	柴田三兄妹三味線

ガーナ共和国

団体名
駐日ガーナ大使館
ガーナ共和国教育省
ガーナ共和国教育EXPO国家委員会

③内容

日 時：令和7年7月28日（月）～同年7月30日（水）

場 所：利府町役場、利府高等学校、宮城スタジアム、町内企業

参加人数：150人

内 容：

ガーナ共和国の教育関係交流団22名（大人12名、高校生10名）を本町に招き、日本の伝統文化である弓道や甲冑体験、三味線・和太鼓の披露やワールドカップ・東京2020オリンピック会場となった宮城スタジアムの視察、町内企業の産業（木工加工）視察を行った。また、県立利府高等学校ではお互いの教育・文化について英語による意見交換を行うとともに、日本の部活動である剣道・弓道を体験するなど、高校生同志が触れ合いを通じて、国際交流を身近に体験した。さらに、本町の図書館の視察、小学校IT教育授業の体験などを実施した。

報道対応：河北新報社

効 果：

A 自治体への波及効果

今回の交流を通じて、各種団体の協力を得ながら歴史・文化・産業交流を実施したことにより、地域における国際交流活動への理解や異文化への興味など住民の視野を広げることができた。

B 実施により達成できた成果

本町の目的でもあった若年層への国際理解については、同世代で両国の歴史や文化、教育プログラムについて英語でのディカッションや部活動（弓道・剣道）を通じたコミュニケーションを行うなど、多文化共生や異文化に対する理解を深めることはもちろん、英語でのコミュニケーションに大きな自信を持つことが出来た。また、子ども達自らが地域の歴史・文化・教育などを調べることで、地域への誇りと愛着を深める機会を創出することが出来た。

C 相手国への波及効果

将来を担うガーナの高校生たちに日本文化や本町の魅力、IT教育プログラムや部活動の取り組みなどガーナ側にとっても貴重な体験となった。また、ガーナ代表団からは、この交流を通じてガーナの教育カリキュラムの検討や本町の生徒たち行動、人格、規律性そして敬意を払う姿勢に感銘を受けたとの言葉をいただいた。





II 万博国際交流プログラムPR事業

①スケジュール

交流事業の計画策定及び経過

地域における国際交流活動への理解や異文化への興味など住民の視野を広げることがを目的に町が実施するイベントに万博国際交流プログラム事業PRブースを設け、ガーナクイズや写真、衣装・太鼓などを展示した。また、学校給食（小学校6校、中学校3校）においてガーナ料理を提供し、食文化を通じた国際理解教育を実施した。

②実施体制

利府町側の体制

団体名	
利府町企画部・教育部	利府町国際交流協会
宮城アフリカ協会	利府町 ALLRIFU 産業祭実行委員会
利府町文化交流施設指定管理者	

ガーナ共和国

団体名
駐日ガーナ大使館

③内容

事業：リフノス（文化交流施設）春フェスタ
 日時：令和7年4月29日（火・祝）
 場所：利府町文化交流施設「リフノス」
 参加人数：800人

事業：ALL RIFU 産業祭
 日時：令和7年9月28日（日）
 場所：利府町役場
 参加人数：2,500人

事業：学校給食ガーナ料理提供
 日時：令和7年9月2日（火）、9月16日（火）
 場所：中学校3校、小学校6校
 参加人数：3,180人

事業：地域懇談会（5回開催）※万博事後事業
 日時：令和7年10月20日～11月17日
 場所：町内集会所等
 参加人数：200人

内容：

地域における国際交流活動への理解や異文化への興味など住民の視野を広げることが目的に、町が主催するイベントに万博国際交流プログラム事業PRブースを設け、ガーナクイズや写真、衣装・太鼓などを展示し多くの方に来場いただいた。また、学校給食（小学校6校、中学校3校）においてガーナ料理を提供し、食文化を通じた国際理解教育を実施した。

また、万博事後事業では町の施策を説明する地域懇談会（町内全地区対象）では、国際交流の取り組みについて紹介するなど、地域理解を深めた。



報道対応：河北新報社、東北放送、ミヤギテレビ

効果：

A 自治体への波及効果

今回のPRを通じて、本町が取り組む国際交流活動への理解や異文化への興味など住民の関心や視野を広げるきっかけとなった。

B 実施により達成できた成果

本町の目的でもあった地域の国際理解については、万博開催時期でもあったことからPR効果も大きく、高齢者から子どもまで興味・関心を持つきっかけとなった。また、学校給食におけるガーナ料理提供は食文化の違いやガーナ共和国への関心、異文化への興味など食を通じた国際理解教育の一つとなった。

C 相手国への波及効果

20年ぶりに日本で開催される万博への関心や認知度を向上させるとともに、本町とガーナ共和国の交流実施への理解度が向上した。

(3) 事業の目標に対する成果

今回の各事業を通じて、町の国際交流の取り組みを発信することにより、多様性を受容する土壌を作り、町民が異文化交流を通じて、相手国の歴史・文化・産業・教育を学ぶことで異文化に対する視野を広げるとともに、子ども達が自分の町の歴史・文化・産業・教育を調べ、改めて自分が暮らす町に誇りを持つシビックプライドを醸成することが出来た。また、子ども達が英語でのコミュニケーションを行うなど、多文化共生や異文化に対する国際理解を深めるきっかけとなり、目標に対する成果は大きいものであった。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

国際博覧会という世界規模の事業を活用した国際交流事業は国際社会との接点を持つ絶好の機会であり、知見の少ない本町でも非常に良い経験となった。今回の取り組みは地域の国際交流事業への理解や多様性を受容するスタートとなった。また、子ども達は相互の文化や産業、教育を理解するとともに、国際社会への関心が高まった。これを契機に本町の国際交流を継続することで持続可能な地域社会を構築し、「国際的視野を持つ先進自治体」となるよう努力していく。

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

同世代との交流においては、相手国の歴史・文化・産業・教育を学ぶことで異文化に対する視野を広げるとともに、自分の町の歴史・文化・産業・教育を調べ、改めて自分が暮らす町に誇りを持つシビックプライドを醸成することが出来た。また、子ども達が英語でのコミュニケーションを行うなど、多文化共生や異文化に対する国際理解を深めるきっかけとなった。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

1) 良かった点

万博国際交流プログラムを通じて、地域の国際交流事業への理解や多様性を受容するスタートになった。また、子ども達は相互の文化や産業、教育を理解するとともに、国際社会への関心が高まった。

2) 苦勞した点

国対町での調整のため、当初計画していたものが直前に大きく変更となり調整・準備にかかる時間が無かった。また、相手国の担当者の変更や大使館担当者との情報が共有されていないなど、調整に大変苦勞した。さらに、当日まで人数の変更や行程の変更などによる計画の変更もあり、国際交流の難しさを感じた。

(7) 今後の展開

今回の取り組みは地域の国際交流事業への理解や多様性を受容するスタートになったことから、今後も交流相手国とのオンライン交流や JICA で活動した海外協力隊員（ガーナ体験）の講話などを実施し、本町の国際交流を継続しながら持続可能な地域社会を構築し、「国際的視野を持つ先進自治体」となるよう目指していきたい。

(8) 今後の展開における課題

大きな課題としては交流相手国との直接交流によって得られる経験は大変貴重であり大きいものであるが、小規模自治体では財源に限りがあることなどによりこうした活動を十分に行えない。また、交流相手国もアフリカ地域ということもあり、費用面でのサポートが重要になるため、国の支援が必要である。

さらに、交流相手国のキーマンとなる担当者との調整が行えるかが重要であり、そのキーマンとの調整役である本町コーディネーターが課題である。

3-5 秋田県にかほ市 × リベリア共和国

(1) 背景と目標等

1) 背景と目的

にかほ市の総人口は令和7年3月31日現在で21,593人となり、3町が合併して当市が誕生した20年前（平成17年度）の28,972人と比較すると約7割に減少し、人口減少が進行している状況にある。年齢構成を見ると、65歳以上の高齢者が40.7%を占め、15～64歳の生産年齢人口は51.1%、0～14歳の年少人口は8.2%であり、少子高齢化が顕著に進展している地域である。このような状況の中でも、当市は「夢あるまち 豊かなまち 元気なまち 住みたいまち にかほ」を基本理念に掲げ、各分野において多様な施策を展開してきた。学校教育及び生涯学習においては、「ふるさとに学び、ふるさとかかわる教育の推進」を基本理念とし、地域とのつながりを重視しながら、多様な学習機会の提供に努めている。

当市唯一の高等学校である秋田県立仁賀保高等学校は、平成30年度には274人の生徒が在籍していたが、令和7年度には106人に減少しており、存続に向けた取組が喫緊の課題となっている。こうした状況を踏まえ、当市は平成30年度に「活力ある地域社会の形成と発展、人材育成への寄与」を目的として仁賀保高等学校と連携協定を締結した。地域連携事業の一つとして、東京2020大会におけるリベリア共和国のホストタウン事業を連携してきたところである。令和7年度は大阪・関西万博におけるリベリア共和国ナショナルデー交流事業を通じて、生徒及び市民の学びを深めていきたい。

また、当市では小・中・高校生が万博やスポーツを通じて国際交流や国際理解を促進することを目的に、万博国際交流プログラムを活用し、リベリア共和国とのスポーツ文化交流を実施する。

2) 目標

- ・万博リベリア・ナショナルデー参加による国際交流と国際理解促進。
- ・世界陸上リベリア選手団関係者招へいによるスポーツ国際交流と競技スポーツ・生涯スポーツの推進。
- ・柔道指導によるスポーツ国際貢献およびスポーツ国際交流。

(2) 事業内容

1) 事業名 万博リベリア・ナショナルデー交流

①スケジュール

3月18日 駐日リベリア大使館担当者と協議開始

4月3日 駐日リベリア大使館担当者と当市の交流内容オンライン協議

4月22日 リベリア万博担当者及び駐日リベリア大使館と当市の交流内容協議

- 8月25日 大阪到着、リベリア関係者と打合せ
- 8月26日 リベリア・ナショナルデー交流
- 8月27日 大阪出発
- 10月17日 仁賀保高校祭校内向けに成果発表
- 10月18日 仁賀保高校祭一般公開での成果発表
- 10月28日 オンライン柔道交流にて小中学生向けに成果発表
- 11月1日～11月3日 にかほ市民文化祭会場にて成果発表の動画上映

②体制

団体名	役割
秋田県立仁賀保高等学校	リベリア共和国×にかほ市交流スピーチ リベリアブースでの調査とレポート作成
J☆keylits 兼 酒田南高等学校ダンス部員	リベリア共和国ダンサーとコラボによる ダンスステージ及びパレード
株式会社 Rond	調整・手配等事業委託業者
にかほ市商工観光部スポーツ振興課	統括

③内容

日時 令和7年8月26日

場所 大阪関西万博会場内

取組内容

- ・リベリア共和国×にかほ市交流スピーチ
- ・リベリアブースでの調査とレポート作成
- ・リベリア共和国ダンサーとコラボによるダンスステージ及びパレード

参加者

高校生	8人
一般（教員、指導者）	3人
相手国交流者	15人
運営（通訳、委託業者、市職員）	5人
計	31人





報道対応等

にかほ市ホームページ URL

https://www.city.nikaho.akita.jp/gyosei/kanko_bunka_sports/sports/sportstaikai_event/4687.html

にかほ市広報 URL

<https://www.city.nikaho.akita.jp/material/files/group/8/2025-10-01-2829.pdf>

④効果

A：自治体内への波及効果

仁賀保高校祭での成果発表やにかほ市民文化祭における成果発表動画の上映を通じて、市民に交流の様子を伝えるとともに、リベリア共和国を紹介することができた。さらに、オンライン柔道交流に先立つ学習活動として小・中学生に対しリベリア共和国の概要を発表し、理解を深めてもらうことができた。

B：実施により達成できた成果

- ・リベリア×にかほ市高校生のコラボレーションによるパレード及びダンスステージを通じた国際交流を実現できた。
- ・仁賀保高等学校生徒のスピーチ及びレポート作成により相手国の理解促進に繋がった。

C：相手国への波及効果

リベリア共和国の交流自治体となった大阪府八尾市とともに、大阪関西万博リベリアナショナルデーにおいて人と人がふれ合う交流を行い、さらにステージを盛り上げることができた。

2) 事業名 世界陸上リベリア選手団関係者招へい

①スケジュール

- 3月19日 東京2020大会リベリア陸上競技選手団担当者と協議開始
- 9月5日 リベリア陸上競技関係者とオンライン協議
- 9月18日 リベリア陸上競技関係者秋田到着
スポーツ少年団交流、打ち合わせ

9月19日 象潟小学校交流、院内小学校交流、教育長表敬訪問

9月20日 陸上競技教室、スポーツ関係者ディスカッション、市内案内

②体制

団体名	役割
平沢バレーボールスポーツ少年団	団員統率
ニカホ Win-sFC スポーツ少年団	団員統率
象潟小学校	授業進行
院内小学校	授業進行
由利本荘市にかほ市陸上競技協会	陸上競技教室運営
株式会社ロンド	調整・手配等事業委託業者
にかほ市商工観光部スポーツ振興課	統括

③内容

日 時 9月18日

場 所 にかほ市立平沢小学校

取組内容 スポーツ少年団交流

参加者

平沢バレーボールスポーツ少年団指導者・団員	20人
相手国交流者	2人
運営（通訳、委託業者、市職員）	5人
計	27人

日 時 9月18日

場 所 にかほ市小出グラウンド

取組内容 スポーツ少年団交流

参加者

ニカホ Win-sFC スポーツ少年団指導者・団員	20人
相手国交流者	2人
運営（通訳、委託業者、市職員）	5人
計	27人

日 時 9月19日

場 所 にかほ市立象潟小学校

取組内容 児童交流（4・5年生体育授業、5年生給食、全校昼休み自由遊び）

参加者 象潟小学校4・5年生及び全校児童

象潟小学校児童・教諭	121人
相手国交流者	2人

運営（通訳、委託業者、市職員）	5人
計	128人

日 時 9月19日

場 所 にかほ市立院内小学校

取組内容 児童交流（1・2年生及び3・4・6年生体育授業）

参加者 院内小学校1・2・3・4・6年生児童

院内小学校児童・教諭	83人
相手国交流者	2人
運営（通訳、委託業者、市職員）	5人
計	90人

日 時 9月20日

場 所 由利本荘市総合運動公園陸上競技場（水林陸上競技場）

取組内容 本荘由利陸上競技協会の協力による陸上競技教室

参加者

ジュニア陸上クラブ水林アスリート（小中学生）	50人
秋田令和高等学校陸上競技部	20人
本荘由利陸上競技協会員	3人
相手国交流者	3人
運営（通訳、市職員）	8人
計	84人

日 時 9月20日

場 所 にかほ市多目的屋内運動場

取組内容 にかほ市スポーツ関係者ディスカッション

参加者

にかほ市スポーツ関係者	8人
相手国交流者	3人
運営（通訳、委託業者、市職員）	7人
計	18人



報道対応等

秋田朝日放送 当日の地方ニュースで放映



にかほ市ホームページ URL

https://www.city.nikaho.akita.jp/gyosei/kanko_bunka_sports/sports/sportstaikai_event/4687.html

④効果

A：自治体内への波及効果 B：実施により達成できた成果

世界陸上リベリア選手団関係者やオリンピックを招き、地域で陸上競技に取り組む小・中・高校生が一堂に会し、直接指導を受ける機会を設けた。子どもたちは世界トップレベルの指導者やアスリートの言葉に真剣に耳を傾け、目を輝かせながら学び、大きな刺激を受けていた。

さらに、市内の小学校では、オリンピックと共にかけっこや鬼ごっこを行い、「走る」楽しさを児童が体験した。「走る」という誰もがいつでもどこでも生涯にわたり取り組めるスポーツを通じて、言葉を超えた交流が生まれ、スポーツという共通の言語によって心が通い合う喜びを分かち合うことができた。

これらの取組を通じて、スポーツを介した国際交流を実現し、競技スポーツ・生涯スポーツ双方の推進に大きく寄与する成果を上げることができた。

C：相手国への波及効果

速く「走る」ための指導や、一緒に「走る」楽しみを共有することで、スポーツが人と人をつなぐ架け橋になることを実感し、青少年のスポーツ交流について意見を交わすことができた。

また、当市のスポーツ関係者とのディスカッションにおいて、リベリア共和国の指導者が「魚を与えるのではなく、釣り方を教えよ」という格言を引用し、子どもたちの自立と挑戦を支える教育を互いに継続していくことを確認した。

3) 事業名 オンライン柔道交流

①スケジュール

9月18日 リベリア柔道連盟会長と協議開始

10月28日 オンライン柔道交流

②体制

団体名	役割
にかほ市柔道連盟	オンライン柔道指導
にかほ市立金浦中学校柔道部	オンライン柔道交流参加
金浦柔道スポーツ少年団	オンライン柔道交流参加
秋田県立仁賀保高等学校	万博交流を通したリベリア共和国の紹介
株式会社 Rond	全体進行等事業委託業者
にかほ市商工観光部スポーツ振興課	統括

③内容

日 時 10月28日
場 所 にかほ市立金浦中学校
取組内容 柔道指導と交流
参加者

にかほ市柔道連盟	9人
にかほ市立金浦中学校柔道部	5人
金浦柔道スポーツ少年団	7人
秋田県立仁賀保高等学校万博交流参加生徒・教諭	6人
通訳	1人
株式会社 Rond	2人
にかほ市商工観光部スポーツ振興課	2人
リベリア柔道連盟	5人
計	37人

報道対応等

にかほ市ホームページ URL

https://www.city.nikaho.akita.jp/gyosei/kanko_bunka_sports/sports/sportstaiikai_event/4687.html

④効果

A：自治体内への波及効果

交流に先立ち、万博交流に参加した仁賀保高校の生徒たちが、リベリア共和国について発表した。遠く離れた国のことを学び、交流の相手国を理解し、心の距離を少し近づけることができた。

B：実施により達成できた成果

本市の中学生や小学生がモデルとなり、柔道の基本・導入・指導方法を指導者が言

葉で伝え、リベリア共和国柔道関係者との間で質問と回答を繰り返すことで理解を深めることができた。

画面越しではあるものの、心を込めて「礼」を交わす瞬間には、まるで同じ道場にいるかのような温かさが感じられた。さらに、中学生はリベリア共和国柔道関係者とのトーク交流を通じ、十分な環境が整わない中でも柔道の普及に尽力する姿勢に触れ、大きな感銘を受けていた。

この取り組みにより、目標としていた柔道指導を通じたスポーツ国際貢献およびスポーツ国際交流を実現することができた。

C：相手国への波及効果

リベリア共和国では畳がなく、固い床の上で練習を行っており、柔道の環境は十分に整っているとは言えない。しかし、昨年、にかほ市柔道連盟から寄贈された柔道着を有効に活用している。今回のオンライン交流においては、柔道の基本である「礼」に立ち返ったこと、導入段階で「遊び」を取り入れる指導方法があること、さらに「背負い投げ」の技術を学んだことが報告された。これらの学びを今後の普及活動に活かしていくとのコメントが寄せられた。



(3) 事業の目標に対する成果

(2) に記載のとおり、各事業において目標に沿った成果を得ることができた。全体的に見ても、アンケート結果から明らかなように、参加者のうち「非常に良かった」または「良かった」と回答した人は97.8%に達し、イベント内容について「とても満足」または「やや満足」と回答した人は96.7%に上った。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

アンケート結果によれば、イベント参加を通じて2025大阪・関西万博への関心が「非常に高まった」「高まった」と回答した人は78.8%に達し、万博会期後も相手国との交流や関わりを「持ちたい」「できれば持ちたい」「持ってもよい」と回答した人は90.1%に上った。

また、大阪・関西万博リベリア・ナショナルデーに参加した仁賀保高等学校の生徒によるレポート作成は、相手国への理解促進に大きく寄与した。完成したレポートは、
【資料】のとおりであり、市ホームページでも紹介している。

https://www.city.nikaho.akita.jp/gyosei/kanko_bunka_sports/sports/sportstaikai_event/4687.html

(5) こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

今回の事業では、アンケートを回答した参加者 277 人のうち 251 人が小・中・高校生であった。アンケート結果によると、イベントを通じて国際交流の取り組みを「とても価値がある」「やや価値がある」と感じた人は 88.6%に達した。また、国際的な仕事や活動への関心が「非常に高まった」「高まった」と回答した人は 81.6%となり、参加を通じて、国際的な活動への関心や視野を広げる一助となったと考えられる。

さらに、「今後参加したい国際交流のイベント」については以下のような意見が寄せられた。

(6) 特に良かった点、苦労した点

1) 良かった点

今回の国際交流事業において、特に意義深かった点は、大阪・関西万博を通じたスポーツ（ダンス）交流の実施や世界陸上リベリア関係者やオリンピックを本市に招聘できたことである。交流の場では、子どもたちが直接ふれあい、笑顔を見せながら積極的に関わる様子が印象的だった。イベント終了後には、憧れの選手と写真を撮ったり、サインをもらったりする姿が見られ、言葉の壁を越えて身振りや表情を交えながら会話を楽しむ場面が数多く見られた。

このような経験は、子どもたちにとって単なる思い出にとどまらず、国際的な視野を広げる契機となったと考えられる。世界で活躍する人々と直接触れ合うことを通じて、スポーツや学びへの関心が高まった。

2) 苦労した点

本市では、事業開始当初にいくつかの困難に直面した。

まず、リベリア共和国側からビジネス展開を希望する申し出があったが、本市の交流目的はあくまでスポーツや文化を通じた交流であり、経済活動は想定していないことを理解いただくまでに時間を要した。最終的にはご理解を得て、事業を開始することができた。

また、駐日リベリア共和国大使館から提案のあったリベリアダンスチームの本市滞在交流については、可能な限り旅費支援を検討・調整したものの、来日が実現せず、連絡も途絶えたため、受け入れ準備を進めていた関係者への説明に苦慮した。

さらに、大阪関西万博へ行く直前もリベリア万博担当者との連絡が滞るなど、意思疎

通に困難を感じる場面があった。

(7) 今後の展開

今後の交流については、スポーツ交流を中心に、双方に過度な負担のない形で継続することが望ましい。特に費用負担を抑えた持続可能な交流の仕組みが必要である。具体的な取組としては、以下のような交流が考えられる。

- ・本市スポーツ競技関係者とリベリア共和国スポーツ競技関係者によるオンライン交流・情報交換
- ・本市柔道関係者とリベリア共和国柔道関係者によるオンライン交流・情報交換
- ・学生同士によるオンライン交流

(8) 今後の展開における課題

対面交流は、人と人との直接的なふれあいを通じて大きな意義を持つものである。しかし、招聘に際してはビザ申請書類の準備や翻訳を介した調整など、多大な労力を要する。加えて、市担当者が直接交渉を行うためには相応の時間と専門的知識が必要となることから、対面交流を行う場合には、リベリア共和国と本市を円滑に繋ぐ役割を担う機関や業者の存在が不可欠であると感じた。

3-6 山形県遊佐町 × マダガスカル

(1) 背景と目標

1) 背景と目的

① 遊佐町の人口構成：遊佐町人口ビジョン（2025年3月策定）より

2020年の総人口は13,029人で、年少人口が1,210人（9.3%）、生産年齢人口が6,312人（48.4%）、老年人口が5,507人（42.3%）に達しており、2020年～2050年では1,992人（36.2%）の総人口の減少が予測されており、町の総人口は加速度的に減少すると考えられている。

② 産業構造

町の基幹産業として、農林漁業およびそれを支える関連の道の駅・観光・食関連産業が挙げられるが人口減少に伴う人手不足・就業者の高齢化、産業構造の変化で、就業者数・従事者数ともに減少傾向にあり、第1次産業・第2次産業の割合が縮小している。また、町民一人あたりの所得は県平均や近隣自治体と比較し低い状況であることから、1次産業における担い手の確保や6次産業化の促進による地域産業の活性化を図る必要がある。

③ 地理的要因・地域背景

遊佐町は、山形県の北端・沿岸部に位置し、海（日本海）に接し、また山地・丘陵・砂丘地帯を有する自然環境が豊かな地域であり、鳥海山を主とする出羽丘陵、西側には庄内砂丘をはさみ日本海と面しており、海・山・平地を併せ持つ地理的構造である。この地理的ポテンシャルを活かして、米・野菜・畜産・漁業・観光といった産業展開が図られてきた。

■万博を契機とした国際交流を実施する目的

遊佐町ではグローバルな視野や国際的なキャリアに対する理解や関心が十分に広がっておらず、留学に挑戦する中高生の割合が低いことが課題となっている。さらに、留学といえば欧米諸国が主に選ばれる傾向が強く、アフリカ諸国に対しては治安の問題や"途上国"という固定観念が先行しているのが現状である。

しかし、実際にアフリカ諸国の若者と触れ合うことで、彼らの持つハングリー精神や情熱、成長への貪欲さを肌で感じ、そのイメージは大きく変わると考えており「次に世界をリードするのは、この国の人々かもしれない」と実感する機会になる。

また、遊佐町では「遊佐には何もない」という言葉がまるで常識のように語られ、若者がそのまま町を離れてしまう傾向が見られる。

しかし、実際には遊佐町には海・川・山・森といった豊かな自然が揃っており、世界的に見ても魅力的なポテンシャルを秘めた地域である。外部の人々から「遊佐町って素晴らしいね」という言葉をもらうことが、遊佐町民（地方に住む日本人）の意識改革につながる。

今回の万博をきっかけに、アフリカ諸国と日本の地域間の交流が活発化し、お互いの地域や人々を称え合うことで、双方の自尊心や郷土愛を高め合う良い機会となることを期待している。

2)目標

【中長期目標】

- ・日本の地域の高校へ、アフリカ出身でかつ日本語教育を受けている生徒が高校進学段階で留学してくる（令和8年：最大3名）
- ・日本の地域への国際的な注目が高まっている中、日本の地域への留学機会を創出することによる、世界中の日本語学習者の増加や既存学習者の意欲の向上
- ・日本へ留学した優秀な生徒が卒業後に日本で進学・就職することで、産業界における国際的プロフェッショナル人材として貢献するきっかけとなる
- ・日本へ留学した生徒が、母国に帰国したのちに、日本と経済、文化、外交の交流を深める役割を果たす。将来、日本に友好的な政策を採る政治家やビジネスリーダーとなる。
- ・日本で教育を受けた留学生が世界で活躍することで、日本の文化や価値観が広まり、国際社会における日本の影響力が高まる。

【短期的に図ることのできる効果】

- ・マダガスカルからの生徒や日本語教師・教員との交流を通じて、異文化への関心を高めるとともに、自国の文化の魅力を再認識する貴重な機会となり、グローバル人材としての第一歩を踏み出す契機となる。また、海外留学が今後の進路において選択肢の1つとなる。
- ・マダガスカルからの生徒や日本語教師・教員の受け入れを通じて、学校・地域住民との交流が促進され、地域全体の国際理解や多文化共生の意識が芽生えるきっかけになる。
- ・マダガスカルからの生徒や日本語教師・教員が地域の文化や学校生活の一端を実際に体験することで、長期留学の受け入れに必要な体制やサポートの具体化を進める。
- ・来日した生徒が、母国に帰国したのちに、地域の魅力を国内外に発信し、観光客誘致につなげる。

(2) 事業内容

1)事業名：「マダガスカルの生徒・教員の遊佐町留学体験」



① スケジュール

4月下旬 採択後プロジェクト始動

5月～ 遊佐町在住の中高生おもてなし隊募集・決定

遊佐町留学体験ツアー企画会議実施 (5/27、6/10、6/24、7/8、7/22)

7月下旬 ツアー実施 (7/24～7/28)

9月 オンライン事後研修実施

② 体制

相手国：・Eagles' wings Montessori School (私立中学校)

・アンタナナリボ大学

日本国：・遊佐町役場 (各団体との調整)

・合同会社 Oriori (企画全般のコーディネート)

・一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム

(相手国や大使館・万博との調整)

・遊佐中学校、遊佐高校

・株式会社オリーブ (動画制作)

③ 内容 (日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等)

7月24日 (木) ～7月26日 (土) @遊佐町内

■参加者

マダガスカル参加者：中学生3名、校長先生1名、通訳1名

遊佐側運営者：中学生4名、高校生5名、大学生2名、コーディネーター4名

遊佐側参加者：地域の事業者6名、遊佐町長、遊佐高教員3名、遊佐中教員2名
寮母6名

■取り組み内容

- ・ウェルカムパーティ（両国の町や学校紹介、パフォーマンス等）
- ・遊佐町ジオパーク体験（海水浴、湧水温泉等）
- ・遊佐中学校、遊佐高校授業体験、制服体験
- ・遊佐の特産品で蕎麦打ち体験
- ・寮暮らし体験（お弁当作り体験等）
- ・万博報告会用オリジナルTシャツづくり
- ・浴衣着付け体験、町民花火大会参加
- ・フェアウェルパーティ

■報道対応

7月24日 山形新聞取材対応

2)事業名：「万博会場にて両国の生徒が中心になり、交流活動の内容について発信する」



① スケジュール

令和6年度よりマダガスカルとの交流事業を開始

└2024年12月24～31日マダガスカル渡航以来、
定期的にオンライン交流を重ねる

5月 採択後準備開始

7月 ・地域での交流プログラムを動画に記録

・マダガスカルの参加者とえびの市の中高生とプレゼンについて会議

② 体制

相手国：・Eagles'wings Montessori School（私立中学校）

・アンタナナリボ大学

日本国：・遊佐町役場（各団体との調整）

・合同会社 Oriori（企画全般のコーディネート）

- ・一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム
(相手国や大使館・万博との調整)
- ・遊佐中学校、遊佐高校
- ・株式会社オーヴ (動画制作)
- ・えびの市、飯野高校

③ 内容 (日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等)

7/27 (日) 大阪・関西万博会場のフューチャーライフビレッジ

■参加者

マダガスカル参加者：中学生7名、校長1名、大学教授1名、通訳2名

遊佐運営者：中学生4名、高校生5名、コーディネーター2名

えびの市：中学生4名、高校生2名、コーディネーター1名、教員2名

関係者：10名

生徒保護者：3名

一般参加者：数名 (入れ替わり自由のため不明)

■取組み内容

- ・昨年度の交流内容について発表
- ・両自治体での体験について動画とプレゼン発表
- ・質疑応答
- ・マダガスカル民族ダンスパフォーマンス

■報道：MBS NEWS

④ 効果

A:自治体内への波及効果：

- ・今回のマダガスカルの中学生との交流に関しておもてなし隊を公募したことによって、遊佐町の中高生やその保護者も含め、広く周知活動を行うことができ、グローバルな活動にチャレンジをする機会の創出に繋がった。
- ・都市部からの遊佐高校への留学生誘致だけでなく海外からの誘致の可能性を感じることができた。
- ・県内や東北でみても、万博での国際交流を行っている自治体が少なかったことと、内容を評価していただき取材を受ける機会が多く、自治体のPRにもつながった。

B:実施により達成できた成果

- ・本来の目的であった留学体験を通して「遊佐で学びたい」と思ってもらえることが出来た。また、通訳として同行していたマダガスカルの優秀な人材も遊佐で働きたいという意志があり採用に向けて進めている。
- ・参加した遊佐中学生や遊佐高校生のさらなる留学意欲に繋がり、トビタテJAPANに採択される生徒や、クルーズ船で訪れるインバウンドに向けて遊佐のPRを英語で行うグループをつくって活動するなど、グローバルに活動する中高生が短期間で増えた。



C:相手国への波及効果

・昨年度までは日本語学習をしていなかったマダガスカル私立中学校（Eagles'wings Montessori School）で、今回のプロジェクトを機に日本語クラスができ、日本で学びたいという層を増やすことができた。

・今回参加されたマダガスカルの社会人による事後研修での感想において、今回の渡航を通して時間や就業、ライフワークバランスに対する価値観が良い意味で変わり、時間の使い方や人生を見つめ直すきっかけになったという意見があった。



(3) 事業の目標に対する成果及び

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与



自治体通信Online - 全国の自治体トップ・職員・議員に響く
自治体の「経営力」を上げる情報サイト

自治体通信を読む

自治体向けイベント

自治体向けサービス

公務員向けキャリア

インタビュー



遊佐町長

松永 裕美 まつなが ゆみ

[遊佐町] ■人口:1万1,930人(令和7年7月31日現在) ■世帯数:4,831世帯(令和7年7月31日現在) ■予算規模:99億3,764万円(令和7年度当初) ■面積:208.39km² ■概要:山形県の最北部に位置し、日本百名山の1つ「鳥海山」を境に秋田県と接する県境の町。米や野菜、天然岩ガキ、鮭など、四季折々の特産物が豊富。町内には、日本酒の造り手のほか、ウイスキー蒸留所もある。

当町では、町内唯一の公立高校である県立遊佐高等学校の存続に向けて入学志願者数を増やすため、令和元年より「地域みらい留学」の仕組みを活用し、「国内留学生」を受け入れてきました。この間、取り組みは一定の成果をあげ、同校は廃校の危機から脱しつつあります。一方で、国内全体で人口減少が進むなか、将来的に留学生の受け入れは海外にも枠を広げる必要があるのではないかと危機感もあります。「万博国際交流プログラム」への参加には、国際感覚をもった人材の育成はもとより、将来、海外留学生の受け入れを見据えた、実証的な事業という意味合いもあります。交流相手国にマダガスカル共和国を選定した理由には、アフリカ諸国で第2位を誇る日本語学習者数や、治安や政治情勢の安定がありました。

今回のプログラムとしては昨年、遊佐高校の生徒3人が同国を訪問し、現地の高校生との交流を行いました。この交流は周囲にも影響を与えているようで、実際に町の短期留学補助制度を使って海外へ留学する生徒も出てきていると聞きます。遊佐町で学ぶ若者の国際感覚の醸成につながっているようです。今年は、同国から中学生が訪れ、遊佐町の中高生9人の「おもてなし隊」による交流プランで当町の魅力を満喫してもらいました。こうした町外との交流が、地域の持続可能性を高めることは、これまでの国内留学の取り組みでも経験してきました。今後も「過疎を資源に変える」という理念のもと、今回の「万博国際交流プログラム」を契機に世界に選ばれる遊佐町をめざしていきます。

- 令和8年度に数週間や1年の短期留学をしたいという生徒とつながることができた。また、今回のプログラムを通してマダガスカルからの留学生を受け入れるイメージを行政・学校・民間でイメージを持つことができた。
- マダガスカルで日本語クラスが設けられるほどにまで相手国の日本への留学意欲を高めることができた。

- 来年度、遊佐町で働きたいという若手人材と出会うことができた。
- 本プログラム後に国際的な取り組みに積極的に参加する生徒の増加や、教員の意欲の向上が見られた。

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

- <中高生によるプログラム企画>
 - ・遊佐町滞在のプログラム企画を、スタッフの大人ではなく中学生と高校生が協力し合って考えたことにより、当事者意識が芽生えたことに加えて企画力がつき、生徒たちの自信に繋がった。
 - ・実際にプログラムを企画する中で、遊佐の良さを再認識し郷土愛が生まれていた。
 - ・本プログラム後に、大学生と一緒に遊佐のツアーを企画し実行する高校生も見受けられた。

- <交流そのものがもたらした平和に対する価値観の変化>

(中学1年生のアンケートより引用)

僕が、プログラムを通して、成長したことや、価値観が変化したと思うところは、年、性別、住んでいる場所が違っていても、仲良くなりたいと思えるようになったことです。プログラムをする前は、外国の人は、何をするか分からないので、怖いというイメージがありました。だからあまり仲良くなろうとは、思ってはいませんが、このプログラムを通して、全然怖くはないし逆に仲良くなりたい、もっと話してみたいと思えるようになりました。プログラムでは、出会えた初日にフィオやケンジと仲良くなれたのでとても嬉しかったです。この体験を通して、僕はどんな国の人でも仲良くなれるということを知り、どんな国の人でも、仲良くなりたいとも思いました。このプログラムで、自分の見えなかった世界が見えました。

(6) 特に良かった点、苦労した点

1)良かった点：

- 中高生のチームを募る際、「マダガスカルの中高生との交流をきっかけに世界中の中高生が遊佐町・遊佐高校に留学できるような関係性や仕組みを築くための第一歩のプログラムである」という目的を共有できていたこと。
→全ての企画において、“マダガスカルの中学生から遊佐のファンになってもらう”という意識が遊佐側の中高生に芽生えていたことがプログラムの成功に繋がった。

2)苦労した点：

- 今回渡航されたマダガスカルの私立中学校長や、大学教授とは今回のプログラムについて企画段階からコミュニケーションを取れていたが、マダガスカルの中学生とは事前にやりとりができなかった点。
→今回のプログラムに参加した生徒が日本のローカルについて事前にインプットがあったほうがより交流イベントが有意義なものになったのではないかと反省して

いる。実際に遊佐へ来た生徒は最終的には遊佐に帰りたいと言ってくれたが、東京や都市部のほうが向いているのではないかと感じる部分も多く、事前に遊佐のことを知ってもらうことや、コミュニケーションをとることによって回避できたのではないかと考える。

(7) 今後の展開

- 遊佐町の地域おこし協力隊の制度を使い、「遊佐高校魅力化」事業の暮らしのコーディネーター枠でマダガスカル人の採用を進める。(令和8年年度中採用予定)
- 令和8年より、短期留学(数週間~1年)の受け入れを実施予定。マダガスカル私立中学校校長や、遊佐高校と調整中。
- 留学生の滞在については民間寮での受け入れを予定。

(8) 今後の展開における課題

- 当初は3年間の留学を検討していたが、日本語能力の問題や公立高校の入試制度改革との兼ね合い等課題が多く、短期留学から始めることとなった。
- 海外留学生を単身(親が同行しない)で受け入れた実績が少ないため、事務的なフロー等も整える必要がある。
- 現状3名程度しか受け入れられない体制のため、民間企業が主体となって宿泊先の拡充やサポートスタッフの確保等進める。

3-7 群馬県みなかみ町 × コンゴ民主共和国

(1) 背景と目的

本町は少子高齢化が目まぐるしいスピードで起きている典型的な過疎指定地域に認定されている町だが、群馬県初の3人制プロバスケットチーム”MINAKAMI TOWN.EXE”があり、世界初のプロ3x3国際ショナルリーグ”3x3.EXE PREMIER”に参戦している。チームテーマを『みなかみから世界へ』とし、“唯一人口2万人以下のプロチームとして、地域密着型日本一”を目指しながら、世界で活躍するプロチームとなる為にも、リーグ制覇を実現するべく活動中である。東京オリンピック公式種目にも採用された3x3[スリーエックススリー]という新興スポーツを活かし、みなかみ町の魅力である「観光」や「農業」に並ぶ新たな魅力を作り、地域を元気にしていきたい。

町としてこの動きを広く町民や日本、世界へ発信し「3x3」や「みなかみ」の認知度向上を図り地域活性化の一助としたい。

現在”MINAKAMI TOWN.EXE”にコンゴ民主共和国出身のスティーブ選手が所属しているが、町民には広く認知されておらず、この国際交流を期に周知や交流を深めていき、同国からのスポーツ留学生を受け入れる土壌を醸成し、近年中に留学生を誘致したいと考えている。

期待される目標

- ・3x3をはじめとするスポーツ交流を核とした地域活性化および関係人口の増加
- ・地域の魅力や3x3の認知度向上
- ・スポーツ留学誘致の土台作り（アフリカ・コンゴ民主共和国への理解等）
- ・小中高校生の万博への理解促進

(2) 事業内容

①実施事業名：みなかみ町×コンゴ民主共和国 みなかみ町立藤原小学校学校訪問事業

②スケジュール：2025年6月6日(金) 12:00～16:00

③体制：主催 MINAKAMI TOWN.EXE/みなかみ町教育委員会

④内容

-場所：みなかみ町立藤原小学校内

-参加者：藤原小学校生徒5名、先生4名、みなかみ町教育委員会1名、コンゴ民主共和国スティーブ選手、MINAKAMI TOWN.EXE選手4名、スタッフ2名

-取組内容：コンゴ民主共和国出身のスティーブ選手及びMINAKAMI TOWN.EXEの選手が藤原小学校を訪問致した。

コンゴ民主共和国におけるセミナー及び質問コーナーを開催後、リズムトレーニングによる交流及びバスケットボール指導を行った。

藤原小学校自体は、全校生徒 5 名と非常に小さい学校ですが、コンゴ民主共和国のセミナーを通して、国際的な考え方や異文化交流の機会となり、子ども達や先生方から非常に良いご意見を頂いた。

⑤効果

A:自治体内への波及効果：直接的に子ども達へ、コンゴ民主共和国出身のスティーブ選手と触れ合うことが出来て、コンゴ民主共和国への理解を深めることができたことと、コンゴ民主共和国について理解してもらえたと感じている。

B:実施により達成できた成果：交流国の理解と大阪・関西万博の理解の促進ができたと感じている。

C:相手国への波及効果：コンゴ民主共和国を知るきっかけを提供出来ていること。

参考写真



①実施事業名：みなかみ町×コンゴ民主共和国 3x3 UNITED コラボイベント①

②スケジュール：2025年7月6日(日) 10:00～17:00

③体制：主催 MINAKAMI TOWN.EXE 後援 みなかみ町/みなかみ町教育委員会/群馬県バスケットボール協会

④内容

-場所：月夜野総合体育館

-参加者：みなかみ町職員 3 名(みなかみ町阿部町長様、みなかみ町田村教育長様、石坂町議会議員様)、町民約 600 名、町外約 190 名、コンゴ民主共和国 4 名(スティーブ選手、パトリック様、他 2 名)

-取組内容：プロ 3x3 チーム“MINAKAMI TOWN”のプロリーグ“3x3 UNITED”のホームゲームを開催し、開会式では、コンゴ民主共和国大使館からパトリック様のご挨拶及び当チームに所属するコンゴ民主共和国出身選手であるスティーブ選手にご挨拶を頂いた。みなかみ町阿部町長、みなかみ町田村教育長及び石坂町議会議員とコンゴ民主共和国出身の皆さまとの意見交換の場所を設けた。

今回の交流事業を活用し、昨年度以上に発展したプログラムにするために、非常に有意義な話し合いが出来たと感じている。

また当日は、スティーブ選手やコンゴ民主共和国出身の皆さんと会場にて、交流を図れるように、コンゴ民主共和国ブースを出展し、参加者との交流の場所を設けた。

参加者総勢約800名のイベントになった。

⑤効果

A:自治体内への波及効果：沢山の町民に、3x3を通して、万博を知るきっかけと、みなかみ町×コンゴ民主共和国の国際交流をする意味を理解してもらえる絶好の場所となったと感じている。

B:実施により達成できた成果：交流国の理解と大阪・関西万博の理解の促進と3x3を通じた地域づくりに、コンゴ民主共和国出身選手のスティーブ選手が関わっていることを理解してもらえたこと。

C:相手国への波及効果：コンゴ民主共和国を知るきっかけを提供出来ていること。

参考写真



①実施事業名：みなかみ町×コンゴ民主共和国 みなかみ町生涯スポーツフェスティバル

②スケジュール：2025年7月12日(土) 10:00～15:00

③体制：みなかみ町

④内容

-場所：月夜野総合体育館・陸上ホッケー場

-参加者：みなかみ町役場 30 名(みなかみ町教育委員会)、みなかみ町町民約 370 名、コンゴ民主共和国 4 名(フレディー様、スティーブ選手、パトリック様、他 1 名)

-取組内容：みなかみ町主催のプログラム“みなかみ町生涯スポーツフェスティバル”に参加を頂き、コンゴ民主共和国ブース出展、各種スポーツ体験、モルック大会、ダイナソーレースへ参加をしていただいた。

コンゴ民主共和国出身のスティーブ選手もモルック大会へ参加し、町民との交流を図った。コンゴ民主共和国の皆さんとみなかみ町町民と一緒にスポーツイベントを体験することで、スポーツを通じた国際交流の機会を提供し、お互いの文化を理解するきっかけになったと感じている。

総参加者数は、約 400 名の参加があった。

⑤効果

A:自治体内への波及効果：みなかみ町町民とコンゴ民主共和国の皆さんと一緒に、モルックやスポーツ体験を行うことで、お互いの文化理解をすることができたと感じている。

B:実施により達成できた成果：コンゴ民主共和国ブースを通して、交流国の理解と大阪・関西万博の理解の促進ができたと感じている。

C:相手国への波及効果：コンゴ民主共和国の皆さまもスポーツを通して、みなかみ町民との距離を埋めることが出来たと感じている。

参考写真



①実施事業名： みなかみ町×コンゴ民主共和国 3x3 UNITED コラボイベント②

②スケジュール：2025年9月7日(日) 10:00~17:00

③体制：主催 MINAKAMI TOWN.EXE 後援 みなかみ町/みなかみ町教育委員会/群馬県バスケットボール協会

④内容

-場所：月夜野総合体育館

-参加者：みなかみ町職員 6 名(みなかみ町阿部町長様、石坂町議会議員様、みなかみ町観光協会様)、町民約 700 名、町外約 190 名、コンゴ民主共和国 3 名(フレディー様、パトリック様、他 1 名)

-取組内容：プロ 3x3 チーム“MINAKAMI TOWN”のプロリーグ“3x3 UNITED”のホームゲームの 2 回目を開催致した。

前回大会同様に、みなかみ町阿部町長ご挨拶及びコンゴ民主共和国の皆さんのご紹介を開会式で行った。

今回は、各種出展ブースを回ってもらう仕組みとしてスタンプラリーを導入することで、コンゴブースにもより沢山の皆さんが訪問し、交流を図っていた。

参加者総勢約 900 名にお越しいただき、盛大にイベントを盛り上げる事が出来たことは、これからもみなかみ町×コンゴ民主共和国の更なる交流に繋がる大切なイベントとなったと感じている。

⑤効果

A:自治体内への波及効果：1 回目より多くの方々に参加を頂けたことで、万博を契機にしたみなかみ町×コンゴ民主共和国との交流事業を行っていることへの町民理解が増えてると感じている。

B:実施により達成できた成果：交流国の理解と大阪・関西万博の理解の促進ができたと感じている。

C:相手国への波及効果：3x3 を通して国際交流事業への理解が深まったこと。

参考写真



①実施事業名：みなかみ町×コンゴ民主共和国 大阪・関西万博コンゴ民主居倭国パビリオン訪問事業

②スケジュール：2025 年 10 月 9 日(木) 10:00～18:30

③体制：みなかみ町代表者によるコンゴ民主共和国パビリオンを訪問

④内容

-場所：大阪・関西万博

-参加者：SOLUTIONS 合同会社(MINAKAMI TOWN.EXE)代表 大塚 俊、事業部長 日下 謙人、選手代表 ミロシュ・チョイバシッチ

-取組内容：大阪・関西万博へ訪問し、コンゴパビリオンへ訪問、コンゴ民主共和国の皆さんにみなかみ町×コンゴ民主共和国の国際交流事業についてお話をさせていただいた。またこれからの更なる発展に向けて意見交換を行った。

コンゴ民主共和国パビリオン物販コーナーにてコンゴ民主共和国スタッフの皆さんからピンパッチのギフトを頂いた。

またコンゴ民主共和国以外のアフリカの国のパビリオンを訪問し、異文化理解を深めることで、これからコンゴ民主共和国の良さを理解し、みなかみ町内での学校訪問事業に向けて活かしていく。

⑤効果

A:自治体内への波及効果：コンゴ民主共和国パビリオンを訪問し、意見交換ができたことで、これからの更なる交流事業に向けて、ポジティブな話が出来たこと。

B:実施により達成できた成果：万博訪問により、国際交流事業相手国のコンゴ民主共和国パビリオンを訪問したこと。

C:相手国への波及効果：みなかみ町と交流事業をしていることの理解共有が出来たこと。

参考写真



①実施事業名：みなかみ町×コンゴ民主共和国 スポ GOMI in みなかみ事業

②スケジュール：2025年10月11日(土)

③体制：主催 みなかみ町 後援 MINAKAMI TOWN.EXE/みなかみ町教育委員会

④内容

-場所：矢瀬親水公園

-参加者：みなかみ町職員 20 名、町民参加者 35 名、コンゴ民主共和国 4 名

-取組内容：スポ GOMI in みなかみを開催し、みなかみ町民とコンゴ民主共和国チームの皆さんとスポ GOMI を通して交流を行った。

コンゴ民主共和国出身の皆さんは、日本在住歴が長く、日本語も非常に流暢に話せたことから、みなかみ町民と話をしながら交流をしたりと国際交流が豊富な機会となった。イベントにコンゴ民主共和国の皆さんが来るのが当たり前になり、みなかみ町民への理解度が上がってきていると感じた。

その後、コンゴ民主共和国の皆さんとみなかみ町内で食事後、みなかみ町を案内した。

⑤効果

A:自治体内への波及効果：直接的に話すことによる交流相手国コンゴ民主共和国への理解促進

B:実施により達成できた成果：国際交流事業の理解促進

C:相手国への波及効果：みなかみ町への理解促進

参考写真



①実施事業名：みなかみ町×コンゴ民主共和国 出前授業 in 新治小学校

②スケジュール：2025年12月4日(木)

③体制：主催 新治小学校/MINAKAMI TOWN.EXE 後援 みなかみ町教育委員会

④内容

-場所：みなかみ町立新治小学校

-参加者：新治小学校生徒 147 名、先生方 18 名、保護者様 20 名、コンゴ民主共和国 1 名、MINAKAMI TOWN.EXE 選手 4 名、カメラマン 1 名、スタッフ 1 名

-取組内容：新治小学校全校生に向けて、みなかみ町×コンゴ民主共和国交流事業の一環として、コンゴ民主共和国について説明をした。

当日は、コンゴ民主共和国大使館コーディネーターのフレディーさんにお越しいただき、コンゴ民主共和国に関する話をしていただいた。

生徒の中から、コンゴ民主共和国に対するイメージ違いや質疑応答でも沢山の質問が出て、国際交流に触れる良いきっかけとなったと感じている。

その後、MINAKAMI TOWN.EXE 選手による講演、そしてバスケットボールを通じた交流を実施した。

⑤効果

A:自治体内への波及効果：直接的に子どもたちへ、コンゴ民主共和国のことを講演できたことと、子どもたちからも沢山の質問がでて興味が持てる様子が見れたこと。

B:実施により達成できた成果：交流国の理解と大阪・関西万博の理解の促進ができたと感じている。

C:相手国への波及効果：コンゴ民主共和国を知るきっかけを提供出来ていること。

参考写真



①実施事業名：みなかみ町×コンゴ民主共和国 利根商業高等学校インターン生向け出前授業

②スケジュール：2025 年 12 月 4 日(木)

③体制：主催 MINAKAMI TOWN.EXE 後援 利根商業高等学校

④内容

-場所：MINAKAMI TOWN.EXE 事務所内

-参加者：インターン生 1 名、利根商業高等学校先生 1 名、コンゴ民主共和国 1 名、MINAKAMI TOWN.EXE 選手 4 名、カメラマン 1 名、スタッフ 1 名

-取組内容：利根商業高等学校インターン生へ向けて、MINAKAMI TOWN.EXE の活動

をご紹介の中に、みなかみ町×コンゴ民主共和国の国際交流事業を行っていることの説明から、コンゴ民主共和国に関する授業をコンゴ民主共和国大使館エグゼクティブディレクターのフレディーさんよりご紹介をいただいた。

その後、MINAKAMI TOWN.EXE 選手・スタッフを交えて、コンゴ民主共和国との今後の国際交流に向けて、意見交換を行った。

インターン生にもわかりやすいように、説明を交えながら、グローバルな交流の必要性を説明した。

⑤効果

A:自治体内への波及効果：少人数でのイベント開催だったため、分かりやすくインターン生へコンゴ民主共和国への理解、国際交流する意味を理解してもらえたこと。

B:実施により達成できた成果：交流国の理解と大阪・関西万博の理解の促進ができたと感じている。

C:相手国への波及効果：コンゴ民主共和国を知るきっかけを提供出来ていること。

参考写真



①実施事業名：みなかみ町×コンゴ民主共和国 出前授業 in 利根商業高等学校バスケットボール部

②スケジュール：2025年12月12日(木)

③体制：主催 MINAKAMI TOWN.EXE 後援 利根商業高等学校

④内容

-場所：利根商業高等学校

-参加者：利根商業高等学校バスケットボール部 11名、利根商業高等学校先生 3名、コンゴ民主共和国 1名、MINAKAMI TOWN.EXE 選手 2名、スタッフ 1名

-取組内容：利根商業高等学校バスケットボール部へ向けて、みなかみ町×コンゴ民主共和国の国際交流事業を行っていることの説明から、コンゴ民主共和国に関する授業をコンゴ民主共和国大使館 PR 大使のパトリックさんより紹介をいただいた。

またその中でも高校生向けに、グローバルな考え方や内戦が起きている理由など含め、世界で起きている深い話をいただいた。

その後、MINAKAMI TOWN.EXE 選手・スタッフを交えて、コンゴ民主共和国との今

後の国際交流に向けて、意見交換を行った。

その後、バスケットボールコートでバスケットボール交流を行った。

⑤効果

A:自治体内への波及効果：講演によって、万博を契機にしたコンゴ民主共和国との国際交流事業についての理解と3x3指導によるスポーツを通じた国際交流の理解が深まったと感じている。

B:実施により達成できた成果：交流国の理解と大阪・関西万博の理解の促進ができたと感じている。

C:相手国への波及効果：コンゴ民主共和国を知るきっかけを提供出来ていること。

参考写真



(3) 事業の内容に対する成果

- ・3x3 UNITED×コンゴ民主共和国イベントを今年は2度開催を行った結果、来場者数が1回目800名、2回目900名と昨年の以上の集客が出来たことから、プロ3x3チーム“MINAKAMI TOWN.EXE”を核とした地域活性化と関係人口の増加が見込めた。
- ・同時に地域の魅力発信や3x3の認知度向上にも繋がったと感じている。
- ・昨年度出前授業を行わなかった小学校や利根商業高等学校にて出前授業を行い、大阪・関西万博への理解促進とコンゴ民主共和国を知るきっかけを作ることが出来たと感じている。
- ・スポーツ留学誘致の土台作りとして、利根商業高等学校バスケットボール部への出前授業は有効的だったと感じている。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

- ・まずは、今年度行った各種イベントの継続を行なっていく。
- ・特に、3x3 UNITED×コンゴ民主共和国イベントは大阪・関西万博を契機としたレガシー創造をしていく上で、継続価値の高い活動だと感じた。
- ・スティーブ選手やコンゴ民主共和国の皆さんにお越しいただいた出前授業も好評だった。

たと感じた。

出前授業の中では、今回の事業の目的とコンゴ民主共和国についての基本的な説明だったことから、来年度に向けては、より深い部分の説明をしていながら、みなかみ町×コンゴ民主共和国の国際交流プログラムを継続的に行っていく。

・2026年4月度から月夜野総合体育館の指定管理者として関わることから、コンゴ民主共和国ブースの常設設置をする方向で調整をしている。

・自主主体のイベントもコンゴ民主共和国大使館エグゼクティブディレクターのフレディー氏やコンゴ民主共和国大使館 PR 大使のパトリック氏とすすめることで合意している。

(5) こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

・コンゴ民主共和国のイメージと実際のイメージの相違があったという意見が多く、現実を知ることが出来たことは、グローバル社会の現代社会において、子どもたちの将来のためになると感じた。

・子どもたちとのトークセッションの中でも多数の質問が飛び交う中で、コンゴ民主共和国また外国に興味を抱く質問があったことは、印象的であった。

・グローバル社会に対応した人材育成において、今回のような国際交流プログラムは、非常に有効かつ、グローバルなマインドを培う上で非常に重要だと感じた。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

1) 良かった点

・沢山のイベントを通して、みなかみ町民に、コンゴ民主共和国との国際交流事業をする意味を理解してもらえたこと。

・MINAKAMI TOWN.EXE に所属するコンゴ民主共和国出身のスティーブ・クベマ選手やコンゴ民主共和国の皆さんがみなかみ町に沢山足を運んでくれたことで、みなかみ町への理解が深まったこと。

・万博を契機に、継続したみなかみ町×コンゴ民主共和国との国際交流を行うきっかけを作れたこと。

2) 苦勞した点

・コンゴ民主共和国人材派遣に伴い、ADNJ(在日アフリカン人ネットワーク)様のご協力はあったものの、リクエスト以上の人数が来たり、逆に予定より人数が少なかったりと苦勞した。

後半の出前授業では、コンゴ民主共和国大使館エグゼクティブディレクターのフレディー氏と直接話をして進めることが出来たことから、スムーズに人材を送っていただけたことは、非常に有難かった。

・出前授業で、説明をする際に、日本語もある程度流暢に話が出来るコンゴ民主共和国の皆さんが来ていただいたが、より分かりやすく説明をしないとイケないケースも多か

ったため、事前に知識をつける必要性があったことは、非常に苦労した。
しかしながら、みなかみ町×コンゴ民主共和国の国際交流プログラムのレガシー創造に
向けて、知見を持てたことは、これからに繋がると感じた。

(7)(8) 今後の展開及び今後の展開における課題

- ・これからの展開としては、コンゴ民主共和国側と一緒にイベントを多く開催し、各イベントを収益化し、自走を目指していきたい。
- その為にも、この事業で繋がりを持てたコンゴ民主共和国の皆さんとのネットワークを大切にし、各提案を行っていきたいと考えている。
- ・コミュニケーションにおいては、英語の必要性も改めて感じた。
- より円滑なコミュニケーションやグローバルな社会に適した人材育成を行うためにも、これから対策を考えていきたい。
- ・今回の大阪・関西万博の国際交流事業を機に、みなかみ町×コンゴ民主共和国の交流を更に増やしていけるように、計画を練っていく。

3-8 神奈川県横浜市 × ウガンダ・コートジボワール・セネガル・ブルキナファソ・マラウイ・マリ

(1) 背景と目標等

・背景と目的

アフリカそしてアジアは世界の中でも、最も変化の大きな地域として注目をされている。アフリカは人類の起源の歴史があり、民族や文化の多様性がありながら共に暮らしている。そして、今では資源や経済的な発展が進み、多くの可能性を秘めた地域でもある。また、この地域の人々の多様性には、星槎の考える「共生社会」への大きなヒントがあると考えている。

現在、世界では紛争・分断・AI の進歩など私たちの予想を越えた物事が起きている。そのような時代だからこそ人種・宗教・肌の色・言語・習慣など全てを受け入れ、様々な違いを知って繋がることこそが大切なのではないかと考え継続的に SAAB をサポートしてきた。

・目標・目的

- ① 子どもが主役となり、自ら発見し、調べ、体験する共感理解教育の題材とし、異なる文化・歴史・自然・資源等を取りあげ、その土地の人々に接し、どのような未来の地球を共に生きていくのか、どう生ききるかを考えるきっかけとする。
- ② この取り組みを通して、「他との異なりとは、互いを区別するものではなく、それぞれの豊かさを表し、理解し、認めるものであること(『星槎の3つの約束』 「人を認める」「人を排除しない」「仲間を作る」)を体験する。)。
- ③ 欧米に比べて、アフリカやアジアの各国について私たちの固定化された知識やイメージを、この経験を持って逆転していくことを目指す。
- ④ このような取り組みが多くの学校に広がる突破口として、将来子どもたちが共に生きる社会において必ず役に立つ経験になることを信じ、継続して取り組む。
- ⑤ このイベントを継続的に行い、全世界に規模の大きなボランティア・アソシエーション(自発的繋がり)を作っていく。
- ⑥ 未来へのつながりを考え、世界中の国々への発展的な活動へと継続していき、国際機関と連携を取りながら具体的な活動を児童生徒ともに行う。
- ⑦ SDGs の取り組みを通し、主体的に学習や研究を行い、全ての持続可能な開発目標に貢献できるような活動を行う。また 17 の目標だけではなく、169 のターゲットに目を向け、身近な問題・世界的問題に対してどのように行動できるのかを考え知って繋がる機会を作り、若者たちの行動する心を育む種まきを行う。

(2) 事業内容

事業名 SEISA Africa Asia Bridge (SAAB) 自治体連携国際交流事業

①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

2025年4～8月：交流方針の策定、国・団体との調整開始・事前学習開始

2025年7月7日：マラウイ共和国招待での大阪・関西万博コモンズ発表・視察

2025年8月20日：アフリカ開発会議招待・視察

2025年7～10月：相手国自治体・教育機関・企業とのマッチング、交流内容協議・広報活動

アフリカ・アジア各国大使館へ趣旨説明のための訪問・マラウイ共和国大使館学習成果発表

2025年11月15日：万博の要素をふまえたSAAB 2025（国際交流フェスティバル）

※特別交流プログラム実施

2025年12月以降：振り返り、継続事業に向けた検討

②体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

・学校法人星槎、学校法人国際学園連携

・SAAB参加国の自治体(例：マラウイ共和国首都の教育委員会等)・教育機関連携

・文化交流団体、民間企業連携、在外公館・国連関連機関、各自治体関係者等

③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

○2025年7月7日（月）-7月8日（火）大阪・関西万博マラウイ大使館ブース招待、学習成果発表と提案

場所：2025年日本国際博覧会（大阪府大阪市此花区夢洲）

参加者：高校生8名・教職員6名

取組内容

生徒の日々の学習で探求学習を重ねてきたマラウイ共和国の課題と課題に対する対策（水問題を解決するための竹炭を使用した浄水ろ過器の提案）を大阪・関西万博マラウイ共和国ブースで発表（公の場では初めての取り組み）。

会場では、一般来場者約100名が聴講。発表終了後、多くの質問やアドバイスをいただき、次のマラウイ共和国発表に向けての課題を見つけることができた。

また会場内の各国のパビリオン見学を通して11月15日のSAAB 2025の準備や万博のレガシーを残すためにどのような企画をすればよいか構想を練ることができた。

○2025年10月30日（木）マラウイ共和国大使館学習成果発表

場所：マラウイ共和国大使館（東京都港区高輪3丁目4-1 高輪偕成ビル7階）

高校生10名・教職員4名

取組内容

マラウイ共和国大使館を訪問し、竹炭を使用した浄水ろ過器を提案。

マラウイ共和国は水資源に恵まれているが、地方では安全な飲み水を井戸まで汲みに行く必要があるという現実を知り、この問題に対し、現地で手に入る「竹を炭にして

作るろ過装置」という解決策を提案（英語でプレゼンテーション）。
大使からは、「この装置はいつ送ってくれますか」という、お褒めの言葉をいただいた。生徒たちは、世界の課題解決に貢献できる可能性を実感した。

○日時：2025年11月15日（土） 10:00～16:00

場所：星槎高等学校 〒241-0801 神奈川県横浜市旭区若葉台 4-35-1

参加者：10,593名

取組内容

対面参加をメインとし、全世界を含め日本全国約40拠点の受信会場および一般参加希望者がオンラインで視聴できる国際交流フェスティバル。

オープニングセレモニーは、星槎高等学校 体育館を会場として、約15カ国のアフリカ・アジアの大使館から大使等をはじめ UNOSAA（国際連合アフリカ担当事務総長特別顧問室）、UNDP（国連開発計画）、国会、外務省、神奈川県、横浜市、Rainbow International School（インド人学校）等から要人を迎えて実施。

(1) オープニングセレモニー

・あいさつ

UNDP 国連開発計画駐日事務所 所長ハジアリッチ秀子様

エリトリア国特命全権大使 エスティファノス アフォワキ ハイレ閣下

衆議院議員 日本アフリカ友好議員連盟会長 逢沢一郎様

衆議院議員 法務副大臣 三谷英弘様

横浜市会議員 日本アフリカ友好横浜市会議員連盟会長 佐藤祐文様

ニューヨーク育英学園理事長 ジャーナリスト 武田秀俊様

15カ国の駐日アフリカ大使館の方々のご参列

生徒による SAAB 2025 Future 宣言発表と採択

国連訪問 SDGs 実践報告（歌舞伎の衣装作り、竹炭を使った水の浄化研究を絵本を作成してPR）等

(2) ブース

生徒企画 17(食品企画も含む)・アフリカ大使館 6

アフリカ、アジア雑貨店・飲食店 37・その他民間企業例示多数

(3) その他企画

オリンピックのトークショーや音楽・ダンス等のワークショップ・アフリカの国々を中心とする食文化体験・包装紙を生かしたビーズネックレス、イヤリング等作成体験を実施

(4) 効果

アフリカやアジアの国々を中心にこれまでの「SDGs の具現化」「共生社会の実現」「若い世代の多様な交流」に向けてのさまざまな活動や実績を共有し、重要性を発信し、ボランティア・アソシエーション(自発的繋がり)をつくることができた。

(3) 事業の目標に対する成果

アフリカ・アジアの国々を対象に、ご協力いただいた大使館が 15 ヶ国、日本、UNDP (国連開発計画)、ニューヨーク育英学園、Rainbow International School、Marianas High School (MHS)、Northern Valley Regional High School at Demarest(NVD)、Northern Valley Regional High School at Old Tappan (NVOT)、ぐんま国際アカデミー(GKA)の教職員・生徒を合わせると 40 ヶ国以上、総参加人数 10,593 名の皆様と共に、学びと関わり合いの輪を広げることができた。

各国大使館関係者に生徒が作成したブースの紹介を積極的に行い、生徒と大使館関係者が交流する場面も非常に多くみられ、未来を担う子どもたちの交流の場となることができた。生徒のブース紹介やオープニングセレモニーでの英語のスピーチでは、日々の学習の成果や国際交流の成果を発揮することができ、様々な方面より、高い評価をいただいた。

当日の様々な交流やオンライン企画は以下、タイムスケジュール・会場マップをご確認ください。

※全ての映像はオンデマンドで HP 上に残され、全国・全世界の方々が時差や国境を越え、事後学習を行うことができる。

またこの映像を見ながら学習ができる「study book」も作成をした。HP 上でダウンロード可能。

Time	SEISA KANAGAWA First venue ch	SEISA KANAGAWA Second venue ch	Know and connect project ch	Nationwide ch
10:00	10:00- オープニングセレモニー	10:00- オープニングセレモニー	10:00- オープニングセレモニー	10:00- オープニングセレモニー
11:00	11:00- 国連開発計画 (UNDP) 国際開発プロジェクト推進員研修会			
12:00	12:00- 国連開発計画 (UNDP) 国際開発プロジェクト推進員研修会			
13:00	13:00- 国連開発計画 (UNDP) 国際開発プロジェクト推進員研修会			
14:00	14:00- 国連開発計画 (UNDP) 国際開発プロジェクト推進員研修会			
15:00	15:00- 国連開発計画 (UNDP) 国際開発プロジェクト推進員研修会			
16:00	16:00- 国連開発計画 (UNDP) 国際開発プロジェクト推進員研修会			

会場MAP 検査

1F

- 1 日本ブース
- 2 東北がカレッジCOWORK (東北カレッジ職員中心ブース)
- 3 ムンゴーのゆるももち
- 4 Tama Lab (L.S.建築デザイン)
- 5 海外研修発表
- 6 アソビガシアタ劇場
- 7 企業主催のよわわら: 産学連携推進課
- 8 Tami-hoはーすアワーショップ
- 9 Shiro Hearts Coffee Club
- 10 株式会社伊勢屋
- 11 A-Rest Drinks(アラウンド)

2F

- 11 日本経済新聞社
- 12 AFU (法政大学アジア太平洋大学)
- 13 JICA 横浜
- 14 株式会社 関東入国事務所
- 15 株式会社 関東入国事務所 / NEXT4
- 16 株式会社 関東
- 17 SEIN MARKET LAWSON
- 18 Africa Jam
- 19 Way Mode
- 20 Usually headmaster
- 21 産経高校生活協賛企業
- 22 産経高校生活協賛企業
- 23 くらり工房
- 24 GUY'S アフタースクール(ワー!!)
- 25 FTD OPEN
- 26 産経朝日 SAAB 代理店ブース
- 27 YAMA RANGO
- 28 マリアーアスコンニス
- 29 RISSAP
- 30 アフタニ

3F

- 31 一社一業ブース
- 32 Alivakaba
- 33 6月1日アフリカ
- 34 オウギニ ハンダル
- 35 太陽館ブース
- 36 知能プロジェクト
- 37 太陽館ブース
- 38 太陽館ブース
- 39 日本経済新聞社
- 40 AFU (法政大学アジア太平洋大学)
- 41 JICA 横浜
- 42 株式会社 関東入国事務所
- 43 株式会社 関東入国事務所 / NEXT4
- 44 株式会社 関東
- 45 Alivakaba
- 46 6月1日アフリカ
- 47 オウギニ ハンダル
- 48 太陽館ブース
- 49 知能プロジェクト
- 50 太陽館ブース
- 51 太陽館ブース
- 52 日本経済新聞社
- 53 AFU (法政大学アジア太平洋大学)
- 54 JICA 横浜
- 55 株式会社 関東入国事務所
- 56 株式会社 関東入国事務所 / NEXT4
- 57 株式会社 関東

会場MAP グラウンド

飲食ブース

- 1 産経高校食品企業
- 2 産経高校食品企業
- 3 わかばカレー
- 4 産経高校食品企業
- 5 産経高校食品企業
- 6 産経高校食品企業
- 7 産経高校食品企業
- 8 わかばカレー
- 9 うまかぜファーム
- 10 cafe Le Mains
- 11 美味しい焼肉
- 12 ストア
- 13 ナイムスソフト料理
- 14 SIVAキッチン
- 15 キッチンカー-島話える
- 16 島野商店
- 17 ランチーマン
- 18 コートピア
- 19 キッチンカー-Misana
- 20 Chika Yery Ballroom Mobile
- 21 TOFO CATERING SERVICE
- 22 Bakes
- 23 wj Jokes
- 24 Mr. Chicken
- 25 MR.KU+インナー
- 26 産経朝日
- 27 産経朝日-モリコロ-産学連携推進課
- 28 HOSHINO CHURROS
- 29 Libbey
- 30 アフタガリーナッツ
- 31 びいやんバータス
- 32 F&Gワンタアース

イベント

- 11:00-12:00 少々の足蹴
- 13:10-14:15 野球体験
- 14:20-15:00 クリケット体験

報道対応：神奈川新聞社・NHK 北海道

参加者数・参加大使館等、総計は以下参照

来場者数	11/15(土)～16日(日)		合計
2025	10,593		10,593名
2024	8,633名		8,633名
2023	7,463名		7,463名
2022	オンライン開催をメインに実施		
2021			
2020			
	第1日目	第2日目	
2019	3,465名	4,273名	7,738名
2018	3,014名	3,997名	7,011名
2017	3,604名	3,643名	7,247名
2016	2,600名	3,200名	5,800名
2015	4,000名		4,000名
参加国・地域数	大使館関係	その他(日本含)	合計
2025	15カ国	25カ国	40カ国
2024	18カ国	19カ国	37カ国
2023	19カ国	12カ国	31カ国
2022	15カ国	17カ国(オンライン含む)	32カ国
2021	16カ国	23カ国(オンライン含む)	39カ国
2020	6カ国	24カ国(オンライン含む)	30カ国
2019	17カ国	15カ国	32カ国
2018	16カ国	20カ国	36カ国
2017	21カ国	14カ国	35カ国
2016	13カ国	17カ国	30カ国
2015	9カ国	8カ国	17カ国

参加大使館	会場来校 ※順不同
エリトリア国 / ウガンダ共和国 / マラウイ共和国 / アンゴラ共和国 / コートジボワール共和国 / エチオピア連邦民主共和国/コンゴ共和国 / タンザニア連合共和国 / リベリア共和国 / モザンビーク共和国 / レソト王国 / マリ共和国 / ベナン共和国/ナミビア共和国 / ルワンダ共和国	

参加国・地域	参加された方の国、地域（来場およびオンライン参加）	※順不同
	アメリカ合衆国 / ニュージーランド / ブータン王国 / 中華人民共和国 / バングラデシュ人民共和国 / 日本 / 大韓民国 / ナイジェリア連邦共和国 / インド共和国 / タイ王国 / フィリピン共和国 / セネガル共和国 / ケニア共和国 / 北朝鮮 / スリランカ民主社会主義共和国 / インドネシア共和国 / ガーナ共和国 / ミャンマー連邦共和国 / 台湾 / ブルキナファソ / 北マリアナ諸島自治連邦 / ベトナム社会主義共和国 / エジプト・アラブ共和国 / 南アフリカ共和国 / トーゴ共和国	
	特別協力 国連開発計画（UNDP） / 日本アフリカ友好議員連盟 / 日本アフリカ友好横浜市会議員連盟 ニューヨーク育英学園 / Rainbow International School / Marianas High School (MHS) / ぐんま国際アカデミー (GKA) / Northern Valley Regional High School at Demarest(NVD) Northern Valley Regional High School at Old Tappan (NVOT) / 株式会社崎陽軒	
共 催	SEISA Africa Asia Bridge 実行委員会・横浜市国際局	
後 援	外務省 / 文部科学省 / 神奈川県 / 小田原市 / 箱根町 / 大磯町 / 神奈川県教育委員会 / 横浜市教育委員会 / 小田原市教育委員会 / 大磯町教育委員会 / JICA 横浜 / ヨコハマ SDGs デザインセンター 公益財団法人世界こども財団 / 一般社団法人星槎グループ / 学校法人星槎 / 学校法人国際学園 日本共生科学会	
協 力	学校法人星槎こども園 KIDS planet / 社会福祉法人星槎 / 星槎学園 / JICA 北海道	

（４）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

- ・万博閉会後も相手国自治体・教育機関と定期交流を継続する合意形成ができた。
- ・学校教育・企業・NPO が連携する「学校地域国際協働モデル」が構築され、持続的な国際交流の仕組みとしてレガシー化が期待できる。

（５）子どもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

- ・アフリカ・アジアの同世代との交流を通じ、「様々な国の文化を知ることができた」「世界に挑戦したい」「将来は国際的な仕事に関わりたい」「自分の目で世界を見にきたい」という声が多く聞かれた。
- 自分たちが学ぶことが世界の課題解決につながるという気づき生まれ、学習意欲が向上した。

(6) 特に良かった点、苦労した点

○良かった点

- ・子どもたちの主体性が発揮され、積極的な発言・協力が見られた。
- ・地域住民・企業・学校の連携が生まれ、自治体全体を巻き込む取り組みとなった。
- ・多様性を肯定する雰囲気が広がり、地域内の国際理解が加速した。

○苦労した点

- ・時差や言語の差による調整に時間を要した。
- ・相手国のインフラ事情に合わせたオンライン環境構築が必要だった。
- ・関係団体が多く、役割分担の調整に工夫が必要だった。

(7) 今後の展開

- ・星槎、市町村単位での交流を越え、教育・産業・文化を含む「多層的国際連携モデル」を構築する。
- ・私立学校、市内学校を越えた全世界の国際教育プログラムの標準化・共通カリキュラム化を図る。
- ・企業、小学校、中学校、高校、大学、地域団体と連携し、留学生受け入れや海外発信事業へ発展させる。
- ・星槎、自治体が主体的に運営できる体制を整え、予算確保・人的リソース育成を進める。

(8) 今後の展開における課題

- ・担当者・協働人材、財源の継続的確保
- ・中長期的な予算計画の確立
- ・相手国との連携の安定性を保つための仕組みづくり
- ・オンライン、対面を組み合わせた「持続可能な交流モデル」の確立
- ・事業を星槎、自治体全体の施策に統合し、単発で終わらない運営体制の構築

【活動の様子】

①2025年7月7日(月)-7月8日(火) 大阪・関西万博マラウイ大使館ブース招待、学習成果発表と提案



②2025年10月30日（木）マラウイ共和国大使館学習成果発表



③2025年11月15日（土）SEISA Africa Asia Bridge 2025 写真
オープニングセレモニー集合写真



オープニングセレモニー様子



生徒のアフリカ・アジアの交流に向けて、SDGsの具現化に向けての宣言文発表後の集合写真



大使館関係者御来校の様子



3-9 神奈川県横浜市 × エチオピア

(1) 背景と目標等

1)背景と目的

横浜市は過去のアフリカ開発会議（TICAD）の横浜開催を通じて、アフリカとの交流を続けてきた。令和7年8月に開催された「第9回アフリカ開発会議（TICAD9）」に向けて、これまで築いてきたアフリカとの友好関係を継続し「アフリカに一番近い都市」として、次世代を中心に横浜市民の皆様がアフリカ各国と交流する機会を設けた。また、本事業の実施をTICAD9、そして令和9年の「GREEN×EXPO 2027」につなげるとともに、より国際的で多様性に富んだ都市を目指す。

2)目標

- ①横浜市の次世代を担う子どもや学生が、アフリカ諸国との交流を通じて、多文化共生や相互理解を深める。
- ②自身の文化や環境を客観的に見つめる機会を提供する。
- ③グローバルな視点を持ち、世界で活躍できる人材の育成につなげ、「横浜で育ってよかった」と思える市民が増える。
- ④万博での交流等により、よりアフリカ諸国を身近に感じ、学びを促進していく。

(2) 事業内容

【エチオピア大使と高校生・留学生との交流】

- ・日時：令和7年6月3日 14:30-16:30
- ・場所：横浜市国際学生会館（横浜市鶴見区本町通4）
- ・参加者：合計44名
 - エチオピア大使館関係者3名
 - ダバ・デベレ・フンデ駐日エチオピア連邦民主共和国特命全権大使
 - アンゲソム アブルハ アベベ 書記官（広報担当） / 竹内（大使館スタッフ）
 - 学校関係者10名
 - 横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 2年生9名 引率教員1名
 - 留学生関係者15名
 - 横浜市国際学生会館留学生 エチオピア留学生4組（家族2組 単身2人）
 - その他留学生者（南アフリカ・ガーナ・インド・アメリカ）
 - 横浜市関係11名
 - 日本アフリカ友好横浜市会議員連盟 副会長 渡邊忠則 横浜市議会議員
 - 横浜市国際学生会館関係者3名
 - 取材2名

神奈川新聞 1名 鶴見 Youtuber 1名 (広報よこはま取材有)
報道対応：神奈川新聞取材、横浜市広報よこはま鶴見区版取材

1)事業名 「エチオピア大使と高校生・留学生等との交流」

①スケジュール

本事業を通じて横浜市民との交流促進するため、エチオピア大使館と連絡調整を行い、信頼関係を深めた。ダバ駐日エチオピア大使が横浜市国際学生会館を直接訪問し、横浜で学ぶ日本人高校生や、エチオピア出身留学生（家族を含む）、横浜市関係者と対話を行う事業を計画・実行した。

②体制

エチオピア大使館大使、書記官およびスタッフとの調整を密に行うとともに、横浜市国際局、横浜市教育委員会、鶴見区役所と連携した。また、横浜市議会議員にもご協力いただいた。

③内容

ダバ駐日エチオピア大使が横浜市国際学生会館に表敬訪問し、エチオピアと横浜の関係性についてお話いただいた他、会場に集まった「エチオピア出身留学生・家族」「高校生」等と直接対話をして交流を深めた。

【ダバ駐日エチオピア大使が横浜市国際学生会館に訪問し、若者と交流した様子】



ダバ駐日エチオピア大使挨拶



全体の様子各国留学生との交流



高校生との交流

エチオピア大使と高校生



高校生が大使に直接質問

TSURUMI 2025 No.334 広報よこはま・鶴見区版8月号

TSURUMI 8



お互いを知り、共に生きる

ダ/駐日エチオピア特命全權大使、留學生や市立サイエンスアカデミーの生徒たちとの交流 (横浜市国際学生会館)

外国人も多く暮らす鶴見の地域には、文化が交差し合う。互いの文化を理解し、尊重しながら、新たな文化を生み出すための交流があります。今回は横浜で「第9回アフリカ民族音楽祭」が開催されます。鶴見で暮らす外国人の生活を切り、多文化共生や国際平和について考えるきっかけになっていきます。

多文化共生推進活動

みんなが共に考える、多文化のまち-つるみ

横浜国立大学大学院への留学を終え、エチオピアから来日し、横浜で暮らし始める方とご家族にお話を伺いました。

外国人の暮らしはどんなですか?

まことの皆さんは、日本語があまり使えない私たちにも優しく声をかけてくれて、とても安心です。地域の外国人は数千人います。みんなが一緒に暮らしているのがいいです。

エチオピアの生活の特徴は?

ドブレットと呼ばれる料理がスィーツでもとてもおいしいです。近くのエチオピア料理店はありませんが、家が白壁のレンガ造りでとても綺麗です。

もっと知ってほしい観光地は?

ぶらぶらと歩くと、外国人の姿を見ることが出来ます。特に国際学生センターの周辺は、外国人の姿を見ることが出来ます。

エチオピアの伝統?

結婚が百年の約3倍、人口は約1億1千万人で、コーヒー祭りの祭りと知られるアフリカの国です。

鶴見区民生活支援センター 鶴見区民センター

区役所企画調整係 510-1676 504-7102

区や市への問い合わせ



スマートフォンやPCでの申し込み

お申し込みの受付は、本区民センターの受付窓口で行います。



区民センター

区民センターでは、お申し込みの受付を行っています。



区民センターの受付

お申し込みの受付は、区民センターの受付窓口で行います。



鶴見区民センター 鶴見区民センター 鶴見区民センター 鶴見区民センター 鶴見区民センター

【横浜市鶴見区での伝統地域行事「潮田神社例大祭」での交流】

- * 日時 : 令和7年6月7日、8日 8:00-19:00
- * 場所 : 潮田神社および潮田地域 (横浜市鶴見区)
- * 来場者: 約1万人
- * 参加者: エチオピア留学生4組 その他留学生40名

1)事業名 「潮田神社例大祭」

①スケジュール

横浜市国際学生会館周囲の「潮田地域」で毎年開催される地域伝統行事「例大祭」に、留学生が参加し、地域交流を行っている。今回はエチオピア留学生や家族も参加し、地元の子どもたちと一緒に神輿を担ぐ交流を行う計画をたて、地元自治会との調整のうえ、実施した。

②内容

・内容：神社の伝統行事で神輿担ぎに留学生（エチオピア留学生を含む）が参加し、地域の子どもたちと交流した。

【例大祭の様子】



留学生が神輿担ぎに参加



エチオピア留学生の家族も参加



子どもとの交流

【サッカー試合会場でのブース出展・グラウンド周回】

・日時：令和7年6月29日14:30-19:00

・場所：横浜市 ニッパツ三ツ沢球技場（横浜市神奈川区三ツ沢西町3-1）

・参加者：合計17名

横浜市国際学生会館職員1人 留学生関係8人（エチオピア人4人）

専門学校留学生6人 教員2人

・来場者：1120人

1)事業名 「サッカー試合会場でのブース出展・グラウンド周回による交流およびPR」

①スケジュール

若者をターゲットに向けてPRしていくことで、万博やTICAD9への認知度を高め、多文化共生や国際交流を推進していく計画をたてた。横浜市内のプロサッカーチームの試合来場者でエチオピア留学生と交流する機会を提供し、試合ハーフタイムでは観客全体に向けてPRをするグラウンド周回が効果的と考え、サッカー球団「横浜Y.S.C.C.」と交渉を行った。球団にはアフリカをはじめ、韓国など外国人選手もおり、国際交流するには最適なチームであり、具体的な活動について了解を得ることができ、実現した。

①体制

サッカー試合会場でのアフリカ・エチオピアPRは駐日エチオピア大使館にも連絡し、ご理解いただいた。また、サッカー球団およびエチオピア留学生からは快く引き受けていただき、入場許可申請等スムーズに行った。

②内容

スタジアム入口にテントブースを設置し、エチオピア留学生と横浜市民との交流拠点を設

置し、アフリカの資料や万博パンフレットなどを設置・配架した。選手も参加し、世界の遊び（蹴鞠ゲーム）をエチオピア留学生・市民と一緒に楽しんだ。

ハーフタイム時間に、グラウンドをエチオピア留学生らが周回し、スタジアムDJがアフリカ・エチオピアや万博、TICAD9について場内アナウンスをした。

<来場者 アンケート>

感想

*国際交流はつながりが増え、知識が増える。

*楽しかった。初めての経験ができて良かった。

*英語とかをしゃべっていたかったから参加した。

*またチンロン（蹴鞠）をやりたい。

Q：国際交流に参加をして、万博に行こうと思ったか？=はい 100%

Q：今回の国際交流取り組みは価値あるものであったか？=はい 100%

【サッカー試合会場での様子】



サッカー会場で活動展開



スタジアム入口にブース設置



市民とエチオピア留学生が交流



子どもとの交流



サッカー選手も参加

ハー

フタイムにグラウンド周回

【市内留学生および市民向けイベント「KANAFAN まつり」出展】

* 日時：令和7年7月7日 13:30-18:00

* 場所：新都市ホール（横浜市西区高島 2-18-1 横浜新都市ビル（そごう横浜店）9階）

* 参加者：横浜市国際学生会館 エチオピア留学生1名 職員2名 その他留学生2名

* 来場者：約1000人

1) 事業名 「KANAFAN まつり ブース出展」

① スケジュール

留学生を主な対象とし、横浜市民等も参加できる国際交流イベント「KANAFAN まつり」で、アフリカ・エチオピアを留学生が直接PRできるブース出展を話し合うなかで実現した。万博やアフリカ開発会議への機運を高めるとともに、横浜市国際学生会館に多くの留学生がいることをPRし、多文化共生社会や国際交流を推進していくことを中心に計画をした。

② 体制

エチオピア大使館、横浜市国際局、神奈川県等、多くの自治体に情報提供をいただき、展開準備をした。

③ 内容

イベントスペースの一角に横浜市国際学生会館のブースを設置し、アフリカ情報提供やエチオピア人との交流を行った。アフリカ型の短冊に願いを書いて飾った。



会場内ブース



エチオピア人との交流



アフリカ型の七夕に記入

【大阪・関西万博会場エチオピアパビリオン訪問】

*日時：令和7年7月13日

*場所：大阪・関西万博エチオピアパビリオン（大阪市此花区夢洲中1丁目）

*参加者：合計17名

高校生 3名（横浜サイエンスフロンティア高校2年生）

エチオピア留学生4組（家族2組 単身2人 小学生1名含む）

通訳 2名

取材（動画・画像収録）1名

横浜市国際学生会館スタッフ 1名

*エチオピア関係者：ヨディット・アレマエフ（外国市場促進担当シニアエキスパート）
エチオピア、アディスアベバ（貿易省）

1)事業名 「大阪・関西万博会場エチオピアパビリオン訪問」

①スケジュール

8月に横浜市で開催された TICAD9 を前に、横浜を担う次世代の若者が大阪・関西万博会場を訪問し、エチオピアパビリオンにおいて深く学び、経験等を横浜市民に伝えていく計画を策定した。横浜市内の高校生とエチオピア留学生関係者とともに訪問交流を行った。

②体制

駐日エチオピア大使館書記官との連絡調整に加え、エチオピア政府の万博担当者とも連絡を取り合いながら、万博訪問に協力いただいた。

③内容

横浜から市内高校生とエチオピア留学生らとともに万博会場へ向かい、コモンズ B 内のエチオピアパビリオンにおいて、高校生がエチオピアの展示物等で深く学び、エチオピア人の説明を聞いた。

<万博訪問の様子>

会場の様子



コモンズ B



エチオピア留学生説明





エチオピア展示品



高校生に説明



コーヒーセレモニー説明



動画でもエチオピアを説明



横浜市内の高校生

【子どもアドベンチャーカレッジ おしえて！アフリカ先生！】

*日時 : 令和7年8月7日 10:00-12:00

*場所 : GALERIO(横浜市西区みなとみらい一丁目1番1号横浜国際協力センター6階)

*来場者: 合計14組(親子、うち横浜市内小学生16名)

*出演者: 横浜市国際学生会館 エチオピア留学生3名(横浜国立大学大学院生)

通訳2名 横浜市国際学生会館職員1名

1)事業名 「子どもアドベンチャーカレッジ おしえて！アフリカ先生！」

①スケジュール

毎年横浜市教育委員会事務局主催で小学生対象のプログラム「子どもアドベンチャー」を実施している。このプログラムを通じて、未来を担う小学生がアフリカを体感し、学び、身近な存在として感じてもらう事業を計画した。横浜市教育委員会事務局・横浜市国際局の協力及び、エチオピア留学生他からの協力を得ながら構成等を組み立て、実施した。

②体制

エチオピア大使館からの情報提供とともに、万博会場エチオピアパビリオン訪問制作を地元Youtuberにご協力いただいた。また、横浜市国際局がマネジメントを中心に行い、会場や教育委員会事務局との連絡調整を担っていただいた。

③内容

- ・横浜市国際学生会館職員による会館概要説明およびアフリカについての説明(日本語)
- ・万博・TICAD9 紹介(日本語)
- ・万博会場訪問のダイジェスト動画放映
- ・アフリカ・エチオピア留学生によるエチオピアの説明(英語・日本語)

・エチオピア人と小学生がワークショップやコミュニケーションを通して交流。

【高校文化祭でのエチオピア紹介】

- *日時 : 令和7年9月6日13:00-15:00 / 9月7日13:00-15:00
- *場所 : 横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 (横浜市鶴見区小野町6)
- *来場者: 2日間合計1万人 (文化祭全体・市民公開)
- *出演参加者: 横浜市国際学生会館 エチオピア留学生1名 (横浜国立大学大学院生)
横浜市国際学生会館職員1名
横浜サイエンスフロンティア高校国際交流委員会 10名

2)事業名 「横浜サイエンスフロンティア高校文化祭「蒼煌祭」内 国際交流教室」

①スケジュール

横浜市立サイエンスフロンティア高校の文化祭(一般公開)「国際交流教室」において、エチオピアの遊び「ケレボシュ」を通じて国を知る企画を高校生と話し合いをしながら構成した。担当の高校生は、エチオピアについて事前学習し、掲示物や説明文を作成した。

②内容

文化祭でエチオピア留学生が自国で有名な遊び「ケルボシュ」を実演しながら来場者と一緒に遊んだ。その際に、直接会話をしながらエチオピアの紹介も行った。また、エチオピアについて掲示した。

<文化祭の様子>



高校での教室で展開



エチオピア留学生が実演



来場した子どもと一緒に体験



会話をしながら交流

【広報展開】

(1) SNS 等での展開

- * 内容：①アフリカ・横浜に関する情報 ②万博訪問に関する情報
③エチオピアの情報

* 媒体：Facebook、Instagram、X、Youtube

* 素材：画像・動画



子どもアドベンチャーカレッジ アフリカ会議開催告知 万博会場訪問の様子



広報よこはま掲載告知 エチオピア大使との交流 サッカー場でのグランド周回

YouTube：万博訪問の様子を動画で紹介



エチオピアの遊び動画

(2) 若者によるアフリカデザイン

*内容：アフリカ大陸型の用紙に各々デザインをしていただき、SNS やチラシ等で発表

*募集：横浜市内の専門学生向けに募集を行った

【アフリカデザイン】

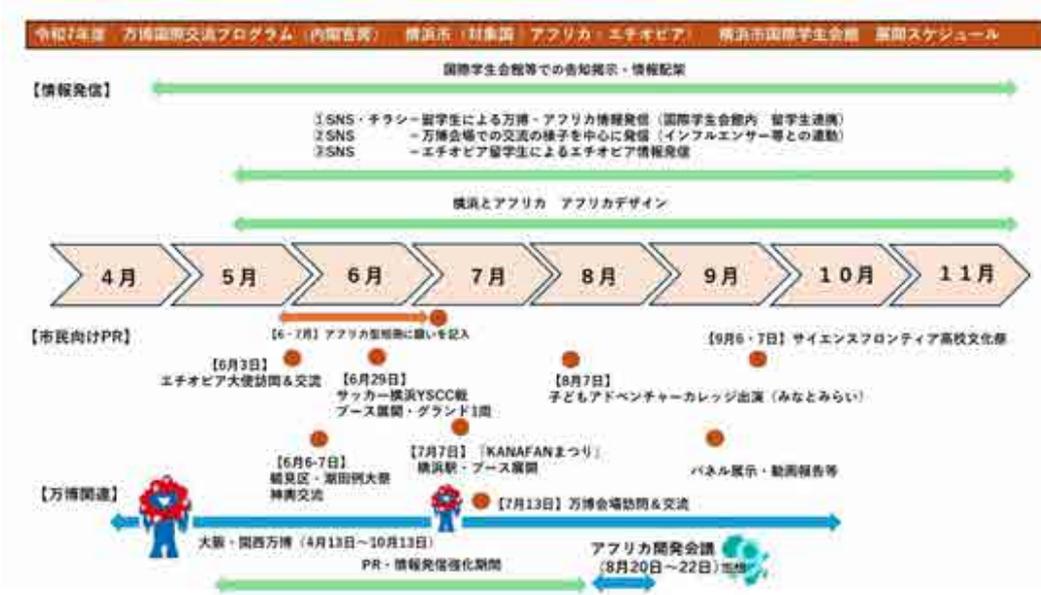


(3) 掲示等による情報・PR

内容：横浜市国際学生会館をはじめとする各所での掲示を行い、周知した。



【スケジュール】



(3) 効果

A:自治体内への波及効果

横浜市での TICAD9 開催前に多くの事業を実施し、アフリカやエチオピアへの関心を高めた。また、エチオピア大使が横浜市国際学生会館を訪問し、高校生との交流を行うことで、思い出に残る異文化体験や国際理解の機会を提供し、次世代の国際人材育成に寄与した。

B:実施により達成できた成果

横浜市とエチオピアの連携強化や友好促進ができ、TICAD9 や「大阪・関西万博」が横浜市民にとって身近な存在になりました。次世代を担う若者の国際理解が深まった。

C:相手国への波及効果

横浜市がエチオピアにとって大切なパートナーになるとともに、継続的な交流事業等、関係を強化できた機会になった。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

エチオピア大使館との関係強化により、今後も大使館関係者訪問や国際交流事業への参加を引き続き継続していく意向をいただいた。また、多くの留学生が居住する横浜市国際学生会館の交流継続にも寄与した。

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

事業に参加した小学生・高校生にとって、普段接することの少ないエチオピア人と直接

顔をあわせて話すことができた経験は、グローバルな視点を持つ大きな機会となった。

(6) 特に良かった点、苦労した点

- ・良かった点

若者がエチオピア人と直接交流することができた。横浜で開催した TICAD9 に向けて集中的に PR 活動ができた。

- ・苦労した点

各所との連絡調整および、セキュリティ対策等

(7) 今後の展開

引き続きエチオピア大使館との連携を継続しながら、横浜市民と留学生の交流拠点である横浜市国際学生会館での多様な交流活動を活かし、展開していく。

(8) 今後の展開における課題

国際理解に関心のある人だけでなく、無関心層にも注目していただけるような多くの展開と効果的な広報がさらに必要である。

3-10 神奈川県横浜市 × ガーナ

(1) 背景と目標等

(1) 背景と目的

横浜市立南高等学校は、昨年度内閣官房の協力を得て、アフリカ、ガーナのアチモタ高校の訪問を受け、授業体験や交流をすることができた。さらに今年は、6名の生徒がガーナのアチモタ高校を訪問することになった。

その事前学習として、ガーナと日本の関係や歴史・文化を学んでいる。その一環として今回、大阪・関西万博のガーナをはじめ、各国の展示を見学し、国際社会の理解を深めたいと考える。

加えて、ガーナ現地訪問では、アチモタ高校での授業体験や現地の生活・文化に直接触れることで、異文化理解をさらに深めるとともに、日本の文化を紹介し、相互理解を促進することを目的とする。現地での交流を通じて、途上国の現状や課題を学び、グローバルな視野を広げる機会とする。

(2) 目標

- ア 横浜の次世代を担う生徒が、アフリカ諸国との交流を通じて多文化共生や異文化に対する理解を深める。
- イ 自身の文化や環境を客観的に見つめ、アイデンティティの確立に寄与する。
- ウ グローバルな視点を持ち国内外で広く世界で活躍できる人材の育成につなげる。
- エ 万博での交流等により、よりアフリカ諸国を身近に感じ、万博等への参加、学びを促進していく。

(2) 事業内容

【万博見学およびガーナの方から話を聞く】

*日時：令和7年7月30日～7月31日

*場所：大阪・関西万博会場

*参加者：合計7名

南高等学校生徒5名 職員2名

(1) 事業名 「万博見学およびガーナの方から話を聞く」

ア スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

本事業を通じてアフリカ・ガーナを知り、学び、交流を促進するため、万博の各国パビリオンを見学。万博のコモンズ B 内ガーナブースを訪問し、ガーナ経済産業省担当官と交流。

イ 体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

駐日ガーナ大使館、横浜市国際局、教育委員会事務局

ウ 内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

- ・日時：令和7年7月30日～7月31日
- ・場所：大阪・関西万博会場（大阪府大阪市此花区夢洲中1丁目）
- ・内容：万博の各国パビリオン見学。ガーナ政府関係者との交流。
- ・参加者：横浜市立南高等学校2年生3人3年生2人 / 南高等学校職員2人

エ 効果

ア) 自治体内への波及効果

- ・高校生5名が参加し、ガーナの方と直接対話をしたことにより、異文化理解が深まり、次世代の国際人育成に寄与した。

イ) 実施により達成できた成果

- ・大使館等の政府関係者との交流を通じて、横浜とガーナの連携強化、友好促進を達成できた。
- ・大阪・関西万博への関心度を高め、ガーナを身近な存在として感じ、国際理解を深めた。

ウ) 相手国への波及効果

- ・今回の訪問を通じ、今まで以上の連携強化ができたとともに、レガシーとして今後も交流を行うきっかけとなった。

万博のコモンズ B 内ガーナブースを訪問、ガーナ経済産業省担当官と会見する様子



【ガーナ現地訪問】

*日時：令和7年11月1日～11月6日

*場所：ガーナ共和国アクラ（首都）および近郊地域

*参加者：合計9名

南高等学校生徒6名、教員2名（英語、社会科）、横浜市国際局職員1名

(1) 事業名 「内閣官房万博国際交流プログラム in Ghana」

ア スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

- 11/1 成田空港 発 22:20 EK319 空路、コトカ国際空港へ
ドバイ国際空港にて乗り継ぎ1回
- 11/2 ドバイ国際空港→コトカ国際空港 12:30 空港着

- ホテルチェックイン 野口英世記念館訪問 棺桶工場見学
- 11/3 8:15 ホテル出発
アチモタ高校訪問、授業体験 17:00 ホテル着
- 11/4 7:00 ホテル出発
カカオ農園見学「Fairafri farm」主催ツアー
JICA ガーナ事務所訪問 18:30 ホテル着
- 11/5 8:30 ホテルチェックアウト
市内視察
在アクラ日本大使館への表敬訪問
16:00 コトカ国際空港着 19:15 コトカ国際空港
- 11/6 6:20 ドバイ国際空港着 8:20 ドバイ国際空港発
22:30 羽田空港着
- イ 体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）
ガーナ大使館、横浜市国際局、教育委員会との連携で実施をした。
- ウ 内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）
- ・日時：令和7年11月1日～11月6日
 - ・場所：ガーナ共和国アクラ（首都）および近郊地域
 - ・内容：アチモタ高校での交流、カカオ農園見学、アクラ市内観光、日本大使館訪問
 - ・参加者：横浜市立南高等学校1年生1人、2年生3人、3年生2人 / 南高等学校職員2人 / 横浜市国際局職員1名
- エ 効果
- ア) 自治体内への波及効果
- ・アフリカの国を訪問し、現地の学校と交流することが可能であることを示した。
 - ・事前の学びを、現地で生かすということが大事ということを伝えたい。
- イ) 実施により達成できた成果
- ・参加生徒のグローバルな視野を、大きく広げることができた。
 - ・異なる言語や文化に触れ、日本の文化も紹介することができた。
 - ・途上国の現実に触れ、日ごろの日本での生活を見つめなおすことができた。
- ウ) 相手国への波及効果
- ・遠い国としての日本、そして横浜を身近に感じる事ができた。

ガーナ研修の様子



野口英世記念館



アチモタ高校授業体験



カカオ農園見学

(3) 事業の目標に対する成果

横浜市内の高校生にとって、普段接する機会のないガーナ人とのリアルな交流は、国際理解や多文化共生に大きく寄与し、グローバルな次世代育成に繋がった。

異文化に対する理解が深まり、人種や民族の違いを感じることで、日本人としてのアイデンティティを意識する機会となった。

また、生徒一人ひとりが国際的な仕事に挑戦したいという気持ちを強くし、万博での交流を含めて、アフリカのみならず世界について多くのことを学ぶことができた。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与（閉会後の事業継続性・相手国との関係性評価）

大阪・関西万博を契機に始まった本事業は、単なる一過性の交流にとどまらず、ガーナのアチモタ高校との継続的な関係構築を実現した。

駐日ガーナ大使館との関係強化により、今後も大使館関係者訪問や事業への参加を継続していく意向をいただいている。

さらに、学校間交流や横浜市での発表を通じて、地域社会に国際理解を広げ、万博閉会後も持続的なレガシーを創出する取り組みとなっている。

(5) 子どもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

参加した高校生にとって、ガーナ人と直接顔を合わせて話す経験は、将来に向けてグローバルな視点を持つ大きな機会となった。

聞き取りにくい英語に対応しようと努力し、多くのことを伝える経験を積むことで、コミュニケーション力と自信を高めることができた。

また、途上国の食事やインフラ、市井の暮らしに触れ、異なる文化を学ぶことで、世界

の多様性を理解する力を養うことができた。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

良かった点

- ・英語で直接質問をすることができ、多くの知識と自信を得られた。
- ・専用車で安心して移動できた。食事は衛生的で美味しく、食文化の豊かさを感じることができた。
- ・治安は予想より良く、ガーナ人の性格も穏やかで親しみやすかった。

苦勞した点

- ・各所との連絡やスケジュール調整、セキュリティ対策に苦勞した。
- ・現地との意思疎通が難しく、ホテルやアチモタ高校にこちらの意向が正確に伝わらない場面があった。
- ・農場訪問時、道路渋滞や交通マナーなど、交通機関の課題を実感した。

(7) 今後の展開

令和7年12月に南高等学校の終業式で訪問報告を行い、模造紙でポスターを作成して校内エントランスに掲示する。

令和8年3月には横浜市役所アトリウムで、横浜商業高校のケニア訪問とともに今回の事業を発表する。

(8) 今後の展開における課題

今後もアフリカ諸国との交流を継続するためには、今回の事業を広く紹介し、賛同する市民や参加希望者を増やすことが必要である。

アチモタ高校側からも「学校同士の交流を続けたい」という意向をいただいております、学校全体で多文化共生に向けた取り組みをさらに広げていくことが課題である。

3-1 1 神奈川県横浜市 × ケニア

(1) 背景と目標等

1) 背景と目的

横浜市は過去、開催されたアフリカ開発会議（TICAD）を契機とし、アフリカとの交流を始めた。令和7年に開催される「TICAD9」に向けて、これまで築いてきたアフリカとの友好関係を継続し「アフリカに一番近い都市」として、次世代を中心に横浜市民の皆様がアフリカ各国と交流する機会を設けていく。そして、本事業の実施を「TICAD9」、そして令和9年の「GREEN×EXPO 2027」につなげるとともに、より国際的で多様性に富んだ都市を目指す。

2) 目標

- ①横浜の次世代を担う子どもや学生が、アフリカ諸国との交流を通じて多文化共生や異文化に対する理解を深める
- ②自身の文化や環境を客観的に見つめ、アイデンティティの確立に寄与する
- ③グローバルな視点を持ち国内外で広く世界で活躍できる人材の育成につなげ、「横浜で育ってよかった。」と思える市民が増える
- ④万博での交流等により、よりアフリカ諸国を身近に感じ、万博等への参加、学びを促進していく

(2) 事業内容

1) 事業名 【ケニア共和国次席とアライアンス高校生・横浜商業高校生との交流】

①スケジュール

本事業を通して横浜市立高校生にケニア共和国を知り、学び、交流を行うことを促進するため、アーサー A.アンダビ駐日ケニア共和国大使館次席とケニア共和国からアライアンス高校の生徒及び教師が横浜市立横浜商業高等学校を訪問し、横浜で学ぶ高校生と対話を行う事業を計画し、実施した。

②体制

駐日ケニア共和国大使館、横浜市国際局、横浜市教育委員会、ケニア共和国アライアンス高校との連携で実施をした。アライアンス高校の生徒、教員のビザ申請や発券については在ケニア日本国大使館にも協力いただいた。

③内容

- ・日時：令和7年8月4日 9:00-10:30
- ・場所：横浜市立横浜商業高等学校（横浜市南区南太田2丁目30-1）
- ・内容：アーサー A.アンダビ駐日ケニア共和国大使館次席、アライアンス高校から生徒2名、教員1名に横浜商業高等学校を訪問していただき、校長室にて学校長から

感謝と友好関係の継続についての意を述べ、その後は教室で2月のケニア共和国派遣プログラムに参加をした横浜市立横浜商業高等学校生徒5名により研修プログラムの報告会を英語で行った。プレゼンテーションの後はアライアンス高校から来校した3名を校舎内の教室、施設へ案内し、弓道部、野球部をはじめとする部活動見学を行った。その後は教室で横浜商業高校や日本の都道府県に関するクイズを出題して交流を深めた。

・参加者：17名

ケニア共和国大使館 アーサーA.アンダンビ次席/菅井河奈子ツーリズムアシスタント
横浜商業高等学校学校 大山 仁彦校長/小島 寛子主幹教諭/川原 純子教諭
横浜商業高等学校生徒 10名/横浜市国際局関係者 2名

④効果

A:自治体内への波及効果

- ・横浜市で8月に開催される TICAD9 を前に、アフリカおよびケニア共和国に関する関心と気運を盛り上げることができた。
- ・横浜市民へケニア共和国を知る機会を作った。
- ・横浜市内で学ぶ高校生10名が参加し、大使次席とアライアンス高校生と直接対話をしたことにより、異文化理解の機会を提供し、次世代の国際人育成に寄与した。

B:実施により達成できた成果

- ・横浜とケニア共和国の連携強化、友好促進を達成できた。
- ・TICAD9 開催への関心度、大阪・関西万博への関心度を高めた。
- ・次世代の若者や留学生との交流を通じて、ケニア共和国を身近な存在として感じ、国際理解を深めた。

C:相手国への波及効果

- ・大使次席とケニア共和国の高校生と教員が直接横浜市に訪問し、次世代の若者との交流をすることで日本文化や若者層への関心を高めた。
- ・今回の訪問を通じ、今まで以上の連携強化ができたとともに、レガシーとして今後も交流を行うきっかけとなった。

⑤事業の目標に対する成果

横浜市内の高校生にとって普段接する機会のないケニア共和国の高校生や駐日ケニア共和国大使館関係者との交流は国際理解・多文化共生に寄与し、グローバルな次世代育成につながった。大阪・関西万博への関心度も高まり、万博会場での交流にも結びついた。

⑥大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

駐日ケニア共和国大使館との関係強化により、今後も大使館関係者訪問や事業への

参加等を引き続き継続していく意向をいただき、レガシー創造へ寄与した。また、ケニア共和国のアライアンス高校との交流継続にも寄与した。

⑦子どもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

参加した高校生にとって、ケニア共和国次席やアライアンス高校生と直接顔をあわせて話すことができた経験は、将来に向けてのグローバルな視点を持つ大きな機会となった。

⑧特に良かった点、苦労した点

良かった点

横浜の高校生が在日ケニア共和国大使館の大使次席及びケニア共和国の高校生と対話、交流する機会を提供できたことは貴重な事業となった。

苦労した点

各所との連絡やスケジュール調整等に苦労した。

⑨今後の展開

引き続き駐日ケニア共和国大使館との連携を継続しながら、アライアンス高校と横浜市立高校との友好関係を維持し、11月の派遣事業でも連携していく。

⑩今後の展開における課題

国際理解に関心のある生徒職員だけでなく、横浜商業高校の全校生徒・職員に向けてプログラムの内容について発信、交流の機会をつくることでケニア共和国についての理解が深まり、多文化共生につながると思う。

【アーサー駐日ケニア共和国大使次席、アライアンス高校生徒・引率教員を迎え、校長室で行った歓迎会の様子】



【2月のケニア共和国派遣プログラム研修内容を英語でプレゼンテーションしている様子】
【横浜商業高校や日本の情報をクイズ形式で出題、交流を図る様子】



2)事業名 【ケニア共和国・アライアンス高校生招致及び横浜商業高校生徒と大阪・関西万博派遣】

①スケジュール

本事業を通して横浜市立高校生がケニア共和国を知り、学び、交流を行うことを促進するため、ケニア共和国からアライアンス高校の生徒及び引率教員とともに大阪・関西万博を訪問した。また、万博訪問を通して、子どもたちの未来を創る意欲や想像力の喚起、地球規模の課題に対する意識の育成、多文化理解・国際感覚の育成を図るための事業を計画し、実施した。

②体制

駐日ケニア共和国大使館、横浜市国際局、横浜市教育委員会、ケニア共和国アライアンス高校との連携で実施をした。アライアンス高校の生徒、教員のビザ申請や発券については在ケニア日本大使館にも協力いただいた。

③内容

アライアンス高校から来日した生徒・教員とともに大阪・関西万博を訪問した。ケニア共和国の展示に立ち寄り、責任者のピーター氏とスタッフによりセレモニーが開かれ、記念品の贈呈と記念写真を撮影した。万博訪問前後には大阪市内散策をして日本の歴史、伝統

文化や食文化について経験してもらう機会となった。

- ・日時：令和7年8月3日～6日
- ・場所：大阪市内及び大阪・関西万博
- ・参加者：10名（アライアンス高校生2名・引率教員1名/横浜商業高校生徒5名・引率教員2名）

④ 効果

A:自治体内への波及効果

- ・横浜市で8月に開催される TICAD9 を前に、アフリカおよびケニア共和国に関する関心と気運を盛り上げることができた。
- ・横浜市民へケニア共和国を知る機会を作った。
- ・横浜市内で学ぶ高校生5名とアライアンス高校の高校生と一緒に大阪・関西万博を訪問することを通して多文化共生の重要性を認識する機会を提供し、次世代の国際人育成に寄与した。

B:実施により達成できた成果

- ・横浜とケニア共和国の連携強化、友好促進を達成できた。
- ・TICAD9 開催への関心度、国際理解、国際協調の意識を高めた。
- ・次世代の若者や留学生との交流を通じて、ケニア共和国が身近な存在として感じ、国際理解を深めた。

C:相手国への波及効果

- ・ケニア共和国の高校生と教員が横浜市内の高校生と3日間を過ごすことで、文化・生活習慣・社会の価値観の違いに気づく機会となった。技術や交通網の発展、日本人のマナーや礼儀、ホスピタリティ、食文化などを体験してもらうことができた。
- ・今回の訪問を通じ、今まで以上の連携強化ができたとともに、レガシーとして今後も交流を行うきっかけとなった。

⑤事業の目標に対する成果

横浜市内の高校生にとって普段接する機会のないケニア共和国の高校生、万博関係者とのリアルな経験は国際理解・多文化共生に寄与し、グローバルな次世代育成につながりました。大阪・関西万博会場での交流にも結びついた。

⑥大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

大阪・関西万博を訪問し、ケニア共和国の展示を見学し、展示に関わる職員と対話をしたことでレガシー創造へ寄与した。また、ケニア共和国のアライアンス高校との交流継続にも寄与した。

⑦子どもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

大阪・関西万博を訪問し、多様な国・地域の展示や人々との交流を通して、異なる文化や価値観を尊重する態度が育まれた。

⑧特に良かった点、苦労した点

良かった点

横浜市立高校生がケニア共和国の高校生と共に大阪・関西万博を訪問したことは「未

来を自ら創造する主体」としての意識を育てる絶好の機会となった。探究心・国際感覚・課題解決力など、これからの社会に求められる資質・能力を育む貴重な事業となった。

苦勞した点

大阪・関西万博に向かうための交通手段を事前に調べることに、見学するパビリオンの予約が取れなかったこと、日本に到着するまでの在ケニア大使館を通じた現地とのやりとりに苦勞した。

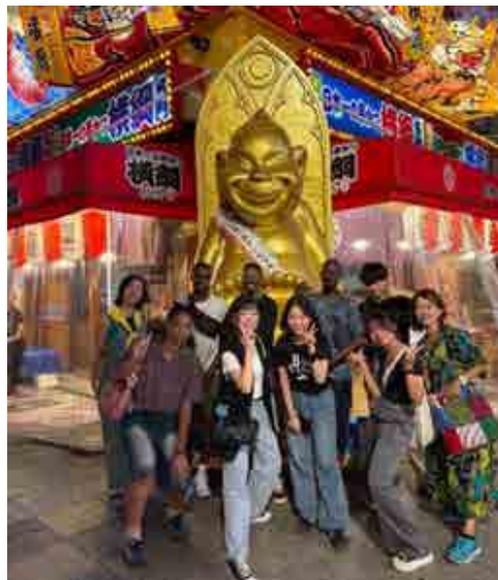
⑨今後の展開

アライアンス高校との友好関係を維持し、11月の派遣事業でも連携していく。

⑩今後の展開における課題

国際理解に関心のある生徒職員だけでなく、横浜商業高校の全校生徒・職員に向けてプログラムの内容について発信、交流の機会をつくることでケニア共和国についての理解が深まり、多文化共生につながると思う。

【大阪市内散策の様子 ハギレプロジェクトでお世話になる SIKUNJEMA の代表加藤淳子さんと合流】



【大阪・関西万博を訪問 コモンズ A のケニアパビリオンの展示を見学した】



【ケニアパビリオンの紹介、説明を受ける様子】



【昼食時の様子】



【サウジアラビア館に並ぶ間に日本の手遊びを紹介して交流する様子】



【ケニア 大阪・関西万博の Facebook にも掲載された記事】



3)事業名 【ケニア共和国への横浜商業高校生派遣による次世代交流】

①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

8月に来日したケニア共和国アライアンス高校の交流事業（事業名【ケニア共和国次席とアライアンス高校生・横浜商業高校生との交流】参照）の計画を調整し、それと並行して国内外の関係者と実施計画を調整。最終的に11月22日から11月28日にかけて、横浜商業高校生がケニア共和国を訪問した。

- ・11月22日（土） 00:05 羽田発（EK313）、ドバイ経由（EK719）
14:40 ケニア着、市内視察・行程レクチャー
- ・11月23日（日） キベラスラム関連交流、市内視察
- ・11月24日（月） 在ケニア日本国大使館表敬、「シロアムの園」（障害児施設）視察
- ・11月25日（火） 孤児院視察
- ・11月26日（水） 支援先の村訪問
- ・11月27日（木） アライアンス高校生徒との交流、女性活躍支援団体視察
22:45 ケニア発（EK722）、ドバイ経由
- ・11月28日（金） 22:30 羽田着（EK312）

②体制

駐日ケニア共和国大使館、在ケニア日本国大使館、横浜市教育委員会事務局、横浜市立横浜商業高校、

ケニア共和国アライアンス高校、連携企業（シクンジェマ社）

③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

- ・日時：令和7年11月22日（土）から11月28日（金）まで
- ・場所：ケニア共和国 ナイロビ（首都）およびナイロビ校外3か所
- ・取組：現地高校生等との交流、現地施設視察（障がい児、孤児）、支援先の村訪問、在ケニア日本国大使館表敬等
- ・人数：12名
- ・市立横浜商業高等学校 生徒8名（男子1名、女子7名 / 高二6名、高一2名）
- ・市立横浜商業高等学校 教員2名（英語教員）
- ・国際局職員 1名
- ・その他（添乗兼現地案内） 1名
- ・報道対応：なし

④効果

A:自治体内への波及効果

- ・横浜市民へケニア共和国を知る機会を作った。
- ・横浜市内で学ぶ高校生8名とケニア共和国で暮らす多様な人々との交流を通して多文化共生の重要性を認識する機会を提供し、次世代の国際人育成に寄与した。

B:実施により達成できた成果

- ・横浜とケニア共和国の連携強化、友好促進を達成できた。
- ・次世代の若者や留学生との交流を通じて、ケニア共和国を身近な存在として感じ、国際理解を深めた。

C:相手国への波及効果

- ・ケニア共和国の高校生と教員が横浜市内の高校生と再会することで、日本の国に対する興味を深めるきっかけとなった。共に時間を過ごすことで、文化・生活習慣・社会の価値観の違いに気づく機会ともなった。
- ・今回の訪問を通じ、今まで以上の連携強化ができたとともに、レガシーとして今後も交流を行うきっかけとなった。

⑤事業の目標に対する成果

横浜市内の高校生にとって普段接する機会のないケニア共和国のこどもたち、村の人々、そこで働く日本人とのリアルな経験は、国際理解・多文化共生に寄与し、グローバルな次世代育成につながった。大阪・関西万博会場を共に訪れたアライアンス高校の生徒との再会は、今後の交流の継続にも結びついた。

⑥大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

大阪・関西万博を共に訪問した、ケニア共和国のアライアンス高校との交流継続したことでレガシー創造へ寄与した。また、アライアンス高校が学校として日本を訪問するプログラムを計画しているということからも、交流が大阪万博閉会をも継続する可能性を維持したという点でレガシー創造に寄与した。

⑦こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

ケニア共和国に対するイメージが渡航前と渡航後で大きく良い方向に変化したこと。自らの五感を使って「体験」したことにより、自分で体験することの重要性に改めて気づき、これからもインターネットに頼らず自ら現地に赴いてみたいと感じたことを振り返りシートからも読み取ることができた。

⑧特に良かった点、苦労した点

良かった点

- ・ケニア共和国で活躍する日本人の方と行動を共にしたり、その方のお話を直接聞くことができたことは、グローバルな視点を持ち国内外で広く世界で活躍できる人材の育成につながったと実感できた。

苦労した点

- ・体調不良の生徒が出たときの対応には、引率教員だけでは難しく、SIKUNJEMA 現地スタッフの方のおかげで病院にも連れていくことができた。

⑨今後の展開

今回交流することができたアライアンス高校が、日本への渡航を計画している。実現

する際には、横浜における交流校として、一日体験授業や横浜散策などを提案していく予定である。その先には大使館及び横浜市国際局との連携も重要なので、引き続き情報共有をしていく。横浜商業高校では、引き続き SIKUNJEMA 様と連携をとり、ハギレプロジェクトを継続する。また、オンラインなどを通じてアライアンス高校と交流が継続できるよう計画していく。

⑩今後の展開における課題

学校だけでは有意義なプログラムであっても継続が不可能である。今回のように、生徒が直接「経験」できるプログラムを継続するためには、国からの補助と、自治体（特に横浜市国際局）の協力が必須である。2027年には横浜市で GREEN×EXPO 2027 が開催される。その際には、是非今回のような交流事業が行われることを期待する。

【アートスクールを営むムディボさんとの交流の様子】



【アートスクールに通うキベラスラムのこどもたちとの交流の様子】



【シロアムの園にて1：施設を運営している公文様からのお話と施設説明】



【シロアムの園にて2：こどもたちとの交流と昼食補助】



【村での様子1：サイザルでコースター編み】



【村の様子2：昼食作り】



【村の様子3：村の人の家訪問】



【アライアンス高校との交流】



3-1 2 神奈川県横浜市 × タンザニア

(1) 背景と目標等

1)背景と目的

横浜市は過去のアフリカ開発会議（TICAD）の横浜開催を通じて、アフリカとの交流を続けてきた。

令和7年に開催される「TICAD9」に向けて、これまで築いてきたアフリカとの友好関係を継続し「アフリカに一番近い都市」

として、次世代を中心に横浜市民の皆様がアフリカ各国と交流する機会を設けていく。そして、本事業の実施を「TICAD9」、そして令和9年の「GREEN×EXPO 2027」につなげるとともに、より国際的で多様性に富んだ都市を目指す。

2)目標

- ①横浜の次世代を担う子どもや学生が、アフリカ諸国との交流を通じて多文化共生や異文化に対する理解を深める
- ②自身の文化や環境を客観的に見つめ、アイデンティティの確立に寄与する
- ③グローバルな視点を持ち国内外で広く世界で活躍できる人材の育成につなげ、「横浜で育ってよかった。」と思える市民が増える
- ④万博での交流等により、よりアフリカ諸国を身近に感じ、万博等への参加、学びを促進していく

(2) 事業内容

【タンザニアと横浜の次世代交流】

* 日時：令和7年9月30日(火)-10月5日(日)

* 場所：

9/30 横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校

10/1 横浜 DeNA ベイスターズ (DOCK OF BAYSTARS YOKOSUKA)

10/2 大阪万博会場/ 万博内コモンスペースタンザニアブース

10/3 在日本タンザニア連合共和国大使館、東京農業大学、慶應義塾高等学校

10/4 独立行政法人国際協力機構（JICA）横浜センター

10/5 神奈川県立横浜商業高等学校

* 来日メンバー：

- ・タンザニア野球/ソフトボールチーム：8名（引率のタンザニア野球ソフト振興機構 ナチワ氏ほか、児童生徒7名）

* 本プロジェクト参加者：合計 620 名

- ・横浜市立横浜サイエンスフロンティア中学高等学校交流：学校関係者 10 名(校長藤本貴也氏、以下教諭 9 名)生徒約 300 名(高校 1 年生 240 名、有志学生 60 名)
- ・横浜 DeNA ベイスターズ交流：選手・コーチ 40 名
- ・大阪万博会タンザニアブース交流:タンザニア大使館 Leopold Shayo 氏 1 名
- ・在日本タンザニア連合共和国大使館表敬訪問：大使館職員 5 名
(イシェンゴマ氏、チコロongo氏、チュク氏、ムンザヴァ氏、白井氏)
- ・東京農業大学交流：学校関係者 3 名(グローバル連携センター事務部長後藤氏、ムワイケンダ氏、他事務局 1 名)、生徒 7 名(日本人学生 4 名、タンザニア留学生 3 名)
- ・慶應義塾高等学校野球部交流：学校関係者 4 名(野球部監督森林貴彦氏以下教諭 3 名)、野球部部員 70 名
- ・アフリカイベント(会場 JICA 横浜)：事務局側関係者 3 名、イベントブース参加者 12 名(AfriMedico3 名、一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構 6 名、MOYOMOYO AFRICA 2 名、タンザニア大使館 3 名)、イベント講演登壇者 7 名(AfriMedico/広報藤井氏、一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構/代表友成氏、MOYOMOYO AFRICA/代表野坂氏、タンザニア大使館/上席行政官白井氏、Ashe/代表鶴本氏、MAAHA CHOCOLATE/代表田口氏、筑波大学/教授田氏)
イベント来場 72 名：日本アフリカ友好横浜市議員連盟会長佐藤祐文氏、横浜市会副議長尾崎太氏、ほか一般参加者数 70 名
- ・神奈川県立横浜商業高校野球部及び文化祭交流：学校関係者 6 名(校長大山仁彦氏、以下教諭 5 名)、
生徒 80 名(野球部/スポーツマネジメント科生徒 45 名、国際学科生徒 5 名、ほか文化祭にて交流した生徒 30 名)

1)事業名 「タンザニアを中心としたアフリカと日本の子どもたちの相互交流」

①スケジュール(交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過)

本事業を通じタンザニアと横浜市の次世代を担う若者(学生)の交流を実現し、同時に、この次世代交流を横浜市民に広く知ってもらうことで、タンザニアやアフリカ地域への親近感と興味関心を持ってもらうため、令和 6 年度事業から継続した取り組みとして実施。

令和 7 年度は、3 月から在日タンザニア大使館や現地の学校関係者と連携をとりながら企画と準備を開始。令和 7 年 9 月 30 日(火)-10 月 5 日(日)の日程でタンザニアから学生を招へいするスケジュールを計画し、5-6 月に具体的内容検討、宿泊先やその他手配、6-7 月で訪日学生の選定と航空券の検討、7-9 月には学校をはじめとする交流予定の各団体との詳細内容調整等を実施。交流予定の団体、在日タンザニア大使館への訪問や対面での打ち合わせ、メールやオンライン等で打ち合わせを実施。

なお、訪日するタンザニアメンバーの選定にあたっては、「国際交流に興味関心があること」「具体的に横浜市でどんな交流がしたいのか自分の言葉で言えること」「(野球交流があるため)野球のスキルが一定以上あること」「家族の了承が得られること」

の軸で選出した。

②体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

主な協力団体

- ・株式会社 Cattle：2名（代表荒井育恵氏、副代表橋本知甫美氏）
- ・一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構：10名（運営補助/通訳として代表友成晋也氏、以下9名）
- ・読売新聞横浜支局：記者1名
- ・神奈川新聞：記者1名
- ・その他、在日本タンザニア連合共和国大使館、独立行政法人国際協力機構（JICA）横浜センター等

③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

●9/30(火)

- ・場所：9/30 横浜市立横浜サイエンスフロンティア中学高等学校
- ・内容：タンザニア学生と横浜サイエンスフロンティア中学高等学校の生徒たちで以下の交流を実施
 - └ 学年を超えた有志による学食ランチ&トーク交流、高校1年の地理の授業にてタンザニアについて双方に学び合う交流授業、横浜サイエンスフロンティア中学高校の特色でもあるテーマ別研究をめぐる交流、実験室や天文台など学習施設の生徒による紹介交流、ソフトボールの授業参加交流、大ホールにてタンザニアの歌とダンスを通じた交流
- ・参加者：学校関係者10名（校長藤本貴也氏、以下教諭9名）、生徒約300名（高校1年生240名、有志学生60名）、タンザニア学生8名（7名+引率1名）、横浜市国際局、株式会社 Cattle、一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構
- ・報道対応：読売新聞取材、神奈川新聞取材

●10/1(水)

- ・場所：横浜 DeNA ベイスターズ（DOCK OF BAYSTARS YOKOSUKA）
- ・内容：横浜 DeNA ベイスターズの選手と野球の指導等を通して交流した。
- ・参加者：選手・コーチ40名、タンザニア学生8名（7名+引率1名）、株式会社 Cattle、一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構
- ・報道対応：なし

●10/2(木)

- ・場所：大阪万博会場/ 万博内コモンスペースタンザニアブース
- ・内容：大阪万博のタンザニアブースを訪問し、ブースの職員と交流。また、コモンズ内展示の各国ブースを周った。また、万博を訪れていた大阪現地の中高生と万博会場内でコミ

コミュニケーションをとる場面もあり、タンザニアについて紹介した。

- ・参加者：タンザニア大使館 Leopold Shayo 氏 1名、タンザニア学生8名（7名+引率1名）、横浜市国際局、株式会社 Cattle、一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構
- ・報道対応：なし

●10/3(金)

- ・場所：在日本タンザニア連合共和国大使館、東京農業大学、慶應義塾高等学校
- ・内容：在日本タンザニア連合共和国大使館：表敬訪問
東京農業大学（※）：タンザニアからの留学生から日本（を始め海外に）留学する意義や日本での暮らしや学び、将来の展望についてヒアリング。またタンザニア来訪歴ある日本人学生との交流を通して、日本人から見たタンザニアを学び見聞を広めた。

※タンザニアのソコイネ大学との連携と共同研究が有名で、タンザニアとの交換留学が盛ん

慶應義塾高等学校：前年度令和6年にオンライン交流した野球部の生徒たちとの野球練習を通じた交流。

- ・参加者：学校関係者4名（野球部監督森林貴彦氏以下教諭3名）、野球部部員70名、タンザニア学生8名（7名+引率1名）、横浜市国際局、株式会社 Cattle、一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構
- ・報道対応：読売新聞取材

●10/4(土)

- ・場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）横浜センター
- ・内容：「体験しよう！アフリカとキャリアの交差点。」と題し、タンザニア/アフリカで活躍する日本人のトークイベントと、タンザニア選手たちと一緒に楽しめるベースボールファイブが体験できるイベントを実施。また、タンザニア/アフリカの文物を紹介するブースコーナーを設置。

- ・参加者：日本アフリカ友好横浜市議員連盟会長佐藤祐文氏、横浜市会副議長尾崎太氏、一般来場者数70名

JICA 横浜事務局側関係者3名、イベントブース参加者12名（AfriMedico3名、一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構6名、MOYOMOYO AFRICA2名、タンザニア大使館3名）、イベント講演登壇者7名（AfriMedico/広報藤井氏、一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構/代表友成氏、MOYOMOYO AFRICA/代表野坂氏、タンザニア大使館/上席行政官白井氏、Ashe/代表鶴本氏、MAAHA CHOCOLATE/代表田口氏、筑波大学/教授田氏）

タンザニア学生8名（7名+引率1名）、横浜市国際局、株式会社 Cattle、一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構

- ・報道対応：読売新聞取材

●10/5(日)

- ・場所：神奈川県立横浜商業高等学校
- ・内容：野球部とスポーツマネジメント科の生徒と日本式の野球を体験。また、文化祭で国際学科の生徒などと交流。
- ・参加者：学校関係者 6 名（校長大山仁彦氏、以下教諭 5 名）、生徒 80 名（野球部/スポーツマネジメント科生徒 45 名、国際学科生徒 5 名、ほか文化祭にて交流した生徒 30 名）タンザニア学生 8 名（7 名＋引率 1 名）、横浜市国際局、株式会社 Cattle、一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構
- ・報道対応：読売新聞取材、横浜新聞取材

④効果

A:自治体内への波及効果

- ・イベントを通して、横浜市とタンザニアの次世代交流だけでなく、広く市民に取り組みを告知し実際に触れ合う機会を設けることができた。
- ・新聞、広報誌、SNS 等での広報を通じて、横浜市民へ情報を届けることができ、タンザニアを知る機会を作った。
- ・本プロジェクト全体を通して横浜市内で学ぶ高校生合計 450 名が国際交流を体験した。

B:実施により達成できた成果

- ・横浜とタンザニアの連携強化、友好促進を達成できた。
- ・横浜市のアフリカとの取り組みの一環として、TICAD9 に続く次世代間交流として、大阪・関西万博への関心を高めることができた。
- ・横浜とタンザニアの同世代の学生たちやタンザニアからの留学生が、実際に会って食事したり、会話したり、意見交換したり、ともに野球で汗を流したり、文化祭を一緒に楽しむ経験をすることで、単に書籍やネットから得られる情報からではなく実感を伴った体験として、タンザニアに対する親近感や興味、ひいてはタンザニアだけでなくアフリカ地域への関心を喚起するきっかけを作ることができた。

C:相手国への波及効果

- ・タンザニア学生による在日タンザニア大使館への表敬訪問、タンザニア大使館としてのイベントブースへの出展と市民交流を通して、横浜市との協力関係を強めることができた。
- ・東京農業大学のタンザニア留学生団体（ソコイネ大学中心）とのつながりができ、農業分野での連携の検討など新たな協力関係の芽が生まれている。

(3) 事業の目標に対する成果

横浜市内の高校生にとって普段接する機会のないタンザニアの同世代とのリアルな交

流を経て、自分たちのアイデンティティーを振り返る機会にもなり、またどのように関わっていけばいいのかなど交流をきっかけに多くのことに気付く機会となった。タンザニアに行ってみたい、もっと英語を学びたい、アフリカのニュースを知りたいと発言する学生もあり、国際理解・多文化共生の面で次世代育成につながった。イベントに参加した市民の方からは、アフリカを始め諸外国と関係する取り組みやイベントを積極的に行っている横浜に住んでいることが誇らしい、万博にも行ってみたいと言った声が聞かれ、万博への関心度を高めることができた。

また、参加したタンザニアの学生からは、レベルの高い学習内容と設備、友好的な受け入れ、タンザニアへ興味を寄せてくれることへの喜びの声などが聞かれ、今後の自分のキャリアについても熱く語ってくれる学生もいた。総じて本当に素晴らしい体験であったとのことでかけがえのない経験を提供できた。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

在日タンザニア大使館や横浜市立学校との関係強化による今後の連携可能性

(5) 子どもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

参加した高校生にとって、普段接することのないタンザニアの同世代の学生と直接顔をあわせて話すことができた経験は、異文化理解の面での発見はもちろんのこと、比較の中で自身を振り返ったり改めてアイデンティティーを見直すきっかけになったと考える。また、違いだけでなく、「思ったほど違わないこと」に気付けたことや同じ地球市民として協力しあっていくことの必要性を感じたことも大きな成果であった。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

1)良かった点

タンザニア学生が横浜を来訪し、450名規模で横浜の高校生と直接接する機会を創出できたこと。

2)苦勞した点

セキュリティ面や移動の困難さ、特に大阪万博訪問における移動手段やチケット手配など各種手続きが大変であったこと。

(7) 今後の展開

引き続きタンザニア大使館や今回訪問した各学校との連携を継続しながら、次世代交流の機会等を創出していく。

(8) 今後の展開における課題

より多くの横浜市民にタンザニア/アフリカを知ってもらい、継続的に興味関心を持ってもらう働きかけをしていくこと。現時点で関心の薄い層に対して、興味喚起を促すこと。

【タンザニア学生が日本の同世代の若者と交流した様子（慶應義塾高校）】

●慶應義塾高校（野球部）



↑野球部の練習に参加、チームワーク、エンジョイベースボールなど、プレーだけでなく考え方についても意見交換

【大阪万博訪問の様子】



↑万博のタンザニアブースを訪問、来場者とも交流

【横浜 DeNA ベイスターズ訪問の様子】

↑選手たちと交流、野球指導を受けたり外国人として日本でプレーする楽しさ大変さなどを聞く



↑

【在日タンザニア共和国大使館訪問の様子】



↑ 今回の訪日の感想、学び、今後の展望などを大使館の方々に報告

【東京農業大学交流の様子】



↑ タンザニアからの留学生、タンザニア/アフリカに行ったことのある日本人生徒との交流。日本での生活、学びや研究の中身、タンザニア地域とのつながりなどを聞き、自身のキャリアを考える機会になった。

【イベント「体験しよう！アフリカとキャリアの交差点。」の様子】



↑タンザニア大使館ブース。横浜市会議員の佐藤祐文氏、尾崎太氏も来場し横浜市とタンザニアの友好関係が深まった。



↑トークブースではアフリカで活躍する日本人の話や、日本で暮らすタンザニア人の話などを紹介。



↑ベースボールファイブでは老若男女皆で交流を楽しんだ

※本報告書内の画像 無断転載不可

●読売新聞記事 2025 年 10 月 15 日（水）朝刊 ※新聞記事のため掲載不可

3-13 神奈川県大磯町 × ウガンダ

(1) 背景と目標

1) 背景と目的

明治・近現代期に多くの政財界人が居を構え、日本、世界をリードした地であることから、こどもたちが国際感覚に触れ、刺激を得ることで、こどもたちの“芽生え”の“きっかけ”とすることを目的に、令和6年12月に「大磯こどもサミット」を開催し、500人を超える方々にご参加いただいた。

楽しく学び、こどもたちが主体的に自身の意見を発信でき「今何をすべきか」をみんなで考える場となったこの取組みを一過性にせず、こどもたちの「知りたい・学びたい・触れ感じたい」という意識をさらに発展させ継続”できる場をつくることを目的とする。

■目標

- ・ こどもたちが自ら考え、自分の意見を発信できる場づくり
- ・ 「こどもの権利」や「SDGs」に対する正しい認識や理解を得る機会づくり
- ・ アフリカ・ウガンダ共和国を中心とした国際交流の機会づくり

■テーマ

みらいわくわく 大磯から世界へ羽ばたこう

■交流相手国 ウガンダ共和国

来日ウガンダ人

KIBIRIGE DICK (キビルゲ・ディック) (右)

ニックネーム：ディクソン

- ・ ウガンダのマケレレ大学社会科学専攻を卒業
- ・ コミュニティ開発、マネジメント、公衆衛生のディプロマを取得
- ・ 2001年 世界銀行にて通信教育でコミュニティ社会保護コース修了
- ・ 2005年 JEDOVC※に参画し現在まで活動を続ける



BIRABWA MAGARET (ビラブワ・マーガレット) (左)

ニックネーム：マーガレット

- ・ JEDOVC の専門的なコミュニティ衛生・サニテーション教育担当

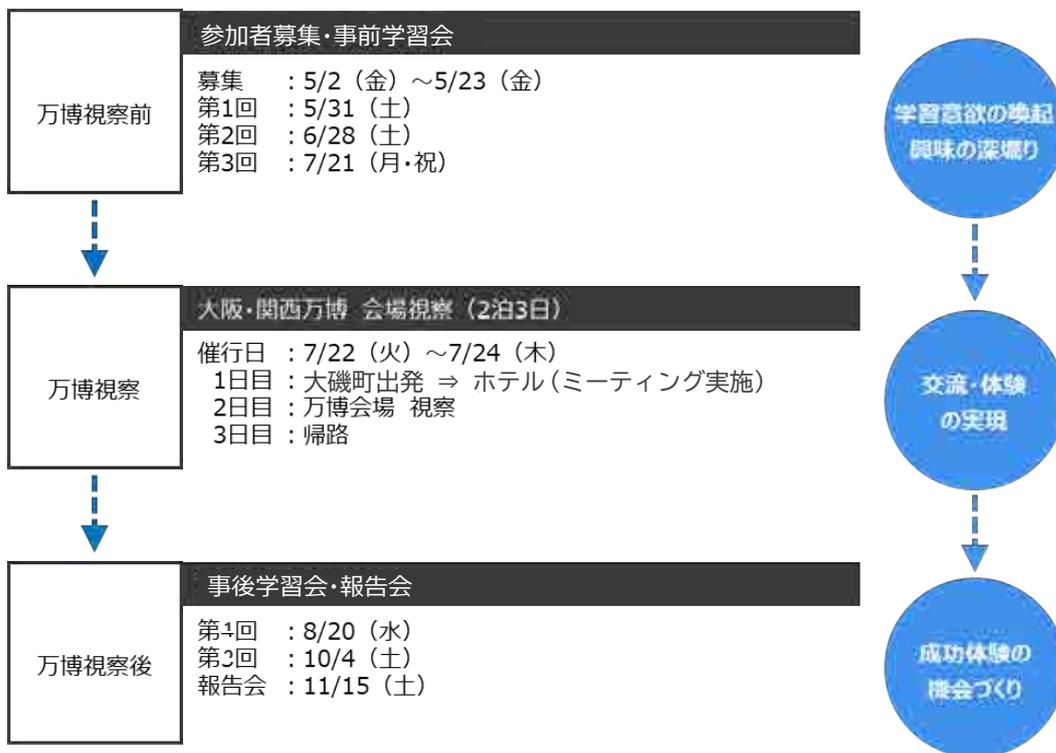
※JEDOVC とは、ウガンダ共和国に拠点を置く NGO 団体主に水や衛生環境の向上を図る活動を行っている

(2) 事業内容

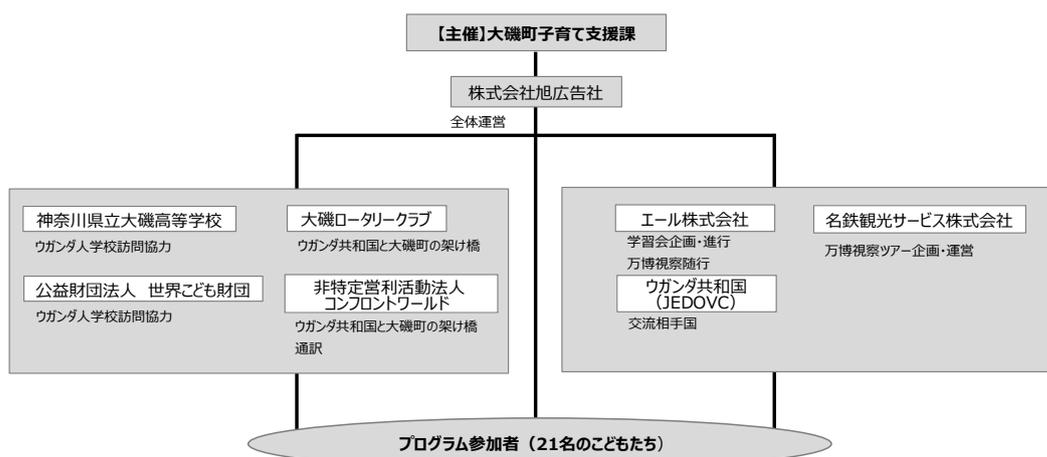
1) 事業名

大磯町万博国際交流プログラム

① スケジュール



② 体制



■ 参加者募集

募集期間：令和7年5月2日（金）～5月23日（金）

応募資格

- ・小学5年生から大学生相当（23歳未満）の町内在住・在勤・在学の方
- ・事前事後学習、大阪・関西万博訪問、報告会などすべてのプログラムに参加できる方

募集ツール 大磯町広報5月号
応募数 21名



内容 報道対応

NO.	報道日	報道に内容
1	2025.6.6	万博訪問に向けた事前学習会 記事（タウンニュース）
2	2025.7.23	大阪・関西万博 現地中継（FM 湘南マジックウェイブ）
3	2025.8.8	大阪・関西万博訪問 記事（タウンニュース）
4	2025.11.28	報告会実施 記事（タウンニュース）

■第1回事前学習会

5月31日(土) @大磯町役場

《学習テーマ》

わたしたちが主役！未来を描くグループテーマづくり



▶顔合わせをしながら、チームごとの学習テーマや万博で知りたいこと、何を調べていくかなどを話し合った。

■第2回事前学習会

6月28日(土) @大磯町役場

《学習テーマ》

グループで探究・わたしたちのなぜ？知りたい！を深めよう



▶各チームの学習テーマを深掘りしたり、万博で行きたいパビリオンなどを出し合った。

■ 第3回事前学習会

7月21日（月・祝）@大磯町役場

《学習テーマ》

ウガンダとつながろう。世界を知って、学びや問いを深めよう



▶万博の訪問計画について確認したり、一緒に万博に行くウガンダ人のディクソンさんとマーガレットさんを交えて大磯町とウガンダの関係やウガンダの現状、将来についてを話し合った。

■ 大阪・関西万博視察

7月22日(火)～24日(木)

全日程スケジュール

時刻	行程	内容
【7/22(火)】 17:00	大槻駅交番横 観光案内所集合	・欠席する場合は8:30～10:30までに現場へ電話する ※Tel 0463-61-4100 子育て支援課子育て支援係 ◆人数確認、出発式
17:15	大槻駅	・ホームでは静かに整列をする ・乗車後は他の方へ迷惑がかからないようにする
17:31 発	【東海道線】	・乗り継ぎを行うのてしっかり前の人に着いて行く
17:47 着	小田原駅	・新幹線内では、ほかの席に移動しない！
12:07 発	【ひかり641号】	・車内でお弁当(バック英付)を配布します ・降車後、はぐれないよう前の人にしっかりと行いで行くこと
14:27 着	新大阪駅	・降車後、はぐれないよう前の人にしっかりと行いで行くこと
14:50 乗車	【貸切バス】	・大型バスに乗り換えてホテルへ移動 ・降車の際、忘れ物が無いか確認しましょう ・バス乗内にて館内説明と方角を配布します
15:45 着	ホテル	・エレベーターで各自部屋移動します
18:00	9F会議室集合	・直前学習会(WiFi配信予定)
18:00	夕食	・必要資料、筆記用具など忘れずに！
18:30	直前学習会	・夕食後、学習会
19:30		
22:00	就寝時間	・明日に備えて、早めに就寝しましょう

時刻	行程	内容
【7/23(水)】 7:00～	朝食 (ビュッフェ)	・朝食会場には部屋のメンバーと一緒に食べる (バラバラに食べないこと)
8:45	ロビー集合	・集合前に各自、忘れ物が無いか確認しよう！
8:50 出発	【貸切バス】	・部屋のカギはフロントへ預ける ・必要な荷物のみ持っていく ・バスの中で、万博のチケットを配布します。 ・置くさないように！
9:30 着	大阪・関西万博	・バス下車後、現地のサポーターさんと合流
10:00 入場	西ゲート入口	・グループごとに会場内を見学 ・混雑が予測されるので、はぐれないように気を付けよう！(勝手な行動は厳禁) ・何かあった場合は緊急連絡先へ連絡しましょう
17:00 集合	西ゲート出口	・案内して下さったサポーターさんにお礼の挨拶
17:15 出発		・バスに乗車
18:00 到着	お好み焼き店	・夕食「お好み焼き」など大皿系物
19:30 帰		・全ての荷物を持って下車 ・食後、ホテルへ徒歩にて移動
19:40 到着	ホテル	・フロントでカギを受け取り部屋へ移動 ・部屋で荷物をまもめましょう
22:00	就寝時間	

時刻	行程	内容
【7/24(木)】 7:00～	朝食 (ビュッフェ)	・朝食はしっかり食べましょう！ ・朝食後、部屋に戻り荷物整理 ・落とし物、忘れ物がないように確認しましょう！
10:00	ロビー集合	・バスまで徒歩で移動します
10:05 発	【貸切バス】	・バスに乗車
11:00 到着	新大阪駅	・到着後、全ての荷物を持って下車 ・新大阪駅にて「お別れ会」をします ・グループに分かれて昼食、お買い物 (各グループ大人が1名帯同します)
13:45 集合	新幹線中央口	・新幹線ホームへ移動
14:15 発	【ひかり641号】	・新幹線内では、ほかの席に移動しない！ ・小田原駅到着後、東海道線に乗り換え
16:38 着	小田原駅	
16:40 発	【東海道線】	
17:04 着	大槻駅	・大槻駅付近にて「解散式」終了後、帰宅



随行関係者

【町職員】 <大磯町> 4名

池田 東一郎 (町長)
齋藤 永悟 (町民福祉部参事)
高橋 正寿 (町民福祉部 子育て支援課 担当課長)
田中 天馬 (町民福祉部 子育て支援課 子育て支援係 主事補)

【実施運営】 <株式会社旭広告社> 4名

中川 哲也 (企画制作部課長)
安藤 大輔 (営業2部 課長代理)
田中 亮 (企画制作部 デザイナー)
水間 康史 (RAMP IN Inc. 代表取締役)
<名鉄観光サービス株式会社 小田原支店> 5名
木村 哲也 (課長代理)
現地添乗員 4名

【訪問協力】 <エール株式会社> 3名

宮崎 雅子 (パラレルキャリア推進 ママ×地域活性化事業 事業リーダー)
兼平 麻季 (パラレルキャリア推進 ママ×地域活性化事業 運営メンバー)
香月 美穂 (パラレルキャリア推進 ママ×地域活性化事業 運営メンバー)
<特定非営利活動法人コンフロントワールド> 7名
荒井 昭則 (代表理事)
大崎 真幸 山下 颯太 岩尾 夏樹 木場 まり
落谷 友加李 廣川 康希

【来日ウガンダ人】

KIBIRIGE DICK (キビルゲ・ディック) MR
BIRABWA MAGARET (ビラブワ・マーガレット) MS

【内閣官房】 <近畿日本ツーリスト株式会社> 2名

小宮 めぐみ (公務・地域共創事務部 リーダー)
竹内 大翔

宿泊先 : 日和ホテル大阪住之江公園前 (大阪府大阪市住之江区新北島 1-2-1)

■大阪・関西万博視察

7月22日（火）大磯から大阪へ



■大阪・関西万博視察（現地直前学習会）

7月22日（火）@日和ホテル大阪住之江公園前 会議室

《学習テーマ》

いよいよ明日！視察を自分たちの学びにしよう



▶訪問するパビリオン決めや会場を1日で効率良く回るための最後の確認。ディクソンさ

んがウガンダで使われている実際のトイレ設備を紹介。これらの様子を YouTube にてライブ配信し、保護者の方にも見てもらった。

■大阪・関西万博視察

7月23日（水）万博会場にて



《訪問パビリオン》

全チーム共通 : BLUE OCEAN DOME、コモンズ A

A チーム : ロボット&モビリティステーション、フランスパビリオン、UAE パビリオン、国際機関パビリオン

B チーム : トルコパビリオン、サウジアラビアパビリオン、スペインパビリオン、夜の地球 Earth at Night

C チーム : フランスパビリオン、ベトナムパビリオン、PASONA NATUREVERSE

D チーム : PASONA NATUREVERSE、フューチャーライフビレッジ、コモンズ D

■第1回事後学習会

8月20日(水) @大磯町役場

《学習テーマ》

報告会で発表する内容の「設計図」をみんなで決めよう！



▶万博で気付いたこと、報告会で発表したいことなどを話し合い、万博で撮った写真を共有。

第2回事後学習会

10月4日(土) @大磯町役場

《学習テーマ》

わたしたちのメッセージが『伝わる』準備をしよう！



▶発表する内容を確認した最後の学習会。報告会本番をイメージして、チームごとに発表の練習をした。

■ 報告会

11月15日(土) 13:00~16:00 @ノジマ大磯スクウェア

来場者数：約260人

タイムスケジュール

時間	項目	LAP	内容
8:30	関係者集合 準備開始		搬入・設営 10:30SETUP
10:30	こども会場入り 〜リハーサル	60'	立ち位置、マイク、機材等確認
11:30	休憩	60'	2F和室で昼食(各自弁当持参)
12:30	受付開始		アンケート、次第、お菓子+ジュース(こどものみ)配布 キッズダンス会場入り
13:00	特別ステージ①	10'	Sakurayaキッズダンス
13:10	オープニング	03'	【ナインボール進行】
13:13	はじめのことば	02'	池田町長
13:15	動画視聴	05'	活動のダイジェスト動画
13:20	ワクワドキドキ報告会	60'	ABCD各グループ15分の報告(入退場・インタビュー含む)
13:45			菅原さん会場入り
14:20	修了証書授与	05'	池田町長よりチームリーダーへ
14:25	特別ステージ②	10'	ARTH DANCE COMPANY
14:35	休憩・転換	10'	(必要な場合はここで時間調整)
14:45	こどもまんなか講演会	75'	フリーザ・ザ・チルドレン・ジャパン(菅原氏) テーマ:「みんなで子どもの権利を守る世界をつくらう!」
16:00	ジャンケン大会	05'	ナインボール、池田町長
16:05	おわりのことば	02'	池田町長
16:07	記念撮影〜片付	05'	全員



※報告会チラシ



※報告会会場

■ 報告会 ～各チームの発表内容

A チーム / 大人になってわくわくできる社会とは

大磯町の魅力的な文化や自然をどうやって守っていくか？ それらを多くの人に知ってもらう活動を、大磯町の人から行っていこうと提案しました。インターネットでの動画配信、誰でも楽しめるイベント開催などのアイデアも披露して「大磯町の人で、協力して町を守ってゆく and つくってゆく」を提言！



B チーム / 世界の文化、伝統、取り組みを知り大磯町発展のヒントを伝えよう

みんなが訪れたパビリオンごとに担当を決めて、それぞれが大磯町に活かせること、考えられることを挙げて身近な問題としてリレー形式で順番に発表しました。最後には、学校も年齢も住む地域も違うメンバー同士の絆をアピール！



C チーム / 子どもたちが楽しく遊んだり学んだりできる施設の提案 <子どもにも地球にもやさしい施設作り>

子どもたちによる「世界共通の課題を解決するアイデア」を発表しました。万博で知った世界の現状や課題解決につながる技術などを通して、医療や森林伐採、伝統文化といった幅広いテーマを取り上げました。オリジナルクイズで会場を爆笑の渦に！



D チーム / 科学と伝統で大磯にぎやか物語

D チームの特長は、「人形劇」(ペープサート)での発表。かつて大磯町に住んでいた夫婦が、町を離れた理由そして戻ってきた理由を通して、大磯町や世界が抱えている問題を提起し、その解決の道筋を提案しました。脚本やイラスト、そして高い演技力でその思いをエモーショナルに伝えることに大成功!



■ 報告会 ~修了証書授与

Aチーム



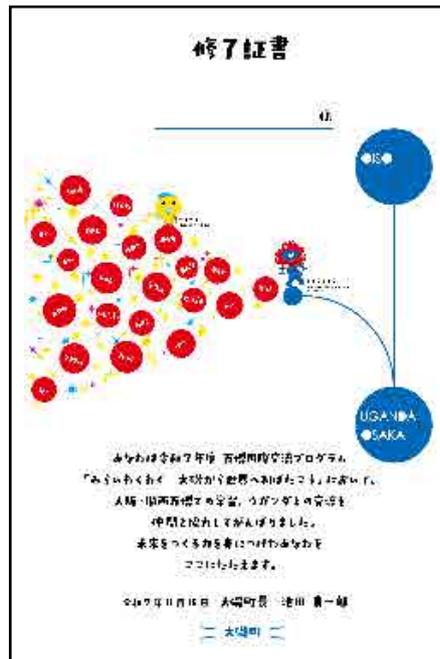
Bチーム



Cチーム



Dチーム



※修了証書

■ 報告会 ～その他のプログラム



特別ステージ① Sakurayaキッズダンス

総勢80名によるオープニングパフォーマンスを披露



特別ステージ② ARTH DANCE COMPANY

大阪・関西万博の閉幕パレードで20万人の前で踊ったダンスを披露



こどもまんなか講演会

「みんなで子どもの権利を守る世界をつくろう！」

認定NPO法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパンの菅原萌子氏による子どもの権利についての講演会。ゲーム形式で構成。



じゃんけん大会

町長vsこどもたちによるじゃんけん大会。勝ち残った3名にウガンダのバッグとオブジェをプレゼント。

内容 報告会～その他



③ 内容 報告会～その他



④ 効果

A:自治体内への波及効果

意欲あるこどもたちの掘り起こしができ、かつ「知りたい・学びたい・触れ感じたい」という意欲向上のきっかけを提供できたことで、今後の活動の広がりを期待できる結果が得られた。

報告会の発表で、各チームが町(町民)に伝えたいことを発表してくれたことで、町全体で今後の町のあるべき姿を考えていく一歩になった。

B:実施により達成できた成果

参加した大磯町のこどもたちが、地元・大磯町を改めて考える機会となっただけではなく、遠く離れたアフリカ・ウガンダ共和国の現状を当事者から直接聞くことができる貴重な機会となったことにより、国際交流によって得られる刺激と学びを実感できたものと考えられる。

この貴重な経験をしたこどもたちが、友人などにその感動を伝えることで、国際交流への関心と興味を拡散させる効果を期待できる。

C:相手国への波及効果

ウガンダ共和国から来日された方には、本プログラムに参加した大磯町のこどもたちとの交流や日本の学校訪問、そして、大阪・関西万博訪問などの機会を提供できたことで、日本の学校施設や衛生環境など、これからの母国での取り組みの参考として持ち帰ってもらうことができた。

(3) 事業の目標に対する成果

- ・ こどもたちが自ら考え、自分の意見を発信できる場づくり
11/15の報告会では、本プログラムにおいて学んだ成果や意見を大勢の人の前で伝えたる
ことができた。それまでの学習会においては、年齢の異なる参加者とチーム内で活発な意
見交換を行うことができた。
- ・ 「子どもの権利」や「SDGs」に対する正しい認識や理解を得る機会づくり
5/31の第1回事前学習会と11/15の報告会に併せて開催した「子どもの権利についての
講演会」(認定NPO法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパンの菅原萌子氏)では、ゲー
ム形式で学ぶことにより、より深い学びと気づきの機会を得られた。
- ・ アフリカ・ウガンダ共和国を中心とした国際交流の機会づくり
7/21の第3回事前学習会、そして、7/22~24の大阪・関西万博視察においては、ウガン
ダから来日した2人とこどもたちが常に行動を共にしたことで、日本とウガンダとの違
い、ウガンダの現状などを当事者からの話により理解することができた。

- ・ 大人向けにも「子どもの権利」や「SDGs 講座」などを同時展開
前述の「子どもの権利についての講演会」には、こどもだけでなくその保護者を中心とした大人にも多く参加いただいた。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

大磯町の次世代を担うこどもが、ウガンダ共和国との交流を通じて異文化に対する興味理解を深める第一歩となる。

主体的に意見を発信する力を身につけ国内外で広く活躍できる人材の育成につなげる。

こどもたちの成長・意識啓発に向けての今後の事業への成功例となる。

(5) こども（参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

- ・ 事前・事後学習会
各グループが目標を持って、課題及び大阪・関西万博の訪問や報告会に向けての準備を事前・事後学習会を通じて取組んだ。本学習会に参加したこどもたちは、課題に対して、自分で解決策を見出そうとする力「自己探求心」とグループで協力して物事を取組んでいく「協調性」を育むきっかけをつくれたと考える。
- ・ ウガンダ人との交流
大磯こどもサミット（令和6年度内閣官房事業）にもお呼びした、ウガンダ共和国の方を令和7年度の本プログラムでも大磯町に招待し、事前学習会（7月21日（月・祝））と大阪・関西万博訪問（7月22日（火）～24日（木））にこどもたちと一緒に参加した。
事前学習会ではウガンダの現状を話してもらい、大阪・関西万博の訪問ではこどもたちと一緒にパビリオンの見学を行った。
参加したこどもたちには、国際交流を通じて普段体験のできない貴重な経験を得る場を提供できた。
- ・ アンケート結果
アンケート結果から次世代を担うこどもたちの成長を期待する大人が多く「こどもたちが主体的に学べるイベントを今後も実施してほしい」などの声をいただいた。
町に届いた様々な意見を今後の事業に取り入れていきたいと考える。

(6) 特に良かった点、苦労した点

《良かった点》

- ・ アンケートでは、「これからもこのような交流イベントを増やしてほしい」「このような機

会をたくさん作っていただきたいです」「こんなイベントがあればどんどんやってほしい」「もっとやってください」など、“また参加したい”との希望が複数あり、参加者の満足度の高さが見られた。

- ・ 日常では関わることのないウガンダ共和国の人たちとの交流は、大きな刺激となっていた。
- ・ 同じ大磯町民でありながら、学校、学年、居住地域が異なるために接点がなかった人たちが、知り合い協力して絆を深める機会を生むことができた。

《苦労した点》

- ・ 塾や習い事、部活動などと重なって学習会にこどもたちが参加できない日程もあった。ただし、グループ内で協力し、SNS等を使用することにより、学習内容の共有や意見交換を積極的に行っていた。
- ・ 大阪・関西万博視察では、特に暑さ対策に細心の注意をはらった。

(7) 今後の展開

自治体で自走して取組を継続させるための方策についても合わせて記載をお願いします。大磯こどもサミット（令和6年度内閣官房事業）や令和7年度の本プログラムから引き継ぎ、こどもたちの意識啓発の場をつくと共に次のことをめざすべき形として取組んでいきたいと考えている。

- ・ 大磯町をフィールドとする多様な体験
- ・ シビックプライドの醸成
- ・ 多様な体験に基づくキャリアデザイン
- ・ 持続可能なまちづくりを担う大人への成長
- ・ 社会を動かす次世代リーダーの育成

(8) 今後の展開における課題

こどもたちがインターネット上だけで情報収集をするのではなく、こどもたちの知識・スキル・人間性・主体性の育みの場として体験学習の機会を多く取り入れていきたい。